

神・密神・門神・司倉神・都城隍神・后土神・先醫關帝諸功臣忠臣等あり、これを祭祀の諸神靈とす。

六、政治

要旨

清國の政體及び中央政府の組織の概要を知らしめ、更に地方行政の一斑を教ふると同時に、近年清國が諸般の制度を改善して、中央集權の實を擧げんことを圖り、且、陸海軍の擴張・充實に力を用ひ、以て大に國運の發展を期しつゝあることを悟らしむるを要す。

本文解説

清國の政體は既述の如く君主專制にして、國を治むるの權は皇帝の專有に屬するなり。中央政府には我が國に内閣・各省あるが如く、其の首腦は軍機處及び内閣にして、内閣

政體・中
央政府

の次ぎには外務部・民政部・度支部・陸軍部・法部・農工商部・學部・郵傳部等あり。之を我が國に比すれば外務部は外務省、民政部は内務省、度支部は大藏省、陸軍部は陸軍省、農工商部は農商務省、學部は文部省、郵傳部は遞信省に當り、其の外、我が國の海軍省・司法省に當るものもありて、其の上に内閣あるを見れば、形式上我が國の中央政府と酷似すれども、更に其の上に軍機處あるは其の一大特色とせざるを得ず。抑、軍機處はもと軍國の當時に於て、特に組織せられたるものにして、本來の性質は我が參謀本部の如きものなれども、有爲の人才を多く集めたるため、遂に内閣に於ける政務の實權を奪ひ、内閣は虚器を擁して、唯、名のみを留むるに過ぎざるものとなりたるなり。故に軍機處と内閣とは之を併せて我が國の内閣に相當するものと見るを得べし。其の他な

地方區分

ほ清國特有の官省あり。禮部理藩部の如きは之にして、禮部は古來特に重ぜらるゝ、禮樂式典に關する事務を掌り、理藩部は藩部に關する事務を處理する所にして、藩部とは普通の地方と異り、略屬國の如き關係を有する地方をいひ、蒙古・西藏・青海は即ち之なり。普通の地方は直省と稱し、從來支那本部のみに限られ、之を十八省に分ち、清國の主部たるところなり。其の他の滿洲は現朝の發祥地なれば、從來其の省に分たるゝ點に於ては支那本部と同一なれども、首腦部の組織は略中央政府に類し、外觀上特に重きを措かれたるところなりき。然るに近時滿洲は本部の各省と全然同等の取扱を受くるに至り、從來藩部たりし西邊の新疆も亦直省に編入せられたり。故に清國は今や行政上二十二省三藩部に分たるゝなり。

地方行政

直省には各巡撫を置き、其の上に二省若くは三省を併せて總督を置くを常規とすれども、往々一省に總督のみを置き、或は巡撫のみを置けるもあり。而して總督又は巡撫の權限は我が國の朝鮮總督などよりは一層甚大にして、文武の兩權を總べ、各省は行政上より見るも殆ど一の獨立國たるの觀を呈し、中央政府に掣肘せらるゝこと甚だ少し。故に清國の行政上に於ける現状は、我が國の維新前に於ける藩制の當時に酷似する所あり。藩部の行政は殆ど政教一致の状態にして、住民の深く歸依する喇嘛教の教主は又政治の實權を握りて、隱然獨立國王の面目を保ち、中央政府の官吏駐在すれども、其の監督は殆ど名のみなるに過ぎず。随つて全國政治の統一上に缺くること少からざるは、清國不振の一原因たるべく、今や清國は荐りに官制を改革し、政

權の振興を圖り、又立憲政治の實施に關して力を用ふれども、而も其のよく中央集權の實を擧げ、上下皆一致協力して、國運の發展を期するに至るは前途遼遠なるべし。

参考

四一、清國の政治及び中央政廳

政體は君主專制なれども、近年立憲政體に改むることに決し、光緒三十四年七月の上諭を以て、爾後九年を期し國會を開設すべきことを公布し、既に憲法の編成に著手し、準備の一として、光緒三十四年博く群言を採るの精神に基き、中央に資政院、各省に諮議局を設けたり。行政機關の組織は從來主として大清會典に則りたれども、時勢の進運に適合せざること益、甚しきに至り、光緒三十二年舊來の官廳を廢置分合せしのみならず、新なる官廳をも創設せり。又現朝特設の制度たる滿漢箝制の法ありて、國家樞要の職務には滿漢人を並用せしが、これ亦改革せられて、滿漢を論ぜず、廣く人材を登用することとなり、茲に清國は制度上一進歩をなすに至れり。中央官廳は左

の各部より成る。

軍機處——軍機處は雍正年間兵を西北兩路に用ふるに及び、軍國の機務を策畫する補弼機關として、始て設置したるものにして、もと内閣の一分局に過ぎざりしが、後之を獨立の官廳となせり。而して其の所在宮廷に近くして、宣召に便に、且、軍機大臣たるもの皆親王重臣たるを以て、漸く内閣の實權を奪ひ、一切政務の樞機盡く此に歸し、遂には其の本來の軍國の大事を策畫する職權の外に、君主の最高顧問府たるのみならず、最高の統治機關となるに至れり。

内閣——内閣は元來國家の最高機關にして、老練博識の學士を以て組織し、重要な機務を審議處理せしめたりしが、順治康熙を経て雍正に至り、軍機處を新設したる後は、内閣の實權漸く去りて、軍機處に移り、今や恒例に屬する奏章の敷奏、詔勅の頒布等を掌るに過ぎず。

政務處——軍機處は其の名實相副はざるものあるのみならず、組織不完全なるが爲め、往々最高議政府たるの實權を遂行する能はず、政務益、多端にして、益、其の澁滯を見るのみに至りしが、北清事變以來舊來の積弊を除

き、且外國の良制を參酌して、政治の革新を計るの必要を痛切に感ずるに至り、政務處は此の目的を達せん爲め特に設立せられたるものにして、軍機處の職權を分割し、其の軍國の政に關するもの、ほか、一般政務の方針は之をして審議せしむることゝなせり。光緒三十三年九月其の名を會議政務所と改めたり。大臣は軍機大臣及び各部尙書をして之を兼ねしめ、又地方長官は君主の特旨に依り、參預政務大臣に任ぜらる。

外務部、農工商部(我が農商務省に當る)、學部、度支部(我が大藏省に當る)、陸軍部、法部、郵傳部(我が逓信省に當る)、民政部(我が内務省に當る)、海軍部は我が國に於けるもの、如く、其の他に吏部、禮部、理藩部あり、吏部は文官の銓考、任免、黜陟及び封爵等に關する事務を管掌すされば、支那本部は勿論、滿洲、蒙古、西藏地方の駐在文官並に理藩部の管轄たる蒙古、青海地方の親王、郡王の嗣職に關する事務も、總て吏部の職權に歸すれども、武官の任免、黜陟は全く其の與知せざる所とす。禮部は禮樂式典に關する事務を管掌す。支那は古來特に禮樂を重んじ、之を以て政務の要件としたれば、此の一部を特設したるものなり。而して典禮とは國法に規定せられたる諸禮にして、分ちて嘉禮(皇太后及

位・尊號の册立等 吉禮(先天地日月太廟歷代帝王を祭る) 軍禮(親征・命將、獻俘の禮) 賓禮(諸外藩朝貢・使節の接待等) 凶禮(先帝皇后の大喪、皇貴妃の喪等) の五種とす。

理藩部は一箇の特設官廳にして、支那本部、滿洲、新疆省を除き、所謂藩屬たる蒙古、西藏、青海地方の政務を管掌するものにして、近世諸國の殖民省と稍、相似たるの觀あり。其の權限は各地方の首長に關する封爵を掌ること、各地方の首長には親王、郡王、貝勒、貝子等の有爵ありて、是等は毎年一回北京朝廷に參賀し、各其の地の方物を獻するを例とするが故に、此の場合の應接、饗宴等の事を掌ること、藩屬地方には文武官を駐紮せしめて軍事、外交の權は政府自ら之を收むるも、内政は之を指揮、監督するが故に、是等の地方の行政を監督すること等とす。

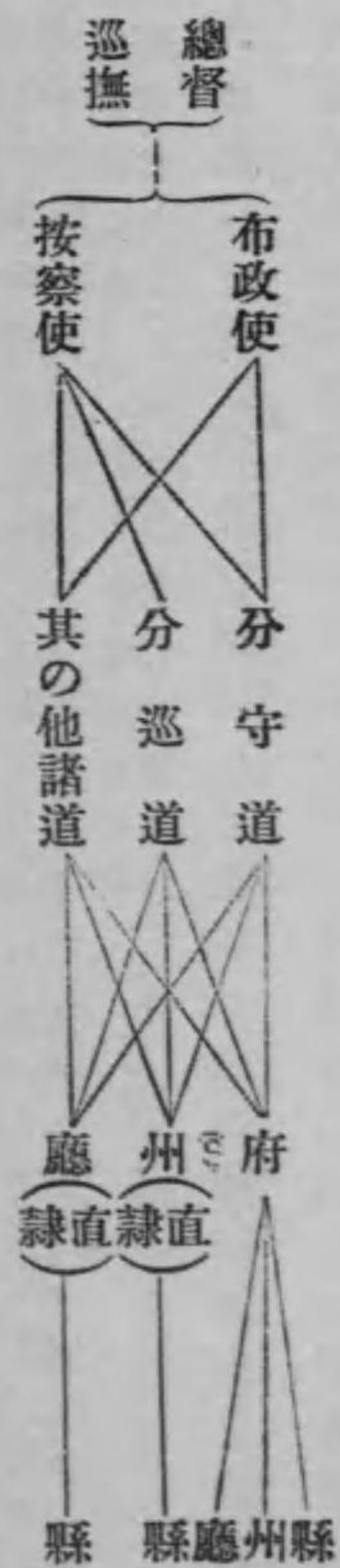
四二、直省行政區劃及び地方廳

地方は支那本部を十八省に、滿洲を三省に分ち、之に新疆省を加へて直省といふ。各省には一人の巡撫を置き、更に二省乃至三省を合併して一大區劃を作り、總督を以て之を總轄せしむるを定制とすれども、各省について見るに、或は兩者並設するあり、或は總督にして巡撫を兼ねるあり、或は總督を

置かずして、單に巡撫のみを置くありて、其の制劃一ならず。

總督・巡撫の權限は原則としては區別あり、即ち總督は軍政、民政を併掌し、巡撫は單に民政を掌るものとす。されど現今に於ては品級上些少の高下あれども、職務上の關係に於ては殆ど平等にして、巡撫が一省の最長官なる場合には其の職權全く總督と同じ、二省並置の場合に於ても、兩者の間に統屬關係あるにあらず、即ち巡撫は總督の指揮を承けて其の職權を行ふものにあらずして、共有の職務は合議を以て之を行ふものとす。

總督・巡撫の下に布政使・按察使あり。布政使は一省の民政を掌るの重職にして、按察使は主として一省内の裁判を掌り、兼ねて一般の政務に參與す。共に總督・巡撫に直隸する地方の重官たり。各省の行政區劃、各區劃の統屬關係を示せば大略左の如し。



道若くは道員と稱するものには種々あり、督糧道、鹽法道、兵備道、河工道、海關道、分守道、分巡道等是なり。其の中、分守道と分巡道とは其の所管區劃に於ける一切の行政事務に關して職務を行ひ、其の他の道員は糧米、鹽稅、茶稅等に關する特殊の職務を有するものなり。されば分守道、分巡道は大概一地域を管轄する道員にして、其の他の多數は全省を管轄するの道員なり、隨つて前者は概ね數府州を合はせて其の管轄區域とし、衙門を該區域内に置き、守土の責あれども、後者は概ね衙門を省城に置き、守土の責任なきものなり。而して此等の各道は多くの場合に於ては相互兼管をなすものなり。分守と分巡とはもと布政使の次官たるものが各道を分守し、按察使の次官たるものが各道を分巡せしに本づくものなれども、現今は唯名義上の區別に止り、其の職務の實質は同一なりとす。各府に知府、各縣に知縣あり、各管内一切の政務を統轄する牧民官なれども、知府は寧ろ道員以上のものと同じく、監督官たるを主とし、知縣に至りては眞正の牧民官にして、親しく人民の上に立ちて一切の治務に任ずるものなり。縣の外、州及び廳を以て最下級の行政區劃とし、各州に知州、各廳に同知或は道判を置き、其の管内の治務

をなさしむ。而して此の二區劃には直隸に屬するものと否らざるものと
の別あり。前者は道を通じて直に布政使の統督に屬し、其の法律上の地位、
府と相同じ。

四三、藩部新疆省の行政

内外蒙古、西藏を總稱して藩部といふ。藩部の事務に關しては、内に理藩
院あり、外に將軍、都統、大臣等の派遣官ありと雖も、清國政府は唯主權を有す
るに止り、内部の行政は總て世襲の酋長若くは喇嘛之を行ひ、政府は之を監
督するに過ぎず。

内蒙古に在りはて部落の最も小なるものを旗となし、旗を合せて部とな
し、部を合せて盟となす。總て盟六部二十四旗、四十九あり。

外蒙古に於ける種族には喀爾喀及び杜爾伯特、杜爾扈特、和碩特の一部あ
り。此等の種族は皆各盟若干を有し、各盟又部族に分つこと内蒙古に同じ
く、喀爾喀に四盟ありて六部八十六旗に分れ、杜爾伯特に二盟ありて四部十
五旗に分れ、杜爾扈特に五盟ありて十二旗に分れ、和碩特は一盟とし、三旗に
分る。

内外蒙古—内外蒙古に於ける行政機關には自治と官治との別あり、自治
機關は旗に旗長、盟に盟長を置き、其の領内の行政をなさしむ。旗長は蒙
古語にて札薩克といひ、一族の長として領地人民を有し、皆古昔獨立の酋長
にして、國初以來内附せしものたるを以て、清朝も亦務めて懷柔手段を施し、
封爵の如きも宗室に同じく、親王以下公に至るまでを授け、又外蒙古にあり
ては舊時汗號を有せしものに對しては特に名号之を用ひしむ。其の領内
の行政に關しては理藩院若くは將軍、都統、大臣の監督を受くれども、實際何
等の掣肘を受くることなし、唯毎年羊、酒、馬等の進貢、毎年正月元旦の朝賀、皇
帝遊獵の時の扈從の義務を有するのみ。盟長は各旗の重大なる事件を總
理せしむるがため、札薩克中の德望ある者を選び、政府の任命せるものに
して、各札薩克の上に立てども、其の札薩克たるの點に於ては同一にして、只
各旗に於ける重大の事件は兩者の合議を以て之を行はしむるに過ぎず。
官治機關は即ち派遣官にして、都統、將軍、大臣の別あれども、内外蒙古に於て
各派遣官の職權に多少の相違あり。内蒙古は内附の日久しくして、清朝の
德澤を蒙むること深く、科爾沁部の如きは、其の朝廷に對する親密の度、滿洲

人に譲らざるものあり。故に内蒙古に在りては、熱河察哈爾の二都統の外は別に駐防員を設けず、各札薩克をして専ら部下の兵權を握らしめ、事あるときは中央政府より徵發す。外蒙古に在りては内部の行政は其の自治に任ずと雖も、兵權に至りては之を所在將軍若くは大臣の統制に歸す。

(一) 熱河都統は熱河に駐在し、専ら遊牧蒙古を治むと雖も、其の地本部に近きが故に、内地人の塞を出て、開墾する者多く、蒙古人亦遊牧の故俗を去りて内地人と一様に耕作するに至りしを以て之を直隸省に編入し、熱河の南部にあたり承德府を設けたり、故に都統たる職權より論ずるときは獨立の地歩を占むと雖も、一般民治に關しては直隸總督と合議するを要す。

(二) 察哈爾都統は張家口(蒙古語カ)に駐在し、西、長城より戈壁の沙漠に至り、北、哈爾略に至るまで各地に散在する察哈爾及び其の他の遊牧部落を管轄す。但、張家口は今直隸省内に在るを以て、同所に於ける漢民の事件に關しては、直隸總督と合議するを要す。

(三) 綏遠城將軍は山西綏遠城に駐在す。土默特遊牧の内屬せしもの皆其の直接管轄に歸す、其の地直省内に在るを以て一般の民政に關しては山西

巡撫と合議するを要す。

(四) 定邊左副將軍は外蒙古の西部なる烏理雅蘇台を居城とし、喀爾喀諸部を統制す。一に烏理雅蘇台將軍といふ。其の指揮の下に在りて所轄諸部を治むるものに定邊等地方參贊大臣、烏理雅蘇台參贊大臣、科布多參贊大臣あり。

(五) 庫倫辦事大臣は外蒙古の庫倫(又カ)に駐在して、露國との交渉事件を掌る。定例によれば大臣二人を設け、一は在京滿洲蒙古大臣内より選任し、一は喀爾喀札薩克内より特任す。補助官として、理藩部より官吏を派遣し、大臣を助けて同地に於ける貿易裁判警察の事務を掌らしむ。又恰克圖に辦事司員一人あり、庫倫大海の節制を受けて露人との貿易事務を監理す。

青海地方——西部蒙古の種族にして青海一帯の地及び西藏の北境に散在するものを總稱して青海蒙古といふ。分ちて二十九旗とす。各旗に札薩克あることはなほ喀爾喀諸部に於けるが如し。唯青海には盟長を置かず、西寧辦事大臣をして之を攝せしむ。西寧辦事大臣は中央政府の派遣員として青海地方監督の唯一機關にして、甘肅省西寧府に駐在し、青海の軍政を

掌ること一に定邊左副將軍に同じ。

喇嘛一内外蒙古及び青海地方には札薩克に依りて支配せらるゝ外に土地人民を私有するものあり、之を喇嘛といふ。喇嘛は西藏の達賴喇嘛、班禪喇嘛を以て最も尊貴とすれども、兩者以外に喇嘛の尊號を有して、或る蒙古部落の主長となり、教權と政權とを併せて之を掌握するものあり、例へば内蒙古の錫呼圖庫倫札薩克喇嘛、喀爾喀の哲布尊丹巴呼圖克圖札薩克喇嘛、青海の察汗諾們罕等にして、此等は普通の喇嘛僧たる外に、札薩克たるの實權を有するものにして、中央政府及び派遣官の之に對すること、なほ札薩克に於けるが如し。

回部一回部は初め將軍大臣を置き、専ら軍政を掌らしめしが、光緒の初年に於て新疆の一省を置き、巡撫以下州縣官を設けしより、軍政民政併せ行はれて今に至れり。將軍及び大臣は純粹の民治に關しては新疆巡撫との合議を要すること勿論なれども、軍政に關しては其の獨斷專行に依り、同等の掣肘を受くることなし。下級の行政はなほ部落の自治に任じ、其の機關に伯克及び札薩克あり。伯克は元來回民間に於て其の會長を呼ぶ號にして、

内外蒙古及び青海の札薩克が汗王公の爵を受け、其の多くが世襲替ることなきに反し、伯克は其の職に依り、三品以下七品官相當にして、待遇較、輕く、又其の任命も世襲法に依らず。札薩克は新疆内哈密吐魯番地方に於ける回民部にあり。此等は蒙古部落より出てたるを以て、其の組織亦蒙古の如く旗あり、札薩克ありて、朝廷より王貝勒等の爵を給與すること、一に蒙古の札薩克の如し。

派遣官に伊犁將軍あり。惠遠城に居り、新疆各地に駐在する參贊領隊辦事協辦の諸大臣を統督し、天山南北路の軍政を掌り、邊防の事に任ず。

西藏一西藏には達賴喇嘛、班禪額爾德尼喇嘛あり。域内に於ける政教二權の主長たり。皇帝は駐藏大臣を経て、政治上の訓諭をなすと雖も、一般の内政は全く其の自治に任ず。二大喇嘛の下に各種の行政機關あり、大別して二となす。一は喇嘛にあらざる齊民の官吏となりたるもの即ち唐古特官にして、一は喇嘛の行政官を兼ねるもの即ち喇嘛官とす。中央政府より派遣の駐藏辦事大臣は首府拉薩に駐在す。青海と西藏との境に柴達木といへる地方あり。茲に棲息する蒙古人を達木蒙古と稱し、八旗に分れ、皆駐

藏大臣の直轄に歸す。

四四、總督・巡撫の配置

(行政區分)(合稱)		(總督駐在地)	(巡撫駐在地)
直隸省		保定(現時は天津)	
山東省			濟南
山西省			太原
河南省			開封
陝西省			西安
甘肅省	(陝甘)		蘭州
新疆省			迪化
江蘇省			蘇州
安徽省	(兩江)		江寧
江西省			安慶
湖北省	(湖廣又は兩湖)		武昌
湖南省			長沙
(行政區分)(合稱)		(總督駐在地)	(巡撫駐在地)
四川省			成都
雲南省	(雲貴)		雲南
貴州省			貴陽
浙江省	(閩浙)		杭州
福建省			福州
廣東省	(兩廣)		廣州
廣西省			桂林
奉天省			奉天
吉林省	(滿洲)		吉林
黑龍江省			齊々哈爾

四五、兵備

(一)陸軍

陸軍の編制は、之を大別して、八旗・綠營・勇營・練軍・新軍及び巡防隊の六種となすを得べし。

八旗は滿洲人・蒙古人及び漢人を以て組織せる軍隊にして、旗色に依り、これを正黃・鑲黃・正白・鑲白・正紅・鑲紅・正藍・鑲藍の八旗に分つ。更に之を分ちて禁旅八旗・駐防八旗の二種とす。禁旅八旗は北京に駐在する八旗にして、滿洲軍・蒙古軍・漢軍各自に營を立つ、各八旗あり、合して二十四旗とす。駐防八旗は三軍相合して營を立て、畿輔・駐防外省・駐防・陵寢・駐防の別あり、畿輔・駐防とは直隸省一帶に駐在せる八旗をいひ、外省・駐防とは直隸省以外の十七省及び東三省・蒙古・新疆省に駐防せる八旗をいひ、陵寢八旗とは主として歷代の陵寢守衛の爲め駐在せる八旗をいふ。

綠營は漢人のみを以て組織せる軍隊にして、旗色に綠を用ふるが故に其の名稱あり。在京綠營と在外綠營との別あり。在京綠營は即ち巡捕五營にして、歩軍統領に隸す。在外綠營は皆督標・撫標・提標・鎮標・軍標・河標・漕標に

綠營

八旗

陸軍

勇營

分屬す。綠營の管轄總督に屬するを督標といひ、巡撫に屬するを撫標、提督に屬するを提標、總兵官に屬するを鎮標、四川成都將軍に屬するを軍標、河東、江南河道總督に屬するを河標、漕運總督に屬するを漕標といふ。各標は又之を協營に分ち、協は副將之を管し、營は游擊參將都司若くは守備之を管す。綠營兵は近時新軍の陸續編制せらるゝに及び、次第に裁撤せられ、今や大に其の定額數を減じたり、其の中或は巡防隊に改編せらるゝものあり。

勇營は八旗綠營以外に編成せらるゝ臨時の召募に係る兵なり。初め戰役に従ふものは八旗綠營即ち額兵のみなりしが、内亂に當り、綠營功を奏せざりしかば、臨時召募の兵を用ひて之を平定し、爾後新に勇營を編成して漸次綠營を裁撤するの方針を取るに至れり、勇營の著名なるは、湘軍、淮軍とし、其の他楚勇、廣勇、潮勇等の如く、勇を以て名づくるものは皆勇營に屬す。但し近年は多く召募せず、其の舊きものは綠營と同じく、巡防隊に編入せらるゝもの多し。

練軍

練軍は八旗若くは綠營の中より、精壯なる兵丁を挑選して訓練せる軍隊にして、其の起原は同治初年に在り。其の後練軍を編成せるものは江西、江

新軍

蘇、直隸、山西、閩、浙、廣東、山東、湖南、南、甘肅等の各省にして、就中直隸練軍の如きは一時營制の整頓せるを以て名ありしが、近年新軍の編成せらるゝに及び、練軍の新設を廢し、舊來の練軍は概ね巡防隊及び新軍に改編せられたり。

新軍は光緒三十年八月の新軍制に準據して編成せるものに係れり。洋式を以て訓練せる軍隊にして、志願兵を募りてこれに充つ。光緒二十一年兩江總督張之洞自強軍を編成す、之を新軍の嚆矢とす。近年冬省皆上諭を奉じ、務めて新軍を編成し、既に全國に十八箇鎮を數へ、更に擴張して三十六箇鎮を設置するの計畫あり。巡防隊は一に防營といふ。光緒三十二年五月陸軍部奏定の巡防隊新章に照し、各省に於て舊有の綠營、勇營、練軍を改編せる軍隊にして、新軍と共に新式を以て訓練せらる。唯其の編成の目的が専ら巡警防備の爲めに在るを以て、形式上之を區別するに過ぎず。但し新軍完成の曉には其の存置の必要を見ざるに至るべきを以て、近年或は之を裁撤するものあり。

要するに清國の陸軍は、其の初め八旗綠旗の二種なりしが、太平積弱の結果、有事の日充分に其の用をなさざりしが、故に、臨時兵勇を募りて戰闘に従

新軍制

事せしめ、勇營の制を馴致せしが、幾くもなくして廢弛し、又一時練軍の編成行はれたりしが、これ亦目的を達する能はず、遂に新軍を編成するに至れり。故に清國軍隊の稍、整備せるは獨り新軍あるのみ。今新軍制に依れる軍隊編成の大要を記すれば左の如し。

新軍制は、範を我が國に取りしものにて、軍隊の編成、大體に我が國と唯其の名字を異にするものにして、例へば平時に於ける軍隊編成の最大なるもの即ち師團を鎮、旅團を協、聯隊を標、大隊を營、中隊を隊、小隊を排、分隊を棚とし、鎮は兩協、協は二標、標は三營より成るが如し。歩隊、馬隊、砲隊等其の編成に稍、異同あること亦我が國に同じ。歩隊は一營を前後左右の四隊に分ち、隊は三排に分ち、馬隊は一營を前後左右四隊に、隊は二排に分ち、二棚に分ち、陸路砲隊、過山砲隊は共に一營を中左右三隊に、隊は三排に分ち、三棚に分ち、工程隊、輜重隊は歩隊と同じく一營を前後左右の四隊に、隊は之を三排に分ち、排は之を三棚に分つ。軍樂隊は一隊に一排あるのみ。要するに、各一鎮には歩隊、兩協、馬砲隊各一標、工程隊、輜重隊各一營、軍樂隊一排を設くるを以て定制とし、鎮を統ぶる者を統制官又は鎮統といひ、協を統ぶるもの

海軍

を統領官又協統といひ、標を統ぶる者を統制官又は標統といふ。營は管帶官之を管し、隊は隊官、排は排長、棚は正目之を管す。若し戰時に際して、軍を編するときは之を統轄する者を總統官といふ。

(二)海軍

海軍は陸軍に於けると同じく、舊有のものは漸次頽廢に歸したれば、咸豐以來水師の實效を收めんと欲し、銳意營制を改め、以て其の整理に務めたり。長江水師の編成せられたるは實に此の時に屬す。其の後光緒七年に至り北洋水師を始めとし、南洋水師、福建水師、廣東水師を編成せり。然るに日清戰役に當り、海軍艦隊殆ど全滅せり。近年陸軍の改革と共に海軍を復舊し、軍港を新設せんとするの議に起り、軍艦の本邦其の他米、英、獨等に於て新造せられ、又注文中のもの少からざれども、未だ其の最大艦と雖も、排水量四、三〇〇噸の巡洋艦を見るに過ぎず。海軍の復興はなほ前途遼遠なるべし。

七、北部地方

要旨

支那本部の地勢上三部に分たるゝの現状を問答して、北部の地勢・氣候・産業等の状態に及び、更に主要都會の分布及び都會現状の大要を知らしむると同時に、此の地方の我が國及び他の外國との關係を明にし、又萬里の長城につき説明するを要す。

本文解説

支那本部の南嶺山地以南が天然の一區分をなせることは一見明瞭なれども、南嶺以北の東部には廣漠たる支那平原の横はれるありて、其の間に地勢上の境界物を見ざるが如きなれども、北嶺山脈の一派と山東半島の山脈とは相呼應するの状をなせるを以て、此の兩者を連ねたる一線以北、即ち北嶺山脈及び山東半島以北の黄河・白河等の流域は之を北部と見るを得べし。此の地方の平野は概ね黄土の厚

北京

層より成り、層高の甚しきものは數百尺以上に及び、其の質輕鬆にして、乾燥すれば灰燼の如くなるを以て、陣風一たび來れば所謂黃塵萬丈の現象を生せしめ、不快言ふべからずと雖も、雨水に遭へば良好の沃土となり、殆ど肥料を施さずして、小麥・豆・棉・大麻等の畑作物を收穫せしむ。故に農業盛に行はれて、人口の密度大に、繁盛なる都會亦少からず、殊に黄河の沿岸は實に東洋文化の發祥地にして、現朝の首府は白河の流域に在れども、古來多くの王朝は概ね此處を中心として興廢せしなり。随つて舊蹟に富めることも國內第一に位す。先づ北京及び沿海地方の主なる都會について調べ、次に黄河の流域を観察すべし。

清國の首府北京は白河中流の平野に位し、海岸を距る約五十五里の内地に位し、西北の兩方より東北にかけては稍

遠く山岳の起伏せるありて、天然の要害を成せども、南及び東は平野一望天に連りて際涯なく、交通は運河の白河に通じ、街道の四出するものあるの外に、近年開通せる鐵道の集中點にあたり、其の便至大なり。工業の見るべきものなしと雖も、清國第一の商品消費地なれば、貨物の輻湊極めて盛なり。其の人口については從來多きは二百萬以上と推定せられたれども、最近の調査によれば約八十萬を數ふ。清國の首府としては人口過少の觀なきにあらず、これ此の地が從來單に政治上の中心として發達せしに依るなるべしと雖も、將來國勢の振興に伴うて、其の諸般の方面に著しき發達をなすべきは殆ど疑を容れざる所とす。全市の廣は約二十五平方哩に及びて略、我が東京と等しく、内城と外城とに分れ、四方に墻壁を繞らせども、普通の支那城市が、奉天

などに於て見たるが如く、市街の中央を内城とし、之を繞りて外城の構へられたると趣を異にし、其の内城は市街の北部に位し、稍東西に長き不正長方形にして、外城は之に接して南方を抱けり。内城は一に滿洲街と稱せられ、之を圍める墻壁は周圍約六里に及び、外城と同じく煉瓦造りなれど、規模は著しく大にして、高さ厚さ共に四十尺に達せり。皇城は内城の中央に位し、其の四周及び皇城の一部は中央官衙、禁衛軍各國公使館等の所在地にして、由來商業地點にあらざれば、店舖の盛況は外城に若かずと雖も、近年日本人を始め、外人の銀行、旅舍、雜貨店を開設するもの多くして、他の市街と大に面目を異にせる所なきにあらず。

外城は廣袤稍、内城より大なるも、其の全面積の過半は寺院、田園等にして、主なる市街は内城の墻壁に接したる部分

にして、内城の正門外の大通りを中心とし、其の左右の街衢は大小の店舗櫛比して、金碧燦爛たる店頭、の裝飾人目を眩し、車馬の往來織るが如く、實に北京商業界の中心地點をなせり。一般に都城經營の規模雄壯なること、支那に冠たること勿論にして、街路の如きも比較的廣濶に、大街に至つては幅十間に餘る所あり。從來荒廢に委せられたるを以て、凸凹起伏甚しく、加ふるに輕鬆の土質なるが故に、晴雨共に交通を妨げ、又不潔なること見るに絶えざるの狀態なりしが、近年街路の修理、改築に注意するに至り、大街中には略、我が東京市の大通に於て見るが如く、中央を人道及び輕車を馳する所とし、其の左右兩側を重車道とし、兩側に溝を設けて排水に便し、碎石及びセメントを用ひて地盤を固め、兩邊に楊柳を植ゑ、街燈を設くる等、施設の見るに足るもの少からず。

天津

らず。

天津は白河の下流に跨り、河口を距ること水路約四七哩、北京を距る汽車程八七哩、白河の水運を有するが上に、大運河を始め、其の他の運河の會合點に當りて、從來北京に向つて輸送せらるゝ貨物は概ね此の地を經由せざるなく、又北清地方及び蒙古地方の輸出品も亦多くは一旦此の地に集中するを以て、天津は單に北京の咽喉たるのみならず、北清及び蒙古地方に對しても、貨物の大吞吐口に當り、商況の盛なること北清の諸商市中、著しく頭角を露し、清國屈指の開港場たり。而して冬季は河海凍結して舟運の便を絶つて、不便あるのほかに、近年一方には白河の堆積作用益盛にして、外洋通ひの汽船は白河河口の遙か沖合に投錨し、小汽船によりて貨物、旅客の積卸をなすが如き不便を見るに至り、

且、鐵道の發達の爲め、各地の貨物の直に北京に輸送せらるゝもの漸く多きを加ふるに至りたれども、又一方には本市が鐵道の爲めに受くる利便の少からざるが上に、北清地方の産業漸次盛況に向ひつゝあるを以て、本市は單に舊來の面目を維持するに止らず、益、繁榮を加へて將來長く北清經濟界の中心たるを失はざるべし。又市内に本邦人を始め、英、獨、米等各國人の居留するもの甚だ多く、其の市街は近年益、整頓して、恰も歐米の市街を見るが如く、支那市街に於ても亦西紀一九〇〇年團匪事變の際、城壁の全部破壊せられ、てより、模範的市街の起工、道路の修築、電車、水道の布設等着々進捗せるを以て、全市の文明式都市たるの壯觀は、清國の都市中、上海のほか、之と比肩するに足るものなかるべし。人口も約八十萬に達するが故に、此の點より見るも清國第

萬里長城

一流の都會たるなり。本市は我が門司又は長崎を距る七五〇哩乃至七八〇哩、我が大阪商船、日本郵船兩會社の航路に當り、兩會社の汽船は門司又は長崎を發して此の地に定期航海を營むが故に、彼我の交通は頗る便利なり。天津より京奉鐵道により東北に進めば、山海關を経て滿洲の奉天に至るべし。山海關は支那本部と滿洲との境上に在り、往昔秦の始皇帝親しく此の地に幸して、山海の要害、天然の城塞を成せるを嘆賞し、長城の起點を此の地に定め、名けて天下第一關と稱したりきといふ。抑、長城は古へ蒙古人の來襲を防ぐ爲め、築造せる極めて長き墻壁にして、平地を避け、峻峯、幽谷を涉り、馬鬣の如き山頂より千仞の谷底に下り、長蛇の如く連綿盡くる所なく、延長凡そ八百里、凡そ二千仞の長さに達し、東は山海關に起り、西は支那本部の極

山東半島

西部、全土の殆ど中心點なる嘉峪關に終る。高低厚狹一様ならずと雖も、通常高十五、六尺乃至三十尺、厚さ下底に於て約二十尺、上部に於て十二、三尺、所々に堅固の關門(關口の著名は極東に山海關、直隸省の西北邊に張家口、山西省の北邊に雁門關、極西に嘉峪關あり、今なほ防備を置く)を設く。西部は主に土を以て築きたるを以て、崩壞して形跡を留めざる所あれども、東部は瓦と石とより成るを以て、今なほ儼然保存せらる。實に長城は世界に比類なき長壁にして、大運河と共に支那の二大工事として名あるものなり。

渤海灣の南に突出する山東半島は山岳起伏すれども、氣候の溫暖なること北清第一を以て稱せられ、地味一般に農耕に適して産物に富み、海岸線は小出入に富み、良港を有するのみならず、頗る漁鹽の利多し。されば由來多數の住民を入れ、清國中人煙最も稠密の所にして、近年大に過剩の痛

芝罘

苦を感ずるに至り、荐りに滿洲方面に多數の出稼人を出せり。半島の北岸に芝罘、威海衛、南岸に膠州灣あり。

芝罘は天然の良港を有するが上に、渤海灣口の要衝に當りて、半島の北門たる任務を負ひ、清國屈指の開港場なり。我が北清航路の汽船は、往復共に必ず此處に寄港せり。又滿洲との關係親密にして、殊に我が大連、旅順とは交通最も頻繁なり。背後山地に擁せられて、陸上施設の甚だ不備なるは、其の最も短所にして、之が爲めに半島に於ける勢力範圍漸く減縮の傾向なきにあらずと雖も、早晚築港、鐵道の布設等によりて、其の面目は一新せらるゝに至るべし。

威海衛

威海衛は芝罘の東に近く、亦天然の良港にして、形勝の地たること殆ど之と選ぶ所なし。港内に有名の劉公島あり。もと清國の最も力を用ひし軍港にして、旅順と相俟つて渤

膠州灣

海灣の口を扼したりしが、日清戦争の時、我が陸海兩軍の陥落する所となりてより、殆ど舊觀を留めざるに至り、今は英國の租借地にして、同國の政務官駐在す。

膠州灣は半島の南岸に位し、獨逸宣教師殺害事件の結果、一八九八年獨逸の租借地となりし所なり。爾來獨逸は此の地の經營に従事し、灣口の東側を青島を中心として、山腹を開鑿し、溪谷を埋填して平濶なる道路を造り、地下に水道、下水管を敷設し、道路に沿うて宏壯なる官衙、寺院、兵營、病院等の建物は固より、電話、電燈を設けたるのみならず、本市を距る一哩半の地に大小兩港を築成し、大港には長さ二、六九〇米、高さ五米の防波堤及び大小の突堤を築き、堤上には起重機を備へ、數條の鐵軌を敷き、其の他、一萬數千噸の大船を容るゝに足る浮船渠を設くる等、港市としての施設一と

長安

して備はらざるはなく、しかのみならず山東鐵道を敷設して、商圈を廣く半島に擴張し、石炭採掘を開始せり。實に其の經營の盛なることは吾人をして往年露國の大連、旅順に於ける壯圖を想起せしむるに足る。随つて貿易の進歩の如きも頗る急速にして、今や輸出人總額北清の大港天津、大連など比肩せんとするに至れり。

黄河の沿岸は、既に調べたるが如く、支那の最も早く開けたる所にして、古來屢興亡せし歷朝は多く此處に帝都を定めたりしかば、歴史上有名の都會に富めり。其の中現時の都會としても名高き西安は、右への長安の地にして、黄河の支流なる渭水の南岸に位し、四近に農産豐饒の平野を控へ、平野の四方には山脈を繞らして、僅に黄河の穿てる峽谷を門戸とし、頗る形勝の地たり。人口多きは百萬、少きも五十

萬と稱せられ、何れも誇大の感あれど、而も支那内地の一大都會たるを失はず。其の近傍には舊蹟甚だ多し。

参考

四六、支那本部北部の都會(一)

北京

北京は直隸省の中央地點にあり。別名を順天府といひ、昔時燕の都せし所なれば燕京ともいふ。帝王の都城となりしは契丹の南侵に起り、金元明の三朝を経て現朝に至り、通じて約九百七十餘年の久しきに亘れり。皇城内に景山の隆起あるのほか、地勢低夷にして、郊外の平野に連り、南郊は廣漠たる北清の平野に至れども、西は西郊を隔て、萬壽山、玉泉山を望み、玉泉山の西には萬里長城の連れるあり。又東北は雲霞の間に北山の蜿蜒たるを控へて、天然の要害を形成せり。市街は内城及び外城の二部に分れて四角形をなし、内城の牆壁は長さ北面に於て二二、三二四尺五寸、西面一五、六四五尺二寸、東面一七、八六九尺三寸、外城の牆壁は東面一八、〇五一尺、西面一九、一三二尺、南面二四、五四四尺七寸に及び、内外各城の總面積は約二五平方哩あり。

内城壁の南面に三門ありて、中央即ち正南なるを正陽門(前門一名)、東を崇文門、西を宣武門と稱し、東面は二門にして南を朝陽門、北を東直門といひ、西面北面は各二門にして、西面の南を阜城門、北を西直門と唱へ、北面の東を安定門、西を德勝門と呼ぶ。外城に於ける城門は南面に三門ありて、中央を永定門、東を左安門、西を右安門といひ、東面は中央に廣渠門あるのみなれども、内城の東南角を包む所に東便門あり、西面には北に西便、南に廣寧の二門を設く、又皇城には正面に天安、東に東安、西に西安、北に地安の四大門あり。近年延長の京奉鐵道線は永定門外より永定左安二門の中間に於て城壁の一部を破り、外城の東邊を掠めて東便門外に至りて、京通鐵道線と會し、更に西に折れ、崇文門を貫きて、正陽門外の京奉車站に達す。京漢線は西便門の附近に於て城内に入り、東に直進して亦正陽門外の京漢車站に至り、又西直門外には京張鐵道線の起點あり。改修大街の主なるものは内城に在つては崇文門に起りて内城の東部を縦貫するもの、安定門より南進するもの、西安門より屈折して西直門に至るもの、外城に在つては正陽門より永定門に至る前門大街、廣渠門より廣安門に至る大街等とす。城外との交通道路は朝陽門外

より石疊の路ありて、通州に至るものと、西直門より萬壽山に至るもの、外は殆ど言ふに足らず。水路の便は僅に元代開鑿の大通河(舊名通惠河)あるのみにして、河源を萬壽山の傍なる玉泉山とし、德勝門外に來りて二派に分れ、一は城内に入りて皇城内の北海南海、太液池となり、其の末流は長安街を経て南城外の護城河に入り、更に東流して大通河と合し、一は北城外を経て南折し、朝陽門外大通橋に至りて運河となり、東流して通州を經、遂に白河に合す。今や京奉及び京通鐵道の便ありて、天津方面より來る貨物の之に由ること少からざれども、昔時は貢米の運輸、旅客の出入は一に此の水路を經たるものにして、水路水準を異にするを以て數箇の閘門を設く。又冬季は氷結するを以て船に代ふるに水櫃を以つてす。市内商業の最も盛なるは大門大街及び其の左右を推せども、皇城の東南に當れる内城の一部及び其の附近は近年外國の公館兵營等の多く建設せらるゝに従つて、外商の集中盛にして新進の商況を呈し、其の他皇城の東北西の大街に於ける商況にも亦侮るべからざるものあるを見るなり。北京は由來商工業の地にあらず、殊に工業は清朝の方針として自然の發達に委せられたるを以て、其の盛況を呈せ

ざるは必然の數なるべしと雖も、稍注意を惹くに足るものなきにあらず、其の主なるものは古來の製品に七寶燒煉瓦粗製の布地毯と稱する段通首飾耳環等の裝飾品、紫檀黑檀等の木細工、造花あり、又近年工業發展の氣運に向ひてよりは、燐寸煙草其の他諸種の工藝品を製出する官私工場の建立を見るに至れり。

天津

天津はもと沮洳の地たりしこと殆ど疑を容れず、明朝に至り漸く人民移住して小市をなし、次いで城を築き天津城を以て稱せらるゝに至りし所にして、西紀一八六三年開港場となりてより年を逐うて隆盛に赴き、北清事變以來、外國租界の著しき發達は支那市街の革新を促し、當時の直隸總督袁世凱保定府より此に移駐して、銳意諸般の施設に盡すありしたため、市街の外觀のみならず、商工業教育等に至るまで皆面目を一新せり。舊城は大運河の白河に會する所に在りて、東は白河に臨み、西は大運河に沿へり。北清事變の際各國聯合軍の爲めに城壁破壊せられ、今は坦々たる新街路となり、此に電氣鐵道を布設せり。是より以東白河右岸に日佛英獨、左岸に澳露白の租界あり。大運河の一部なる南運河は、天津より山東省德州に至る約五八〇

清里間は、幅三十五間乃至九十間にして、平日の水深五尺乃至九尺を保つが故に、優に民船又は淺吃水の汽船を通じ得べし。北運河即ち白河の本流の一部は天津通州間二五〇清里にして、河幅水深共に略、南運河に同じ。子牙河一名西河は白河の支流にして、天津保定間の交通上、重要な水路とす。其の他尙二三の小水路あり。天津停車場は白河の左岸露國租界に設けらる。外國貿易の外内地商業盛にして、新式工業の發達も亦視目を惹くに足る。教育の盛なること清國稀に見る所にして、専門學校には北洋大學堂、北洋軍醫學堂、北洋法政專門學堂等あり。我が國の北清航路を通へる汽船中、郵船會社の神戸北清線は、門司より芝罘を経て白河河口の太沽に來るものと、門司長崎・芝罘を経て來るものとあり、何れも更に營口に進航し、同會社の橫濱北清線は四日市・神戸・門司・長崎・釜山・仁川・芝罘を経て、太沽より更に營口に進航し、歸航には營口より直に門司・四日市を経て横濱に歸着す、本航路は營口凍結すれば太沽を終點とし、營口・太沽共に凍結すれば休航す。其の他同會社の朝鮮經由神戸北清線、大阪商船會社の大阪天津線等あり。氣候頗る大陸性をなし、冬季は河海水結し、舟運を絶つに至るの不便あれども、近年鐵

芝罘

道の開通してよりは冬季と雖も昔日の如き不便を感ずることなし。貿易額は輸入三、一一五、五〇〇磅輸出六九二、〇〇〇磅、輸入著しく超過す。

芝罘は一に煙臺といふ。山東半島の北岸に位し、背後には丘陵を繞らし東方海上五哩に一小島を控へ、北は三哩餘を隔て、芝罘島と相對し、西は十數町を離れて山脈南より來りて海に臨み、北に延ぶこと一哩半にして芝罘島の中部に接續し、以て廣濶なる海灣を形成す、灣内水深五尋乃至七尋に及び大小船舶の投錨に適す。且、天津營口等の如く冬季凍結の虞なく、天然の良港たるを失はず。一八五八年天津條約に基き、一八六三年の開港以來長足の進歩をなし、昔時寥々たる一小漁村は今や人口約六萬に達し、輸出額五〇〇、〇〇〇圓、輸入額八、〇〇〇、〇〇〇圓に達し、清國屈指の港たるに至れり。されど灣内の稍、廣濶に過ぐると、芝罘島の十分に北風を防ぎ能はざるとの爲めに、毎年十一月より翌年三月に至る強風多き時季に於ては、船舶の入泊を妨ぐる事少からず、加ふるに背後の地、山岳丘陵起伏し、道路險惡なれば、荷物の運搬は荷車馬背に依らざるべからざるの不便あり。しかのみならず一方には獨逸の半島に於ける經營大に進みて、當港の商業區域を蠶

食し、一方には、從來當港と遼東半島は固より、滿洲の南部とは密接の關係を有して民船の往來絶ゆることなく、滿洲は主として山東人によりて開拓せられ、其の主産物たる大豆、柞蠶繭等は當港を主なる集散地とし、滿洲の需要品も亦多くは當港を經由したれども、近年滿洲に於ける大連、安東縣等の發達は當港に至大の影響を及ぼすに至りしを以て、當港の前途は悲觀せらるゝことなきにあらざれど、而も當港は背後に山東省中生業の殊に盛なる地方を控ふるが故に、目下計畫中の烟灘鐵道開通し、且、既に着手せられたる港内施設完成せば、なほ一段の發展をなすこと疑を容れざるべし。當港の主なる輸出品は豆粕及び豆類、柞蠶糸、絹紬、麥稈、真田、鷄卵、主なる輸入品は諸種の綿織物、燐寸、石油、染料、金屬類とす。市内絹紬、柞蠶糸、豆粕の製出盛なり。當港旅順間の海底電線は我が國の有に係る。

威海衛

威海衛は明治二十七八年戰役の時、我が陸海軍の陥落する所となり、一時償金の擔保として我が軍駐屯したりしが、其の撤退の後、露國が關東州を租借し、獨逸が膠州灣を租借するに至り、英國も勢力の均衡上、一八九八年七月英清條約により、之を租借したれど、地位僻在するが上に英國は獨逸に對し、

膠州灣

威海衛又は其の附近より山東内地に鐵道を布設せざることを聲明せるを以て商業地としての經營には見るべきものなし。

膠州灣は一八九七年十一月山東省曹州府に於て、天主教の獨逸宣教使二名清國暴徒の爲に殺害せられたる要償として、獨逸艦隊の占領する所となりしが、遂に翌一八九八年三月の北京條約により獨逸に九十九年間の租借を許したる所なり。灣内は直徑約十五哩に達する圓形の大灣にして、灣口は半島の突出によりて扼せられ、其の幅僅に一哩四分の三に過ぎず。一般に水淺けれども、灣口の東側をなせる半島即ち青島半島の内外兩側は水深くして、南側に繫留する船舶は北風を防ぎ、北側に碇泊するものは外海の波濤を防ぐに足れり。獨逸經營の本據は此の半島にして、全半島花崗岩の山地をなせども、基底部に稍、低夷の所あり。此の部の全幅に亘りて青島市街建設せられ、北方に距る一哩半の淺き海中に大港あり。これ延長二、六九〇米、幅及び高さ各、五米の防波堤を東北西の三方に築き繞らして其の内を浚深し、南方を港口として此處に二條の突堤を設け、更に一條の運河を開鑿して灣内の深海部に至らしめたるものにして、港内の廣さ一方哩六分の一、突

堤即ち埠頭の兩側に於ける水深九米以上に達するが故に、數多の大船を入泊せしむるに足る。又市街の北側には小形汽船及び民船の碇繋所として小港を築き、南側青島灣には棧橋の設あり。しかのみならず小港の西には軍艦の碇泊所を備へ、大港口の北側には一萬六千噸の汽船を容るゝに足るべき船渠あり。而して獨逸は膠州灣租借と同時に、山東半島に鐵道敷設權及び鐵道の兩側各三十清里に於る鑛山の採掘權を得たるを以て、青島の經營を進むると共に所謂山東鐵道會社を設立して鐵道工事に着手し、一九〇四年青島より濟南府に至る凡そ三四三哩の鐵道を完成せり。又山東鑛山會社を設けて濰縣を東南に距る四十清里の小村落坊子と周村の南方博山とに石炭採掘を開始し、運炭の爲め鐵道支線を設けて、目下盛に稼業せり。かく獨逸の經營は着々進捗せるが上に、鐵道の通過地方は山東省中最も産業の盛なる所なれば、商品の輸出輸入に鐵道の利用せらるゝと次第に其の度を高め、租借の當時一小漁村たりし青島は今や壯麗なる小都會と變じて、麥稈眞田、柞蠶糸、落花生、豆油、絹綃等の輸出、綿製品、金屬類、紙砂糖、燐寸等の輸入盛に行はれ、北清の大港と目せらるゝに至れり。

西安

西安は古の長安の地にして、渭南關中關内などとも呼べり。これ黄河の支流なる渭水の南岸潼關を唯一の門戸とする渭水盆地の中に位するに因るなり。此の地禹貢に雍州の域に屬し、周武王此處に都して鎬京といひ、秦は附近の咸陽に都したれども、漢唐などは又此處に都して長安といふ。明清に至りて西安と改む。四周の城壁は長さ四〇清里、高三丈、四門を設く。古の長安城に比すれば約六分の一を占むるに過ぎずと雖も、今なほ渭水盆地に於ける政治兵備學術經濟等の中心地、清國屈指の都會たり。四區に分れ、西南東南の二區には漢人住し、東北區には滿人、西北區には回人住せり。城の内外及び附近には名勝舊蹟甚だ多く、歴代の宮址、帝王名士の陵墓を始め、阿房宮址、坑儒谷、鴻門坂(高祖が項羽に會せし所)等あり。

四七、支那本部北部の都會(二)

河南は古の洛陽の地なり。黄河の一支洛水の北岸(河は山と反對に北をに在るが故にかく名づけたるなり。此の地東より南を経て西に及べる方面は、嵩山其他北嶺山脈の餘派に擁せられ、北に黄河を控へて、所謂山河襟帶の地、周成王の玉城となし、所漢に河南後周に東都と呼び、東漢晋及び隋

河南

開封

の揚帝などの都せし所、府東の白馬寺は漢の武帝の草創に係り、西北の首陽山は伯夷、叔齊の隱遁に知らる。

開封は四近に廣漠たる平野を望み、北に黄河を帯び、水陸の便に富めども、土地低卑にして黄河の河床よりも下く、古來屢、水害を蒙る。附近に黄河の金堤あり。戰國の魏、五代の梁などの都せしところ、今は河南省城の地なり。人口約二十萬。

濟南

濟南は山東省城の地にして、山東山地の西斜面に在り、北方一里餘にして小清河の埠頭に至り、西方約一里にして黄河の畔に達し、更に城北一里に山東鐵道の終點を控ふるを以て、水陸共に交通の便に富めり。殊に小清河は濟水の故道を開鑿浚深したるものにして、當地の附近より羊角溝を経て西北渤海灣に至る約四十八里の間は、水深六、七尺以上、下流は二十五尺にも及び、濟南より海に通ずる唯一の水路なれば、航行の支那船舶大小合して一年三千餘隻の多きに上り、濟南城外の埠頭には常に數十隻の船舶輻湊せり。かくて濟南は小清河によりて芝罘、天津と水運の便を通じ、黄河によりて開封、河南等に至り、山東鐵道によりて青島を吞吐口とするが上に、附近には豊

濰

周村

曲阜

蘭州

饒の農産地を控へ、津浦鐵道亦既に天津より來りて此の地に達し、將來南方の揚子江畔との連絡を助けんとす。當地の前途は實に多望なりといふべし。人口約二十五萬を以て稱せらる。此の地及び濰縣、周村の郊外には、何れも外國人の居留地選定せられたり。

濰縣は山東中部の一大市邑にして、人口約十萬、雜穀の集散盛に、又刺繡、編物等婦女子の手工に係る産物甚だ多し。

周村は山東鐵道沿道の一大驛にして、人口約三萬、緞子、縮緬、紋縮緬等の絹織物、麥稈、真田絹、紬、柞蠶糸等の製出少からず。

曲阜は泰山の西南に在り、周公の子白禽の封せられ、國號を魯と稱せし所にして、此の地を距る東方一里半餘の昌平郷、陬邑は孔子の生地にして、後世其の故宅に廟を起し、孔子及び十二哲を祀り、之を聖廟といふ。宋代に至り詔して大成殿と命名せらる。

蘭州は黄河上流の盆地に位し、甘肅省城の地にして、陝甘總督の駐節地たり。四近の廣き沃野には雜穀、蔬菜、果物を産すること多く、又北京方面より新疆地方に至る交通の要衝に當るを以て、市況殷賑、人口五十萬を以て稱せ

西寧

西寧は蘭州の西方青海に近き高原に位し、海拔二、二〇〇米に及ぶ。西藏との互市場にして、青海地方を管理する辨事大臣の駐在地たり。人口約六萬を數ふ。

保定

保定は北京の西南に位して、京漢鐵道に沿ひ、天津と運河を通ず。省城の地にして、人口約七萬、直隸總督は現時天津に駐在すと雖も、布政使、按察使以下の衙門は此の地にあり。近來直隸省教育の中樞となり、師範學堂、高等農業學堂、法政學堂等設置せられ、本邦人の招聘せられて教鞭を執れるもの甚だ多し。

張家口

張家口は京張鐵道の終點にして、長城の内側にあり、東北は喇嘛廟一名多倫諾爾千餘名に及ぶ、市外に壯麗なる喇嘛廟あり、僧侶多し。西北は庫倫、西南は歸化城に通ずる街道の集合點に當り、關内より關外に出づる第一の關門をなし、毎日穀物、肉菜、牛馬羊等の市場を開く、城外の元寶山には露國商人占據し、羊毛、毛皮茶の買入を營めり。關外よりの羊毛、羊皮、狐狸等の細毛皮類、牛馬皮、駱駝毛等、關内よりの磚茶、紅茶、煙草、綿織物等の集散盛に、中にも細毛皮類の天津を經

塘沽

て、我が國に来るもの少からず。但し露清貿易品の大宗たる茶は從來主として此の地を經由したれども、今は鐵道及び海運によりて運搬せらるゝもの多く、之がため當地を始め、外蒙古の庫倫、境上の買買城、恰克圖等の商況は大なる衰退を來せり。
塘沽は天津を距る鐵路二十七哩の白河左岸にあり、京奉鐵道の要驛にして、深吃水の汽船にて天津に向つて來れる貨客は、小汽船により爰に上陸するを常とす。北清事變後久しく露國の管理に屬せしも、其の後清國に還附せられたり。

太沽

太沽は白河河口の右側に位し、天津を距る水路四十餘哩要害の地點なるが故に、もと堅固の要塞を有し、最近數十年間、外國と事を構ふるに當り、屢、砲煙を漲らせし所にして、殊に北清事變に於ては、日英佛獨露各國艦の聯合軍に攻撃されし時の如きは頑強なる抵抗をなし、各國軍稍、躊躇の色ありしが、我が軍殿軍より轉じて猛進肉薄して北砲臺を攻略し、各國軍をして驚歎せしめたり。其の指揮官服部中佐の壯烈なる戦死と、白石海軍大尉の先頭第一の驍名を轟かし、とは尙吾人の記憶に新なり。海岸一帯の地は皆鹽田

にして、白帆の如きもの無數に立並ぶは、皆潮水を汲上る風車なり。此の邊のみならず、南は黃河口、北は深河に至る海濱一帶、幅四五里の地は殆ど皆製鹽地たらざるはなく、清國製鹽中最も良質と多量とを以て知らるゝ長蘆鹽（長蘆の名は天津を南に距る二十里の滄州に出で、同地の方一面長蘆茂生せるを以て長蘆の名を冠したるなり）の産地たり。製鹽の方法は晒乾法にして、風力と日光とを利用するに在り、鹽田は五、六層乃至七、八層より成り、之に小溝を通じて海水を鹽田に導かしむ、而して爰には八箇の帆より成れる風車仕掛の運水機を以て海水を鹽田内の最高層に注ぎ、順次第二層より第三層と下層に導き、遂に末層なる結晶田に達せしむ。此に至る間に於て海水已に濃密となり、末層に於て更に日光の熱射と乾燥せる空氣の吸收作用とに由り、一兩日の間に水分悉く蒸發して結晶鹽と化するなり。

唐山

唐山は京奉鐵道の一要驛にして、開平を去ると數哩の所に位し、石炭に富めるを以て名あり、世人が普通開平炭と稱するものは、凡て唐山附近にて採掘せるものに係る。一日の平均採炭量約四千噸實に我が國の經營せる撫順と共に支那の二大炭坑たるものにして、其過半は秦皇島に、殘餘は天津方面に輸送せらる。又此の地には鐵工場鐵道器具製作所煉瓦製造所等あり。

秦皇島

秦皇島は京奉鐵道の湯河驛を去ること三哩餘、山海關を去ること凡そ四哩の所に位し、西南は渤海灣に面し、東北は半島海中に突出して其の高さ約五六十尺、全丘巖石より成る、これ即ち秦皇島にして本陸との間に一小灣を形成す。灣内水清く遠淺にして、白砂遠く連り、好箇の海水浴場たれども、大船の入泊に適せず。されど北清諸港の如く冬季凍結せざるが上に、唐山炭坑の門戸として屈竟の地點に當れり。これ其の近年築港の經營及び開港を見るに至れる所以なるべし。今や既に半島より西方に出せる大小二箇の棧橋は大半竣成を告げ、港内設備も大に整ひて、吃水十七、八尺以下の汽船の入泊繫留に適し、上海方面に多量の石炭を輸出するが故に、將來港内施設完成し、内地に對する交通機關亦整備せば、一層の發展を來して、天津の勁敵たるに至るべし。

八、中部地方

要旨

中部地方は殆ど全部水運の便至大なる揚子江の流域に屬し、既に述べたるが如く、清國中産業最も盛大に、人口最も稠密なる所なれば、此等の事項を反復問答して、繁盛なる都會の多きことを推考せしめ、之を豫備として先づ上海を始めとし、揚子江の下流附近の都會について説明し、順次上流の都會を観察すると同時に、此等の都會中には我が國と深き關係を有するものあることを知らしむるを要す。

本文解説

支那本部の中部地方は、殆ど全部揚子江の流域に屬し、水運の便に富めることの國內に冠絶せるは勿論、世界に於ても比類稀なる所なるが上に、其の本支諸川の沿岸には地味肥沃、灌漑至便の平野開けて、米の産出極めて多きのみならず、灌漑の便少き畑地より山地にかけては麥類・豆類等の普

中部地方

上

通作物は固より、茶・桑・棉花等の栽培も盛に行はるゝが故に、國內住民の過半は此の地方に住し、人口密度の大なることも、遂に他地方の上に居る。實に此の地方は清國の最も殷富開明の所にして、繁盛なる都會甚だ多く、經濟上に於ては清國の首腦地たるなり。

上海は揚子江口に注入する黄浦江の沿岸にあり。黄浦江は揚子江に比すれば兒孫たるに過ぎざれども、上海より江口に至る約十三哩間は五、六千噸以下の汽船の通航に適し、上海より上流と雖も、なほ舟運の便多くして大運河と連絡を有するが上に、鐵道亦來り通ずるが故に、上海は直接に揚子江に沿はずと雖も、よく揚子江流域の咽喉を扼するに足り、貿易の盛なること清國に冠絶し、南清の香港我が國の横濱・神戸と共に、東洋の四大貿易港たるものなり。随つて

内外人多く此處に集中し、人口約八十二萬に達するが故に、此の點より見るも清國屈指の都會にして、若し其の壯麗の點より言はんか、天津の外之比肩するものなし。唯憾らくは黄浦江の年々淤泥の爲め埋塞する傾向あることにし、て、さなくとも近年大船の航運に従事するもの益多きを加へ、東洋に於ても既に二萬噸以上の汽船を見るに至りたれば、既に着手せる黄浦江浚渫事業の成否如何は、當港の消長と至大の關係を有せり。輸出品の主なるものは生絲・綿・茶・綿織物・輸入品の主なるものは綿織物・綿絲・阿片・石油・砂糖・石炭等にして、中にも阿片の輸入は近時政府が阿片吸飲を禁止するの方針を採りたる故に、早晚其の跡を絶つに至るべし。我が國との貿易亦甚だ盛にして、我が郵船・大阪商船・東洋汽船の各會社船は綿布・綿絲・銅・石炭等を積みて往き、綿・大

蘇州

豆・豆粕等を積みて還り、我が長崎との交通殊に頻繁なり。又我が日清汽船會社の船は當港を中心として、揚子江・蘇州・杭州の三航路を通へり。

上海の北郊の停車場より鐵道の便を藉り、又は蘇州河の汽船によりて西すれば蘇州に達す。此の地は蘇州河に臨み、大運河を控ふるが上に、其の他の河・渠・湖水も水運を助けて、一に水都と稱せられ交通甚だ便なり。夙に絹織物を以て頭角を現はし、繻子・繻紗等の製織甚だ盛にして、城の内外には到る處機杼の音を聞かざるはなく、朝廷の御料をも製織するが故に、之を督する爲め、中央政府よりの官吏駐在す。年産出額五百萬圓以上に達すべしといふ。

蘇州より大運河の水運によりて南し、或は上海南郊の停車場より鐵道若くは黄浦江によりて西南に向へば杭州に

杭州

江寧

達す。此の地大運河の南起點にあたり、且、錢塘江に臨みて、交通の便、蘇州に似たるのみならず、蘇州と共に古來蘇杭と並稱せらるゝ絹織物の産地にして、宮室の御用職工ありて、中央政府より派遣せる官吏の監督を受くることも亦蘇州と同じ。

上海より揚子江通ひの汽船により、又は上海若くは蘇州より鐵道によりて、西北に進めば江寧に達す。此の地は明朝の帝都たりし所にして、一に北京に對して南京といふ。北に揚子江を帶び、其の他の方面に丘陵を繞らし、外觀既に山水の景に富めるが上に、名所舊蹟甚だ多く、文華風流支那第一の地と稱せらる。工藝品には南京燒と稱する陶磁器、南京縐子、團扇、扇子等の有名なるものあれども、何れも舊式の製出に係り、其の産額多からず。されど既に揚子江の水

漢口

運を控へ、鐵道上海より來り通ずるあるが上に、目下工事中の津浦鐵道(天津と南京の對岸浦口とを連ぬ)全通せば、其の商工業は面目を一新すべし。

上海より揚子江通ひの汽船に投じ、江を溯航すること約六百哩にして漢口に達す。此の地は揚子江の漢水を入るゝ所の左岸に位し、水運の便極めて大なる揚子江の本支流、可航水路の眞中心に當りて、九省の會を以て稱せらるゝが上に、東西約二百哩、南北約百哩に亘れる沃野の中心に位するが故に、支那水運の中心となりて、貨物四方より雲集し、内地商業の盛大、全國に冠絶し、外國貿易の盛なることは全國の諸港中、上海、廣東の次に位す。かく水運の便に富めるの上、近時京漢鐵道北京より來り通じ、是より廣東に至る粵漢鐵道及び四川省の成都に至る川漢鐵道も既に敷設事業

に着手したれば、一旦此等の鐵道完成せんか、當地は又清國縦貫及び横貫鐵道の中心ともなり、一層の飛躍をなすべく、其の將來は實に多望なりと謂ふべし。主要輸出品は紅茶、磚茶等の茶、牛皮等、主要輸入品は綿糸、綿織物、石油等にして、輸出品は露西亞に向へるもの最も多く、輸入品は本邦より來るもの最も多し。單に商業の盛大なるのみならず、原料の豊富と其の南方水運の便ある所に清國屈指の炭坑を控ふることは、工業の振興を促し、新式の工場所々に設立せられて、磚茶、燐寸、製粉、豆粕等の製造盛に、中にも磚茶の製造は露國人の經營に係れり。

漢陽・武昌

漢口と漢水を挟みて漢陽、江を隔て、武昌あり、三市恰も鼎足の狀をなす。三市の人口は漢口の八十五萬を最大とし、漢陽の約四十萬を最小とし、總數約百七十萬に達し、此處

に清國第一の大都會は形成せられたるなり。而して漢陽、武昌は商業上漢口の敵にあらざるは勿論なれども、工業上に於ては決して彼に譲らず。漢陽は新進の工業地にして、清國唯一の大製鐵所あり、一日に軌條三百本の製出ありといふ。其の他銃砲の製造場、タオル、豆粕等の製造あり。武昌は前二者の先輩にして、元來政治上の中心地として發達したる所なれども、近年大規模の綿織物工場設立せられ、數千人の職工の出入を見るに至りてより、これ亦一大工業地として注目せらるゝに至れり。

大冶鐵山

大冶鐵山は武昌の東南、江を下ること凡そ七十哩の右岸、鐵路十八哩を入り込みたる所にあり。數個の山丘は滿山鑛量の豊富、鑛質の優良を以て名ある鐵山にして、其の產出高の約二分の一は我が八幡製鐵所に来り、其餘は漢陽の

製鐵所に供給せらる。八幡製鐵所は從來大冶を以て殆ど唯一の鑛石供給所としたりしが、近時朝鮮大同江の下流に近き所に於て鐵鑛採掘に着手し、之をも原料として大に事業を擴張するに至れり。

漢江より江の上流約三七〇哩の間は、なほ一千四百噸の汽船を浮ぶるに足り、之より上流には峻崖絶壁の兩岸に迫れるありて、數多の急流部をなす。中にも有名の峽流部三箇所あり、之を三峽の險といふ。而も民船の往來織るが如く、近時我が國の砲艦も溯航して、操縦の技倆を發揮したり。此の峽流部を過ぐれば亦優に汽船を通ずるに足り、其の兩岸には廣漠たる沃野開け、揚子江の本支流其の間を縦横す。これ即ち四川省の地にして、古へ富強を以て天下に鳴りし蜀の據りし所なり。此の地四方に嵯峨たる山脈を

重慶・成都

繞らして、内に平原を抱き、古來險要無二の地として有名な。揚子江口を距る約六五〇里の内地にあれども、氣候溫暖にして、北部地方の如き寒暑の激變を見ざるが上に、平野の地方は地味頗る肥沃にして、農業盛に行はれ、耕地は四近の丘陵・山腹にも及びたれば、農産物の豊富なること推知に難からず、實に此の地方は六千に餘れる住民の生活場裏たるなり。しかのみならず揚子江及び其の支流幾條となく其の間を流るゝありて、水運の便亦至大なり。重慶は揚子江の南岸に臨み、此の地方の水路の起點たり、咽喉たるのみならず、其の商權は遠く西藏にも及ぶが故に、内地商業頗る活潑に、外國貿易も亦漢口を介して盛に行はる。成都是城廓の堅固市街の整齊華麗、支那の城市中第一と稱せられ、人口七十萬を以て稱せらる。未だ新式工業の見るに足るも

のなしと雖も、古來支那文化の一中心たるを以て、精巧の工藝品を出すこと少からず、中にも綢緞最も名あり。

参考

四八、中部の都會(一)

上海

上海は別名を滬江又は申江といふ。黄浦江の西より來れる蘇州江を入るゝ地點の附近を占め、江口を距ること水路十三哩に位す。黄浦江は西南より東北の方向を取りて來り、稍西北に轉向して上海縣城を抱き、蘇州江に入るゝ附近より急に屈折東向して揚子江口に入る。縣城は蘇州河を南に距る約二哩半にあり、周圍に一里餘の城壁を繞らし、七城門を設け、専ら支那人の住する所なれども、近年城東の江に沿ひたる部分より城南にかけて、支那人の新市街建設せられ、繁榮城内を凌ぐに至れり。城北一帶に佛國租界あり、是より北、蘇州河に至り、更に之を渡りて東に曲り、江の北岸約三哩に亘れる地方は、もと英米兩國の租界たりしが、近年各國共同租界となれり。此等租界の江に沿へる所は通商の中心地にして、街路廣濶正整、家屋壯麗、文明

的都市の面目を有し、又市街の全幅に沿へる江面は即ち港内にして、幅平均五六町に及び、水深は大満潮の時に於て二十三尺、小満潮の時に於て十八九尺を下らずして、六千噸以下の汽船は潮時を選びて入泊し得べく、江畔には無數の碼頭櫛比するが故に、諸船舶を之に横着せしむるを得。而して黄浦江を溯れば杭州を経て錢塘江に至るべく、蘇州河を上れば蘇州鎮江等に達すべく、黄浦江を出て、揚子江を溯れば江畔の諸港に至るべし。しかのみならず、北郊の停車場を起點とする滬寧鐵道は東の方吳淞に通じ、西の方江寧に至り、南郊の停車場を起點とする滬杭甬鐵道は既に杭州に達し、將に寧波に達せんとす。かく水陸共に交通の便を有して、清國中最も産業盛に人の最も稠密なる地方の咽喉を扼するが故に、貿易の盛大は遙に他の諸港を抜き、輸出額一九一六、九一〇七磅、輸入額二四、〇一二、二七一磅に達す。これ清國貿易總額の約二分の一を占め、我が國第一の貿易港なる横濱の上に居るものにして、上海は實に東洋第一の貿易港なるものなり。縣城及び租界の對岸、黄浦江に抱かれて半島狀をなせる地は浦東といひ、上海の一部をなす。近年工業大に興りて、浦東は主なる工業地となり、造船、兵器、紡織、製粉製

蘇州

紙、燐寸、煙草等の主なる工場は概ね此の處に相並び、其の他教多の倉庫もありて、本市に一偉觀を添ふるに至り、中にも造船、紡績の二業最も名あり。かく商業共に盛大なれば、東洋航路に従事する汽船は一として此の地に寄港せざるはなく、従つて港内には常に數十隻の汽船、數百の支那形船、繫泊、輻湊して頗る壯觀を呈せり。我が國汽船の此の地に寄港するものは日本郵船、大阪商船、東洋汽船の三大會社の有に係り、其の他日清汽船會社の此の地を起點として、揚子江畔の諸港に航路を開けるなり。主要輸出品は生糸、繰綿、茶、絹布、豆及び豆粕、獸皮、獸骨等、主要輸入品は綿布、糸、阿片、石油、金屬類、砂糖、石炭等にして、取引先は英國を第一とし、香港、日本、米國之に次ぐ。我が國は彼に綿布、綿糸、銅、石炭、燐寸、海產物、砂糖等を賣り、彼より繰綿、大豆及び豆粕、羊毛等を買ふ。

蘇州は上海を西北西に距る汽程六十一哩の所にあり、江蘇巡撫の駐在地にして、城は南北に長き長方形をなし、西門の内外を最も繁榮の地とす。大運河に沿ひ、蘇州河即ち吳江を帶び、又太湖に臨めるが上に、其の他の運河の四近の沃野より集中せるあり、城内にも縦横の運河ありて、城外の運河、水

杭州

路と連絡し、實に南船の本場たり。四近の沃野は北東南に開けて際涯なく、西は遙に山岳を望み、太湖と相映じて山水の景を恣にす。此の沃野は良質の譽高き江南米の産地にして、年々多量の貢米を北京に輸送す。又養蠶製絲の業甚だ盛なり。此の地は春秋の時代には吳の國都たりし所にして、隋に至り始めて蘇州と呼ばれ、夙に文化發達せり。工藝品の種類少からざるが中にも、最も名高きは紗及び緞の二種なり、共に我が國の所謂紗、縐子及び縐紗の類にして、我が國に於ては紋の有無により縐子と縐紗とを區別すれども、支那に於ては是等の別なく單に緞と總稱せり。緞最も多く、年産額四五百萬圓を下らざるべし。機臺は近來大に減少したれども、なほ城の内外を合はせて二千五六百臺以上あり。而して此の地の緞は一に累緞と稱せられ、品質南京及び杭州産に及ばざれども、廉價なるを以て、かく盛況を呈するに至りたり。人口は約五十萬、有名の寒山寺は城西約二哩を距つる楓橋にあり、本堂は全く荒廢し、僅に其の前面に一小寺の新造せられたるを見るのみ。其の他附近に伍子胥の廟、姑蘇山などあり。

杭州は錢塘江口を距る約二十哩の左岸、大運河の南起點に位し、東北は水

路一五〇哩にして上海に至り、水路一二七哩にして蘇州に達し、此の兩水路には日清汽船會社の汽船航路を開き、又上海とは鐵道を通ず。當地は西に西湖を擁し、西南は山脈逶迤とし、東北の二方は沃野遠く開け、地勢蘇州の如く開豁ならずと雖も、四方に通ずる河渠の利は彼に譲らず、西湖山水の絶景に至つては到底彼の及ぶ所にあらず。實に西湖は古來文人墨客の稱贊措く能はざる所にして、或は十八景といひ、或は三十六名蹟と呼び、或は七十二勝と稱し、山水の靈常に妍を争ひ秀を競ひて、四時の光景日として佳ならざるはなし。省城の地にして、南宋の國都たりし所、城内の西南隅に吳山あり、これ亦一名勝として名高く、山上に登れば、西湖の絶景、城内の熱鬧は固より、四方の光景を一眸に收め得べし。絹織物については蘇州と併稱せられ、而も製品の耐久的にして、外觀の美に獨特の技倆を發揮せることは遙に彼に優り、新式の機械を利用すること少からず、廣く清國の中流以上に需用せらる。熟貨生貨に大別せられ、熟貨は緞、寧綢、宮綢、實地紗、芝地紗、生貨は紡羅、大綢等にして、前者は絲を染め、澤付等をなしたる上、製織し、後者は織上げたる後、更に加工せるものなり。此の地長髮賊の亂に當り、繁華の地盡く兵火に

江寧

罹り、大なる打撃を蒙りしが、下關條約により蘇州、重慶等と共に開港せられ、てより、大に舊觀を回復し、再び殷賑を極むるに至れり。人口約六十萬。
江寧は揚子江下流の右岸に位し、上海より水路二一二哩、鐵路九二哩を距つる所にあり、西北に鷄鳴山を繞らし、北邊に江を帯び、山水の景に富む。もと建業、建康、金陵等と稱せられ、明都して應天府と稱す。兩江の首城にして、總督駐在す。城壁の周圍約十里、面積北京より廣大にして、規模頗る宏壯、明朝の帝都たりしたため、久しく繁榮華美を極めたりしが、長髮賊の侵害を蒙りてより、甚しく衰退に傾き、今なほ城内に田畝竹藪の相交はりて、蕭條の光景を呈するあれど、南門内外は頗る殷賑なり。北門を距る約二哩の江畔なる下關を埠頭とす。政治上の要地にして、未だ内外の商況盛況を呈せざれど、滬寧鐵道の既に開通せるあり、津浦鐵道も正に全通せんとするが故に、其の將來に一大飛躍をなすべきは疑を容れざる所とす。當地の綢緞は即ち南京縐子にして、精巧を以て名聲四方に著れ、製織の創始は蘇杭に先づること一般の信ずる所なれど、徒に舊式を墨守し、産額の點に於ては遙に彼等の下に在り。又陶磁器は古來南京燒と稱せられ、大に珍重せらるゝものなれど

も、今は江西省の景德鎮に壓倒せられ、産額大に減少し、唯精巧の名を擅にするのみ。團扇扇子も名産の一にして、堅固と風雅とを以て知られるれども、産額多からず。新式の工業に金陵機器局及び火藥局あり、規模稍宏大なれども、今は上海の江南機器局に於て専ら銃砲の鑄造をなすに至りたる爲め、當機器局に於ては僅に砲彈銃丸雜器等を製造するに止り、火藥局も技術頗る幼稚なりといふ。人口約二十五萬。

漢口

漢口は揚子江の漢水を入るゝ所に位して、全市略、弓狀をなし、長さ約二里餘、其の凸面部を以て、揚子江と漢水とに臨む。揚子江、漢水は固より洞庭湖、湘江等其の他諸支流の水運を有して、其の商圏西は四川貴州雲南に及び、南は湖南江西西北及び北は湖北陝西甘肅に達するが故に、天然の位置既に九省の會たる所にして、近時京漢鐵道開通してより、は更に商圏を北方に擴張せり。若それ粵漢川漢兩鐵道全通せんか、單に九省のみならず、支那本部の會たるに至るべし。かゝる形勝の地點なるが故に一八六一年開港を實施してより、内地商業の盛大は外國貿易の進歩を促し、外國貿易の進歩は内地商業に一層の發展を來さしめ、今や内地商業については國內に冠絶し、外國

貿易についても上海廣東の次に位するに至り、其の趨勢將に廣東を凌いで上海の壘を磨せんとす。又茶大豆小麥等各種の原料品は四近の沃野に餘裕多くして、原料品を遠くより集中するの煩なく、豊富なる萍郷の石炭は運賃至廉の民船によりて取寄せ得るが故に、工業の發達せることも亦自然の數なりといふべし。外人稱じて東洋のシカゴといふ、未だシカゴの盛大に及ばざる所あれども、水運の便は彼に優り、又僅に江水を隔つる武昌漢陽を併せ考ふれば、總人口殆どシカゴに匹敵し、内地商工業地として、彼と對抗の地位に立つものは、此の三市のほか他に見るを得ざるなり。

貿易は其の商圏内に於ける農産物の豊凶、外國品に對する偶發感情の如何等によりて消長を免れずして、一九〇九年に於ては輸出額二千一百萬圓輸入額二千二百萬圓此の合計四千三百萬圓に過ぎざりしかど、過去數年の平均貿易額は約一億圓に上り、其のほか通過貿易額少からず。主要輸出品は紅茶、磚茶、牛皮、桐油、大豆及び豆粕等、主要輸入品は綿絲、生金巾、晒金巾、綾木綿等の綿織物、銅塊、石油、砂糖等にして、中にも紅茶及び磚茶は輸出品の大宗たるものなり。取引先は輸出に於ては西比利亞及び歐露を第一に推し、輸

入に於ては本邦第一位を占む。工業は磚茶、燐寸、豆粕、煙草、麥粉等の製出少からず。中にも磚茶製造は最も盛にして、主に露人の經營に係り、湖北、湖南、江西の粉茶を用ひ、最初之を日曝し、又は乾燥室にて乾燥せしめ、次に之を蒸氣にて蒸し、小なる鐵製の型に詰め、壓搾して製造す、其の形磚に似たるが故にかく名づけられたるなり。もとは主に隊商の手を藉り、蒙古を横斷して西比利亞及び歐露に輸出せられたれども、今は汽船によりて歐羅巴に直送し、又汽車によりて西比利亞に送らるゝこと少からず。燐寸工場は上海人の設立に係れども、其の位置は日本專管居留地にあり、軸木は多少湖南、江西等より來れども、主に本邦産を用ひ、ガラス粉及び燐は英國より、硫黄は本邦より輸入して、盛に硫黄燐寸を製出す。之が爲め本邦燐寸は殆ど此の地方より驅逐されたり。又此の地方には家鴨、鷄等の家禽多きを以て、其の卵を原料とする蛋白製造所も亦此の地にあり、皆外人の經營に係り、産出少からず。市街の東半部即ち長江に沿ひたる部分の大半は各國租界にして、英國租界を極西とし、是より東に露、獨、日、白の租界順次相列び、更に東に江岸停車場あり、京漢鐵道は東より入り來り、市街の背面に沿うて極西部の漢水畔に

終る。人口は約八十三萬。

武昌

武昌は廣湖總督の駐在地にして、元來政治的都市として發達したる所なれども、近年此の規模宏壯なる織布局(生絲)、紡紗局(生絲)、官絲局(生絲)、製麻局の四工場設立せられ、此等の工場の職工は男女合せて約五千人に及べり。人口約五十萬と稱せらる。

漢陽

漢陽は西に大別山を負ひ、前面漢水に臨む。近年鐵工業地として頭角を露はしたる所にして、漢陽鐵廠、漢陽兵工廠の二大工場は相隣接して、長江畔より西北の方漢水と龜山との間なる狹長の地域を占め、頗る壯觀を呈す。前者は其の工場内の設備略、我が八幡製鐵所に類し、大冶の鑛石を用ひて鐵を造ること一日に約九十噸更に銑鐵塊を鎔解して鋼鐵を造り、之をロール機に掛けて軌條となすこと一日約三百本を算す。後者は主に小銃、大砲を鑄造す。其の他、タール、豆粕等の工場あり。

大冶

大冶は漢口より下流凡そ七十哩の江畔に位する石灰密より十八哩を距りたる内地にあり、此の間鐵道を通ず。鐵山は沙帽子山、獅子山、康山、下陸山の四山より成り、滿山悉く鐵鑛にして、褐鐵鑛最も多く、磁鐵鑛、赤鐵鑛亦産す。

重慶

現今盛に採掘せらるゝは獅子山にして、鑛質は鐵分平均六十五パーセントに及び、世界最良と稱せらるゝ瑞典産(鐵分平均六十パーセント内外)にも優れり。我が八幡製鐵所は當鑛山と特約を結び、年々約十萬噸の鑛石を購入す。我が國へ鐵鑛授受の埠頭は石堡にして、其の北に接して黃石港あり。

重慶は揚子江の支流嘉陵江に入るゝ所に在つて半島狀の地をなし、西より東に向つて突出し、西の一方僅に陸路を通ずるのほかは前記二河に抱かれ、江の水面より高さこと百尺乃至二百尺の崖上に立ち、市街は屈曲高低常なく、到る所坂をなし階をなす、現今當地に居留地を有するは獨り本邦のみにして、揚子江の右岸即ち重慶府城の對岸を距る下流約一哩の四分の三の所にありて、遙に重慶城を望む。其の商圏、四川省内は固より、雲貴西藏に及び沙市・漢口・上海等を主要取引先として、多量の商品を生吐出し、鹽・阿片・藥材・生絲・絹織物・茶・麝香の移出又は輸出、綿織物・染料・石油等の輸入殊に盛なり。

成都は岷江の中流に臨み、四川盆地の中央に位す。水量増漲の時季には最大の民船溯到し、小舟の出入は常に絶ゆることなし。城は北京に倣ひて築造したるものにして、三重の城壁を構へ、皇城・滿城・漢城の別あり。外壁の

成都

吳淞

延長約五里に及ぶ。街路他の城市に比して寛濶に、房屋一般に華麗なり。工藝は何れも舊式に係れども、綢緞・刺繡等に精巧を極めたるもの少からず。四川總督駐在し、人口約六十萬、四近の沃野は長さ三十里、幅十里に亘り、水利に富み、農産物饒多なり。又名高さ四川鹽の到る所に製造せらるゝは一異觀なり。其の方法は人力に依り鐵索を降下して深さ百尺乃至三千尺の井を穿ち、竹製の巨筒を井底に降し、高槽を経て之に繋げる竹繩を引き上げて鹽水を汲出し、大鐵鍋に注ぎ、自然瓦斯石炭又は薪材を以て之を煮沸す。而して汲上げの動力には或は水牛・黄牛を用ひ、或は騾馬・人力を用ふ。かゝる幼稚の方法に依るも年産額約六億斤に達し、四川省内は固より、湖北雲貴等の需要にも應ずるに足るといふ。

四九、中部の都會(二)

物産豊饒、水利至便、人烟稠密の中部地方には、前記都會のほか、なほ有名なもの少からず。長江本支の沿岸なる吳淞・鎮江・蕪湖・九江・岳州・長沙・沙市・宜昌、浙江省なる寧波・温州の各開港場、無錫等の如きは是なり。

吳淞は一八九八年清國自ら開放したる港にして、黃浦江口の北岸に臨み、

鎮江

同江の關門たれども船舶直に上海に直航して此の地に碇泊せず。滬寧鐵道の一端をなせども陸上の設備も見るべきものなし。
鎮江は揚子江の南岸、大運河の江を横斷する所に位し、且、滬寧鐵道に沿ひ、交通至便にして、揚子江の咽喉を扼するに足るべき形勝の地なり。其の商圏、上海、蘇州、南京等の爲めに縮小せられ、今は主として江北なる大運河の沿岸地方に對する門戸たるに過ぎざれども、將來有望の港市たるや疑を容れず。人口約二十萬。

無錫

無錫は鎮江の東南に當り、大運河に臨み、滬寧鐵道に沿ひ、城の内外には運河縱横して、交通至便なり。風土蘇州より稍乾燥にして、健康に適し、水質善良なり。繭の集散生糸の製造を以て著はれ、生糸は即ち所謂錫絲にして、強靱と稱すべからざるも、外觀美にして、且、光澤を有し、大に聲價を有せり。

蕪湖

蕪湖は南京の西南、江の南岸に位し、安徽省唯一の開港場にして、其の主要門戸たれば米穀の積出盛に、石炭、紙茶等の集散亦少からざれども、外國貿易は未だ振はず。附近に有望の宣城炭田を控ふ。人口約九萬。

九江

九江は江の南岸、鄱陽湖の吐口附近に位して、山丘を負ひ、江山の景に富む。

景德鎮

品質最も優良なる江西省(粵州産最)の産茶は、此の地を経て上海漢口に輸送せられ、又其の東南なる景德鎮の陶磁器も、概ね此の地に於て集散せらる。

景德鎮は嘗て長髮賊の蹂躪に遭ひ、磁窯悉く毀損せられたりしが、近年漸く復舊して、清國の窯業界を壓し、製産額は、宮室に上納するもの、ほか、三百萬兩に達すべしといふ。

南昌

鄱陽湖南の南昌は贛江の漲水時に於ては小汽船を通じ、江西省の中心市場たり。人口三十萬を以て稱せらる。附近の地方は良質の茶を産するこ

岳州

岳州は江の南岸、洞庭湖の吐口に位し、一八九九年清國政府自ら開放したる所にして、湖南省の咽喉に當り、湖南省の輸出品及び外國よりの輸入品を轉運するの衝たりしも、其の後湖江の下流、湖南省の中腹に位する長沙の開放せられて、此の地を利用するの必要なきに至りてより、市況大に銷沈せり。

長沙

長沙は湖南省の東部を貫流して洞庭湖に注入する湖江の下流右岸に位し、市街長方形にして、湘江に沿うて南北に亘ること二哩半、周らずに延長五、六哩に及べる城壁を以てす。湖南省の省城たると同時に、同省の貨物吞吐

湘潭

口に當り、湖南省の主要産物たる茶、米、綿等の集散盛なれども、外國と直接の貿易は未だ見るに足らず。人口約三十萬。

長沙を上流に距る二十七哩の湘江左岸に湘潭あり、其の錨地、長沙の流勢急に、淺瀬多きに反し、數町の河幅は到る所水深七、八尋に達し、且、水勢緩漫なるが故に、船舶の碇繫至便にして、昔時は省内は固より兩廣、江西、貴州の産物此處に集散し、市況甚だ繁盛なりしが、近年汽船航路發達し、清國の特色とする民船商業の衰退を來してより、其の打撃は湘潭も亦免るゝ能はずして、昔日の觀なしと雖も、而も其の惰力は今なほ存在して、内地商況の盛なること長沙を凌げり。人口約十萬。由來湖南人は尙武の氣風に富み、湘勇の名を天下に轟かせども、稍、頑迷にして、牙籌の知識に乏しきが故に、當地は勿論、本省北部の豪商富賈は江西人又は廣東人なりとす。

萍鄉炭坑

萍鄉炭坑は江西省袁州府管内萍鄉縣を距る東南約十四清里の山間安源にあり、光緒二十四年(明治三十一年)初めて稼業に着手す。鑛區は長さ約二十清里、幅約十餘清里、資本は四百五十萬兩に及び、一日の採炭額約一千噸に達す。技師長、技師等經營の局に當るものは皆獨逸人なり。擴張の施設完成せば

沙市

一日の出炭量二千噸に達すべしといふ。採掘の石炭はコークスとなし、又石炭の儘漢口に運出販賣す。而して運炭の爲め、安源より西方株洲に至る六十哩間に鐵道を布設し、是よりは湘江の水運と曳船用淺吃水の汽船とによる。

沙市は漢口を上流に距る約二九〇哩の揚子江左岸に臨み、是より下流は終年吃水六呎以下の汽船を浮べ得べし。其の商圏廣からざれども、而も漢口と四川省重慶との中間を扼する港市にして、此の地方より産する米、綿、木蠟、植物油等の集散を掌るのみならず、漢口、上海及び四川との取引も侮るべからざるものあり。

宜昌

宜昌は沙市より更に上流八〇哩の左岸、普通汽船溯航の極限地に位し、是より上流の急流部を通へる民船寄集し、仲繼商業盛なれども、水運錨地の沙市に及ばざるものあるが故に、商況亦沙市に劣れり。是より四川省界に至る百哩間は河水急激にして幾多の灘を造り、第一の灘は宜昌を距る三哩の上流にあり、近時、汽船蜀通號此の急流部の航路を開始したれど、未だ其の成績の良否を知る能はず。四川省の境を越ゆれば重慶を経て叙州に至る二

叙州・打箭爐

百哩間は、水勢復た緩にして、汽船の航行に便利なり。
叙州は揚子江の岷江を入るゝ所に位し、四川と雲南との間に立てる要津にして、市況盛なり。更に上流の打箭爐は海拔二、七〇〇米の高所に位する小都會にして、住民(約三萬)の大半は西藏族に占められ、西藏産の麝香毛皮等と四川省産の綢緞布疋茶等との交易行はる。

寧波

寧波は杭州灣より甬江を溯ること約十三哩の所にありて、吃水十呎以下の汽船の寄港に適し、且、杭州方面へ小運河を通ず。數百年前葡萄牙人との通商を開始してより、東西屈指の貿易場となり、明代に在つては本邦商人の來つて交易を營むもの亦少からず、我が遣唐使も多く爰に上陸したりき。一時は支那各地の産物の輻湊する所となり、繁榮支那第一と稱せられしが、先づ上海の開港によりて大なる影響を蒙り、次には下關條約によりて杭州の開港せられたるため、再度の打撃を受け、商圏著しく縮少して、通商上の價値を減じ、外國貿易は不振の域に沈淪したれども、内地各港との通商は今なほ見るに足り、棉花茶水産物及び紹興酒等の集散頗る活潑なり。今正に滬杭甬鐵道の上海より杭州を経て此の地に達せんとするあれば、將來當地の

紹興

商圏は幾分の回復を見るに至るべし。其の商民古來通商に従事して、經驗に富み、商機に敏なるが故に、出て、上海・漢口等にあるものは偉大の商勢力を有せし、現に上海に在る寧波人は十數萬に及べり。人口約二十五萬。
紹興は杭州の東方、杭州灣の南岸にあり、南方に會稽山などを負へども、河渠に富み、水運の便多し。春秋に越王勾踐の都城を構へし所、紹興酒(日本酒に酷似最上酒)の名産あり。

温州

温州は浙江省の南部、甌江の河口を距る二十哩の上流に位し、吃水十二呎以下の汽船を通ず。茶・竹木の集散多く、温州蜜柑の産あり。人口八萬。

九、南部地方

要旨

南部地方即ち南嶺山地以南の地勢・氣候・産業等を明にして、都邑發達の状態を推考せしむるを端緒として、主要都邑について觀察をなさしめ、更に英吉利の香港經營、南清の過去に於ける變遷の一端等を窺はしめ、兼ねて南清と我が國

南部地方

との關係を明にするを要す。

本文解説

南部地方は南嶺山地以南の地にして、南支那海斜面と、臺灣海峡及び東支那海斜面とに分れ、清國の最南部たるが上に海洋に面するが故に、氣候溫暖に、雨量多く、地味肥沃にして、米・砂糖・茶・生糸等の産に富み、殊に珠江流域の沃野は、北清又は揚子江等の平野に比し、著しく小なれども、生産力に富むことは清國第一たり。海岸線の出入頻繁にして良港多く、漁業盛なることも國內第一に在り、海岸内地共に港市都會の發達著し。

廣州

廣州は珠江下流の左岸數多の河渠縦横に交りて、網狀の三角洲を作れる所にあり、普通に廣東と稱せらる。水運の便に富みて、豊饒無比と稱せらる、珠江流域の咽喉に當る

が上に、其の住民は性質敏捷に、進取の氣象に富み、又夙に通商に熟達し、よく其の天與の好地位を發揮せしめて盛に商業を營むが故に、市況の殷盛なること清國第一と稱せられ、又香港を始とし、印度支那馬來群島等支那人の移住、出稼先に於て、商業界の牛耳を執るものは大抵廣東人なり。随つて人民多く此處に集中して、一大都會をなし、或は人口二百五十萬を算し、東洋第一の都會となすものあり、これ誇大の言辭たるを免れざれど、少くとも人口百萬内外を有し、支那第一流の大都たるを失はず。外國貿易の盛大も亦清國中唯上海に及ばざるのみにして、生糸絹織物の輸入甚だ多し。而して現今廣東港に直航する汽船は、吃水七八呎に過ぎざれども、將來一方に廣東より下流の珠江河道浚渫せられ、一方には廣東漢口間の粵漢鐵道完成の曉に至らば、廣

香港

東は眞に清國南方の正門たるの任務を負ひて、一段の繁榮を加ふべし。

香港は廣東を東南に距る九十哩の所にある小島にして、本陸より突出する半島と相對して其の間に天然の良錨地を抱き、島の北岸錨地に面して港市あり、之をビクトリヤといふ。英國の領地にして商港と軍港とを兼ね、島は一小岩島なれども、珠江の河口に近き所にありて、其の地位營に南清の門戸たる任務を負ふ上に廣東に優るとも劣るなきの要衝たるのみならず、東洋沿海航路の咽喉にもあたり、且、良錨地を有するが上に、英國の領有以來市街地經營、港内設備等一として施行せられざるなく、加ふるに自由港の制を布きたれば忽ちにして東洋の大貿易港たるの盛名を博し、廣東出の機敏なる商人は得意の手腕を揮つて、本市商業界

の主働者となり、英本國及び領地を始めとし、其の他西洋諸國と東洋諸國の間に立つて、盛に仲繼貿易をなし、其の輸出入額は公表の統計なきを以て明言すること能はざれども、我が國との取引額を見るに約二千二百萬圓、清國との取引額を見るに三億圓以上を數へ、又船舶の出入噸數を見るに、我が最大港たる横濱港の約三倍に達するの事實あれば、其の先輩たる廣東は固より、亞細亞の諸大港を駕駕せること疑を容れず。如何に英國の畫策の成功せしかを想像するに足るべし。然れども近年我が國及び其の他諸國の航海・通商の業大いに發達して、香港を東洋の仲介港となさざるもの漸く多きを加ふるに至り、廣東も亦將來交通上の面目を革めて、猛進せんとするの傾向を呈するに至りたれば、香港前途の活動を見るは又一段の趣味ある事項たるべし。

香港はかく各地方の産物集散上、有利の地位に在るが故に、工業も亦盛に、綿絲紡績・粗糖精製造船等の業大に行はる。我が國の主なる輸出先にして、近年我の彼より買ふこと著しく減少したるに反し、我の彼に賣ることは石炭・銅・燐寸・水産物等莫大の額に上れり。

福州・廈門

福州・廈門の兩地は臺灣海峡の沿岸に在り、一葦帶水を隔て、我が國の臺灣と相望む。此の地方は南嶺山地の數多の支派に分れて臺灣海峡に没する所なれば、山岳起伏して島嶼的形勢を呈し、廣き平野のなきは勿論なれども、其の間又水運の便に富める河流の小沃野を開きて、都邑の發達を促したるものなきにあらず。福州は其の好例にして、閩江下流に發達し此の地方第一の都會となりたるものなり。又海岸は小出入に富み、良錨地少からず、廈門は其の好例に

して、島上に立ち、良錨地を有するが上に、住民よく海事に慣れて、盛に民船貿易に従事し、此の地方に於ける至要の門戶として有名なり。而して此等の地方は今我が臺灣と國を異にすれども、もとは同一の省下にありしこともあるのみならず、臺灣人の多くは此等の地方の移住民の子孫なれば、商業上其の他についても相互の關係極めて緊密なり、加ふるに此の地方は後方は山脈のため内地と遮斷せられたるに反し、前面は僅に海峡を隔て、臺灣と相望むが故に、兩者の間に交通の頻繁なることは想像せらるべく、實に民船の往來は織るが如く、又汽船は基隆及び淡水より出て、定期に此等各港間の連絡を取れり。

参考

五〇、南部の都會(一)

廣東

廣東は西江の分派なる珠江の北岸、珠江の口より三十七哩を上りたる所にあり、新舊兩城内及び城外の市街より成り、舊城内は兩廣總督將軍等の駐在せる官衙地にして、新城内及び城外の西關は商業の中心たり。近時市街の擴張に隨つて、對岸の珠江南岸にも新市街設立せられたり。珠江は本來は廣東より下流をいふ。廣東より珠江を下ること十二哩の所に黃浦あり、當市外國貿易の創始地にして、もとは外國貿易船の是より上流に溯航するを許さざりしが故に、其の當時に在つては非常の殷盛を極めたりしが、今は廣東へ入港せんとする船舶にして、吃水十五六呎以上に荷積みしたるものが幾分の荷卸しをする所たるに過ぎずして、往時の面影を留めず。されど今や黃浦築港の計畫を聞くが故に、將來は其の廣東外港として、再び隆盛の域に達するや知るべからず。廣東の四近は西江、北江、東江の築成せる一大三角洲にして、豐饒無二を以て稱せらるゝが上に、此等諸河は數多の分派と共に網の如く交り、何れも水運の便を有せり。加之廣東は西江によりて約二百哩を距つる梧州へ汽船を通じ、約九十哩を距つる香港へは朝夕數隻の汽船を往來せしめ、大小の支那形船に至つては廣東を中心として西は西江

の本支上流、北は北江、東は東江等を往來して、貨物集散の業務を營むが故に、其の市況の盛なることは想像に餘あるべし。更に對外關係を見るに、印度及び西南亞細亞より極東に入るの要所に當るを以て、古へより外國との貿易行はれ、殊に葡萄牙人が澳門を中心として東洋貿易に従事せし頃には、第一に廣東と貿易を開始し、爾來内外の商業益々發達して今日の盛大を來したるなり。香港の興起は其の進歩を妨げたるの觀なきにあらざるも、而も一方より見れば、香港は廣東の出店たれば、又相俟つて繁榮を加へたること少からず。今や廣東より九龍に至る鐵道開通したれば、廣東と香港との關係は一層の親密を加ふるに至れり。又當市及び附近の工業は概ね舊式に係れども、而も機械織生糸、素絹、素絹製手巾等外國向き絹織物、花筵、砂糖、檀木及び金銀等の諸種の細工品を出すこと甚だ多く、中にも製糸業は最も盛況を呈せり。外國貿易は前記諸品の輸出を主とし、綿織物、綿絲、石油、水産物、燐寸、石炭等を輸入す。我が國より香港へ輸出せらるゝ諸品の多くは、更に廣東に至りて四方に分配せらるゝなり。當市の人口については、往々二百萬以上を數ふるものあり、これ誇大の感あれども、而も百萬内外に達することは

香港

明にして、單に此の點より見るも支那第一流の都會たるなり。
 香港は珠江口に彎入せる廣東灣口の東側に横はる花崗岩質の一小島にして、嵯峨たる岩山をなし、最高點のビクトリヤ峯は高さ一、八一五呎に達す。東西一一哩、南北二哩乃至五哩、面積約二十九方哩あり。本陸部雷州半島と僅に幅半哩許の海峡を隔て、相望む。此の海峡は即ち香港の港内にして、内外の二部に分れ、内部は雷州半島の南端なる九龍半島に抱かれたる九龍灣にして、其の陸地四面を蔽ひ、常に風浪の虞なし。外部は東風を避くるに稍、困難なれども、其の方向に當り無數の小嶼散點するを以て、大風の時と雖も、激浪を感ずる事甚しからず。水深三尋半乃至十一尋を保ち、九龍灣最も深く、潮汐干満の絶對差は七、八尺を出てず。天然の良錨地たること東洋無比と稱せらる。九龍灣に臨める四方哩許の地と共に、一八四三年以來英國の所領となり、近年其の防禦の必要上、香港島四近の島嶼、海面及び雷州半島の全部にかけての面積約四百方哩をも租借せられたり。島の北岸良の地に面して約五哩に亘れる市街は即ち香港港市にして、ビクトリヤといひ、人口約三十三萬を容る。岩島の水際より崛起する所にして、海岸低地を留め

福州

ざれば、市街は海濱の埋立地より起りて山側に開築せる階段地に至り、層々漸く高まりて、數百尺の高さに及び、區劃正整道路修潔、家屋清麗なり。山上にはビクトリヤ公園を開き、索引鐵道即ち山上鐵道を設けて庶民の登覽に便す。又港内には防波堤、無數の埠頭、船渠、燈台等一として備はらざるなく、防禦上の施設亦頗る嚴重、實に香港は英國の東亞經營の策源地にして、東亞貿易の大中心、英國支那艦隊の根據地たり。輸出入品の主なるものは阿片、砂糖、小麥粉、鹽、陶器、石油、琥珀、綿製品、檀木、米、石炭、木材、大麻等にして、支那の茶及び生糸の大部分も當市を經由して輸出せらる。純貿易額のみにてても約六千萬圓に達すべし。

福州は閩江の下流、江口を距る三十四海里、馬尾を距る九海里の上流に位して、南北の二部に分るれども、江北を占むる北部を府城とし、南部の南臺には外國人の居留地あり。頗る山水の景致に富み、風光の見るべきもの多し。四近に南北四里、東西三里に亘れる盆地を控ふ。閩江は福建省第一の大河にして、山岳の起伏甚しき地方を流るれども、而も水運の便に富むこと省内第一に位し、福州上流約八十哩の水口に至るまでは、小汽船溯航し、更に上流

馬尾

百哩の水源地附近に至る間にも小舟を通じ、之に注入する數多の支流の水運亦少からずして、其の流域には城壁を繞らせる都市二十七の多きに及び。福州より下流馬尾に至る間は滿潮の時に二百噸内外の汽船を通はしむるに過ぎざれど、馬尾より河口に至る間は、潮汐干満の差十八呎内外に達するを以て、六、七千噸内外の船舶を通はしむるに足る。且省内地勢險峻なりと雖も、山地の開かれて茶園となれる所甚だ多くして、紅茶の製造盛に行はれ、其の他竹紙、材木等の産少からず、此等の産物は閩江を下りて福州に集積し、外來の商品も亦之を分配の中心地とするが故に、福州の發達は閩浙政治の首腦地たること其の一端をなせども、商業上の要地たることも與つて大に力あるなり。唯憾らくは大船の城下に直航し能はざるの一あれども、早晚改浚の方法講ぜらるゝに至るべし。人口三十萬。南臺は閩江本流と分派の烏龍江とに抱かれたる島嶼狀の地にして、長さ凡そ七里、幅一里乃至二里に及び、一大橋を以て府城に連接す。閩江と烏龍江とは福州の上流七海里の所に於て岐るれど、馬尾に至り、再び相合して臺灣海峡に入る。馬尾は臺灣海峡を扼するに足る要衝なるが故に、砲臺を築き艦隊を置き、船政局

廈門

(造船機器の諸廠あり)を設くる等、清國の大に力を用ひたる所なれども、今は勢力何れも衰退の觀を呈す。

廈門は福建省の南部の鎮海角、閩頭間の一大曲灣中の北部にある一島にして、周回三十五哩、岩山屏立す、港市は西南隅に在りて、大陸の一角との間に介在する鼓浪嶼(三哩)との間に幅七、八百ヤードの港灣を形成し、港内水深十四呎乃至十六呎、天然の良港たり。廈門城は市の背後にあり。街衢狹隘且不潔に、全島亦荒涼の觀を呈し、唯港岸の一部に外國商店の壯麗なるものあるのみ。鼓浪嶼は外國人の共同居留地にして、大厦高樓多く、蒼樹奇岩と點綴し、宛然別天地をなす。此の地南清海岸の中央に位して、良錨地を有するが故に、十六世紀の頃、葡萄牙、西班牙人の東洋に來航するや、其の着目する所となりて、貿易場となりしことあるのみならず、其の住民は附近の泉州と共に、なほ古くより南洋、印度の方面と通商を營み、海事に堪能なるを以て聞ゆ。現に泉州、漳州等南部福建の人民にして、南洋諸島其の他にあるもの二百五十萬人を下らざるべく、年々出入するもの五萬乃至七萬に達し、此等は概ね當港を發着點とするが故に、當港の之が爲め、直接に利益を受くること

大なるが上に、移民の送金、歸郷者の生活程度の上進等は、此の地方に於ける購買力を増加し、間接に當港の商況を活潑ならしむることも亦少ならず。我が臺灣への出稼は近年減少したれども、なほ毎年數千人に及べり。我が臺灣茶はもと一部は福州に送られて福州茶となり、一部は厦門を仲繼港とせしが、基隆の築港以來之より直に輸出せらるゝに至りたれば、此の兩港は之が爲めに、少からざる打撃を受けたり。人口約十萬。

五一、南部の都會(二)

珠江流域には恰も揚子江に於て見たるが如く、數多の開港場あり。其の主なるものは廣東のほかに左の河港あり。

三水は廣東の西方、西江の北江に入る、所より少しく下りたる北岸にあり。城市は丘陵の上に位し、風光絶佳なり。一八九七年緬甸境界條約により開市せられたるところにして、港市は河畔の堤防外に在りて、土地低く、水害を蒙ること少からざれども、廣東、澳門、香港より梧州に上る汽船繫泊し、又三角洲内の各水路を來往する小汽船及び民船の發着頻繁にして、市況殷賑なり。將來粵漢鐵道の一部となるべき廣東、三水間の鐵道は明治三十七

三水

年六月開通せり。

江門 梧州 南寧

江門は西江の直に外海に注入する所より約三哩を上りたる所の左岸、澳門を距ること四十五哩にあり。一九〇四年三月開市せられたる所にして、此の地方に豊富なる雞卵、果實、蔬菜等を香港へ輸出すること多し。人口五萬五千。梧州は廣西省の東邊、西江の桂江に入る、點より少しく下りたる所の北岸にあり。廣東及び香港よりは約二百二十哩を距て、此等の各地と小汽船及び民船の往來繁く、吃水五呎未満の船は其の上流百五哩の地點まで溯航するを得。一八九七年の開市に係り、香港、廣東と貴州、廣西省西部とを中心點にあたり、有望の商業地たり。人口約五萬。

南寧は西江の一派、黔江の上流に位し、梧州を距る水路約三百二十哩、山間の城市にして、貴州、雲南の產物夥しく集中し、廣西省南部の中心市場たり。一九〇七年の開市に係り、將來は東京地方との通商も盛況を呈すべし。人口約五萬。

桂林・雲南

以上開市場のほか、廣西、雲南兩省には桂林、雲南等の内地市場あり。桂林は西江の一支、桂江の上流に位し、三面に山岳を繞らし、風景絶佳なり。廣西

大理

省城の地にして、廣東と舟楫を通じ、市況殷賑。人口約八萬。雲南は雲南省の中央山間の沃野に位し、雲貴總督の駐在地たり。近年佛國の敷設せる雲南鐵道、東京北境の老開より延長し來りしため、市況大に活氣を帶ぶ。人口約四萬五千。其の西北の大理は大理石の產地として知られ、大理石の名を得し所とす。雲南省の地は、佛國の南方より、英國の西方緬甸より來りて勢力の扶植に力を用ひつゝある所なり。

北海

南支那海及び臺灣海峽の主なる港市は亦開港場たり。南支那海沿岸なる北海、瓊州、澳門、汕頭、臺灣海峽の三都澳皆是なり。北海は東京灣の北岸にあり、一八七六年の開港にかゝり、天然の良港にして、滿潮の時には船舶容易に港岸に接近することを得。從來香港と雲南省東南部及び廣西省との貿易は、多く當港を経由したりしが、雲南省南邊の蒙自開市せられ、且、雲南鐵道開通してよりは、其の方面の貿易は佛領の東京に奪はれ、又梧州の開港も亦當港の商權を侵略したるが爲め、當港の商況は大に衰退を來せり。瓊州は支那の最大島なる海南島の北岸にあり、全島の首地にして、其の海港を海口といひ、兩地間約三哩半を隔つ。一八七六年四月の開港に係り、良好の錨地

瓊州

海南島と天蠶

を有せざれども、全島の吞吐口たり。海南島は土地膏腴にして、砂糖、檳榔子、檀木、天蠶糸、豚など諸種の産物を出せども、未だ開發遍からず、山地には黎と稱する一種の蠻族あり。天蠶は廣東廣西の各地に發生するが中にも、本島最も著はれ、春季の時季滋生し、夏季に至つて上簇し、樟樹の葉に養はれたるもの、最も佳良の糸を出す。

廣州灣

廣州灣は雷州半島の東側に在り。西は本陸部に、南は東海島に限られ、北より東にかけては、鷺州群島に抱かれ、灣内廣濶ならざれども、水深くして安全の良錨地をなす。日露戰爭後、膠州灣、旅順及び大連、威海衛が列國の租借地となりし後、即ち一八九九年十月佛國の租借地となりし所にして、同租借地は前記諸島間及び附近の海面、西より北にかけての本陸岸を含み、陸面積一九〇方哩、灣西の廣州を經營の首腦とし、東京のハノイに駐在する印度支那總督の所管たり。爾來廣州灣は要塞、築港等諸般の施設備はりて、今や廣東灣東門の鎖鑰、廣東省西部の要津と目せらるゝに至れり。汕頭は廣東省の東邊に位し、韓江の受水所たる一小海灣の北岸にあり、附近の地は、前面のほか、韓江の諸分派によりて築ける一大三角洲にして、前面には山崗起伏し

汕頭

潮州

て海濱に迫り、船客の所謂小喜望峰に至りて盡くるあり、又南澳島碧波の上
 に浮現して、風光頗る明媚なるが上に、氣候順良に、盛夏と雖も、九十度に上る
 と稀にして、風土頗る健康に適し、南清有名の保養地たり。港内は満潮の時
 には水深二十五呎乃至四十呎ありて船舶の入泊に適し、四近の地との交通
 は、韓江の水運の外に、日本人の技師によりて敷設せられたる汕潮鐵道を通
 じ、又四近の沃野は面積三百平方哩を以て稱せらるゝ耕作地にして、米の産
 乏しきも、砂糖、穀、蔬菜の産豊富に、近海亦漁利多きが故に、廈門は附近地方
 の門戸となりて、此等の産物を移出し、揚子江沿岸及び北清より米、大豆、豆粕
 等を移入すること多く、香港、南洋等との貿易亦盛にして、南洋諸島其の他に
 出稼人の多きことも、廈門と並び稱せられ、南清屈指の要津たり。人口約五
 萬。潮州は韓江流域の内地城市にして、汕頭の開港は一八五八年潮州の名
 を以て開港せられ、一時英國の領事は當城内に在つて貿易事務を執りしこ
 とあり。

五二、支那本部に於ける本邦人の分布 (四十二年十二月末現在)

(本邦領事館)

(領事館所在地以外、在留本邦人)

(領事館所在地以外、所管内在留本邦人)

(計)

天津總領事館	一八四三	(北京)七九八	二、九〇九
芝罘領事館	三八九	(其他)二六八	六一六
上海總領事館	八、〇二九	(青島)一七六	八〇五七
南京領事館	一六九	二八	二六一
蘇州領事館	一二六	九二	一二八
杭州領事館	八六	二	八六
漢口總領事館	一、〇二五	(武昌)一七四五	一、三四三
長沙領事館	一一〇	(其他)一七三五	一一〇
沙市領事館	(沙市)二九	宣昌市)二九	二九
重慶領事館	一〇四	一〇四	一〇四
福州領事館	四二五	四二五	四二五
廈門領事館	(内地人)一、四一七	(臺灣人)一、四一七	一、五八八
汕頭領事館	(内地人)一、二二五	(臺灣人)一、二二五	二四六
廣東總領事館	(内地人)一、三三八	(臺灣人)一、三三八	一七〇
香港領事館	八五二	(澳門)一五	八六七

(計)

一四、九三八

一、七七六

一六、九三九

五三、支那本部に於ける本邦汽船の航路

(汽船會社名)

(航路名)

(寄航地)

日本郵船會社……………横濱北清線……………横濱—四日市—神戸—門司—仁川—大連—太沽—營口

同……………神戸朝鮮北清線……………神戸—門司—長崎—釜山—仁川—大連—芝罘—太沽—秦皇島—營口

同……………神戸北清線……………神戸—門司—長崎—大連—芝罘—太沽—營口

同……………横濱上海線……………横濱—神戸—門司—長崎—上海

同……………米國線……………香港—基隆—上海—門司—神戸—四日市—清水—横濱—シヤトル

(復航には清水・四日市に寄港せず)

同……………歐洲線……………横濱—神戸—下關—門司—上海—香港—新嘉坡

大阪商船會社……………大阪天津線……………大阪—神戸—門司—天津

同……………香港福州線……………香港—汕頭—廈門—福州

同……………香港淡水線……………香港—汕頭—廈門—淡水

同……………打狗上海線……………打狗—基隆—福州—上海

同……………打狗廣東線……………廣東—香港—汕頭—廈門—打狗—安平

同……………米國線……………香港—基隆—上海—長崎—門司—神戸—四日市—清水—横濱—タコマ

(復航には清水・四日市に寄港せず)

日清汽船會社……………上海漢口線……………上海—鎮江—南京—蕪湖—九江—漢口

同……………漢口湘潭線……………漢口—長沙—湘潭

同……………鄱陽湖線……………九江—南昌

同……………漢口宜昌線……………漢口—岳州—沙市—宜昌

同……………上海蘇州線……………上海—蘇州

同	上海・杭州線	上海・杭州
同	蘇州・杭州線	蘇州・杭州
同	漢口常德線	漢口・常德
東洋汽船會社	米國線	香港—上海—長崎—神戸—四日市
		清水—橫濱—ホノル、—桑港

(四日市・清水には寄港せざるべし)

要旨

一〇、**蒙古・西藏・青海・新疆省**

清國の藩部なる蒙古・青海・西藏と近年直省に編入せられたる新疆省との位置・境域・地勢・氣候・産業・住民の種族等の大要を明にし、殊に蒙古・西藏に於ける喇嘛教の勢力の大なることを知らしめ、更に主要都邑について説明するを要す。

本文解説

蒙古

蒙古は支那本部の北・滿洲の西に隣れる盆狀の高原にして、四方に山脈を繞らし、西にアルタイ・天山の諸山脈、南より東にかけては、崑崙山脈の支派連亘す。内部は盆の底に當りて、往々山脈の崛起せるなきにあらざれども、大體に土地稍低く平均高度約三、〇〇〇尺内外とす。氣候純然たる大陸性にして、寒暑の差多く、中部地方は殊に降雨缺乏するを以て、東西に亘れる大沙漠地帯をなし、長さ凡そ八百里、幅凡そ二百里、其の間往々草原あり、灌木の茂れるありて、眞の砂海をなせる所は割合に少なしと雖も、要するに夏季僅に土人の遊牧上に利用せらるゝに過ぎずして、冬季に於ては滿目荒涼、唯、砂原礫野及び突几たる岩山を見るのみならず、暴風屢起りて、砂を捲き石を飛ばすこと珍しからざれば、交通上の大隔墻たること想像に餘あり。蒙古は此の沙漠の爲

めに南北の二部に分たれ、南部を内蒙古といひ、北部を外蒙古といふ。南北蒙古の地方は、寒暑共に烈しきこと、沙漠地方と殆ど同様なれど、夏季は稍、降雨多く、且、高山の積雪溶けて、數多の河流を養へるあるがため、比較的水分に富み、忽にして、百花繚亂の草海を生じ、無二の好牧場所々に發現せるを以て、綿羊、山羊、馬、駱駝盛に放牧せられ、羊毛、獸皮は土人唯一の財源にして、支那本部に移出され、其の天津を経て我が國に來るもの亦少からず。且、往々農業の行はるゝを見る。蒙古は、其の面積支那本部の約九割、滿洲の凡そ四倍に相當する廣大の地域を有すれども、かく沙漠又は草地の占むる所となるを以て、生産上の價值甚だ少きが故に、住民は滿洲の五分の一にも達せず、人口密度甚だ少なり。住民は概ね遊牧を最も得意とする蒙古族にして、天幕生活をなすもの

喇嘛

多きを以て、都會の發達せざるは勿論なれども、外蒙古の農業地にありては、永久的の家屋を構へて農業をなし、或は通商に従事するもの少からざれば、稍、著しき都邑あり。又内蒙古に在りては、漢族の移住し來りて農業を營むものあるが爲め、これに同化せられ、支那本部の北邊と殆ど同一の生活程度に進みて、其の一部の既に本部に編入せられたるさへありて、萬里の長城は實際上の境界物たらざるに至り、隨つて都邑の發達状態も、外蒙古と趣を異にするものあるを見るなり。而して蒙古族は佛教の一派なる喇嘛教を厚く信奉し、之が感化を受けて、往時慍悍、武勇の名聲を天下に轟かせし祖先の遺風を留めず、頗る從順、溫和の民族となれり。抑、喇嘛とは、西藏語にて無上を意味し、最上至極の義なり。廣義に喇嘛といふときは普通の僧なり。喇嘛教の主長は

庫倫

西藏の達賴喇嘛及び班禪喇嘛にして、其の下に西藏蒙古支那本部等に散居する大喇嘛あり。此の三者は、化身再生するものと信ぜられ、所謂活佛たるものとす。狹義の喇嘛は大喇嘛の下にあるなり。蒙古の主なる部落には大喇嘛ありて、概ね壯麗の寺院に住し、住民信仰の中心となり、中には土地人民を私有して、宛然小國王たるの實を有せるものあり。而して住民は單に篤く之に歸依するのみならず、僧侶となるを以て無上の幸福榮譽と信ずるの傾向ありて、住民の割合に寺院僧侶の多きこと驚くに絶えたり。

外蒙古の庫倫はバイカル湖に注入するセレンガ河の流域にあり、外蒙古第一の城市なり。寺區と商區との二部に分れ、寺區は庫倫城の在る所にして、城内に壯麗華美の宮殿あり、西藏の二大喇嘛に次いで、威靈あるものと信ぜらるゝ。

西藏

蒙古大喇嘛の宮殿にして、蒙古人は之を以て西藏の拉薩ラサに亞ぐの靈地とし、毎年夏季蒙古の諸部より來つて禮拜するもの甚だ多し。其の附近に群立する圓形の佛堂も亦結構壯麗にして、屋上總て金箔を以て裝飾し、炯々として人目を眩耀す。商區は蒙古人及び支那人の住地にして、支那本部と西比利亞との通商上重きを措かるゝ所とし、住民は通商又は貨物の運搬に従事す。辦事大臣亦此の處に駐劄して、主に通商事務を管掌す。人口凡そ三萬五千に達すべきも、其三分の一餘は喇嘛僧徒に係れり。此の地方は外蒙古中最も生産力に富み、往時は地味一層肥沃にして、農業の盛に行はれたりし所と信ぜられ、古へ蒙古人活動の本地となりしかば、元朝の故都の如きも亦此の地方に在りき。

西藏は西藏高原の地を占め、東は支那本部に北は青海及

び新疆省に、南及び西は印度に界し、面積凡そ蒙古の三分の一に及べる廣き地方なり。南境の印度境には、世界最高峻のヒマラヤ山脈横はり、北には亞細亞屈指の大山脈なる崑崙山脈連亘し、東は揚子江上流地方の重嶺深谷に限られ、他との交通極めて不便にして、從來世界の秘密國として知られし所なり。域内亦大山脈の東西に連亘するもの多く、中には南境のヒマラヤ山脈に匹敵するものもあり、等しく高原と稱せらるれども、蒙古高原などに比し頗る趣を異にせり、随つて域内に於ても南北交通の不便なること、四邊の境上に譲らず。平均高度一萬二千尺乃至一萬五千尺に達して、世界最大最高の高原たり。かく土地高峻にして、四境に山脈を圍繞するが故に、寒暑の差甚しきは勿論、殊に寒氣嚴しく、年内の大半は氷雪に掩はる。又降雨乏しくして、西北

拉薩

部の高原の如きは、沙漠・鹹湖甚だ多くして、亞細亞内部の特色を發揮すれど、南境及び東境に偏したる地方は諸大河の上流地方にあたり、夏季はヒマラヤ山脈其の他諸山脈の氷雪の溶けて河川を養ふものあるが爲め、灌漑の利便を得、地味稍肥沃にして、蔬菜・果實等を出し、牧畜は殊によく行はれ、犛牛・驢馬・山羊・綿羊などの家畜を産すること多く、且、天險を冒して印度及び支那本部の揚子江流域との通商稍盛なり。随つて此の地方には、住民の定住するもの多く、西藏の首府拉薩は、實にアラマポトラ河谷の沃地に發達したるものなり。住民は西藏族を主とし、多少の漢族・蒙古族等を交ふ。喇嘛教盛に行はれ、住民の約三分の一は喇嘛僧たり。拉薩は人口一萬餘の小城市たるに過ぎざれども、其の附近に喇嘛教の首長なる達賴喇嘛の宮殿あるを以て著はれ、

喇嘛の職權

宮殿は挿畫(教科書十四頁)に於て見るが如く、規模頗る宏壯にして四層樓をなし、高さ約三百尺、屋上葺くに金色燦爛たる瓦を以てし、其の内部の華麗に至つては、筆舌の及ばざる所なるべく、四近の寺院、佛殿、營壘と共に天地を壓し、壯觀言はん方なし。而して達賴喇嘛は單に宗教上の總首長たるのみならず、西藏行政の實權を握れり。蓋し西藏は其の未だ清國に服従せざりし時代に在つては、一の獨立國をなし、喇嘛は宗教上の主長たるに止らず、又政治上の君主にして、所謂政教一致の國體をなしたりしかば、其の清政府に服屬するに及び、政治上の主權を失ひたること勿論なれども、而もなほ政治上の實際に於いては、其の掌握に歸するもの多く、現に地方行政の如きも、達賴、班禪兩喇嘛の管下に各種の行政官ありて、域内を治め、中央政府より派遣せる駐藏大臣は行政

青海

上、兩喇嘛と平等の位置に立ち、官吏の任命につきては兩喇嘛と合議の上之を決定すれども、租稅徵收の如きに至つては全く喇嘛をして處理せしめ、唯其の監督をなすに過ぎず。但し軍隊の統帥權及び外交權は、中央政府の掌握する所とす。要するに西藏は清國の版圖たりと雖も、其の實は蒙古など、異りて、一の屬國若くは保護國たるの觀をなせるなり。近時中央政府は、駐藏大臣の手によりて、西藏の内政を刷新し、中央集權の實を擧げんとすれども、これ頗る難事たるべし。

青海は、西藏の東北に隣りて、東及び北は支那本部に抱かれ、西は新疆省に接し、清國地理上の中心より少しく西南に偏せり。崑崙山脈の本支脈の綿亘する所にして、揚子江及び黄河の水源地に當り、地勢、氣候、産業等恰も西藏の東南部

に於て見たるが如し。南境附近には往々西藏人を見れども、主として遊牧蒙古族の占むる所とす。普通に西藏の一部として取扱はるれども、行政上に於ては別箇の區分をなし、中央政府より派遣せる辦事大臣、東北境に近き支那本部の西寧に駐在して、本域内の行政及び軍事を統轄す。西寧に近き所に本地方と同名の鹹湖あり、清國第一の大湖として知らる。本地方の名は此の湖に得たるものなり。

新疆省

新疆省は清國の西邊に位し、東より南の大半にかけては蒙古・支那本部・青海・西藏と界を交ふれども、北及び西は亞細亞露西亞の中亞細亞に接し、南の一部は印度に境す。北邊の一部を除くのほかは、地勢恰も楯鉢状をなし、四方に高峻なる重嶺を繞らす。即ち西は世界の屋根と稱せらるゝ、パミル高原に限られ、南は崑崙山脈の本部に抱かれ、北は天山

山脈に擁せらる。唯東方の一部稍低下して、本地方と蒙古及び支那本部との交通上に多少の便利を與ふるのみ。而して内部は沙漠を包擁するの點に於て蒙古に類すれども、地形は蒙古・西藏など、大に趣を異にし、四方の高地より漸次低下して、甚しき凹處を作り、往々海面上百二、三十尺に達せざるところあるを見、大體の地形は略、我が山梨縣の規模を一層大にしたるが如き状をなせるなり。域内の大半は沙漠地なれども、四邊の高山より積雪の溶けて流下するもの、集りて幾多の溪流をなし、溪流の集りて遂に一條の河流を作るあり。上流地方は地味頗る膏腴にして、遊牧民の外は定住して農商業に従事するもの多く、都邑の發達せることも蒙古・西藏などの上に居り、隊商は數多の駱駝を率ゐて四境の山路を越え、印度・支那本部・中亞細亞との通商に従事

す。住民は天山以北には蒙古人多けれども、大部の地は厚く回教を奉ずる土耳古族の占むる所とす。此の地方はもと西域又は回部など稱せられ、蒙古、西藏等と共に清國の藩部たりしが、今より凡そ三十年前、清政府は其の叛亂に際し、之を平定して直省に加へ、巡撫及び將軍を派遣して、文武の兩權を掌握するに至れり。新疆の名は新開の疆土の義なるべし。

参考

五四、蒙古の變遷

蒙古北邊の中部は、バイカル湖に注入するセレンガ(色楞格)河の流域に屬し、同河大源流の貫流する所なり。元朝の當時に在つては、其の地味今日よりも一層良好にして、沃土の範圍亦遠き地方に及びたりしことは、元朝の帝都カラコラン(喀喇和林)の遺址の庫倫と西南に距る約十里、オルコン(鄂爾坤)

過去に於ける蒙古

蒙古の衰微と喇嘛教

(セレンガ六)河畔の沙漠中に發見せられたるに徴しても推知せらるべし。獨り此の地方のみに止らず、亞細亞内部の高原地方は、蒙古族土耳古族の全盛を極めし當時に在つては、地味概ね良好にして、文化著しく發達し、繁盛なる都市各所に建設せられたりしなるべく、近年瑞典の探檢家スヴェン・ヘデン博士などがタリムの盆地、其の他の沙漠中にて、古城市の遺址を發掘せるが如きは、其の消息を傳ふるものと謂ふべし。然るに今日見るが如き状態を呈するに至りたる原因は、固より一にして足らずと雖も、沙丘の移動、喇嘛教の傳播の與つて大に力あることは、現に之を目撃するを得べし。殊に蒙古人の喇嘛教を信ずるの厚き西域人に下らず、上は王公より下は野民に至るまで、吉凶禍福一に喇嘛教に依頼し、疾病あるも醫藥を用ひず、僧を請じ以て全癒の祈禱をなし、甚しきに至つては一家の財産を擧げて喇嘛に寄附するものあり。又毎歲禮拜者の西藏の拉薩、山西省の五台山等に至るもの、男女陸續相踵ぎ、苦行をなすを以て能く佛に奉ずるものとし、路上に頓首伏拜し、毫も身體の疲勞を顧みざるのみならず、之を以て無上の幸福とし、總て艱難の旅行をなすを最大功德となすこと、我が國の巡禮者などの比にあらず。

清朝の蒙古
懐柔政策

喇嘛寺院の大なるものは、庫倫、熱河、多倫、諾爾、喇嘛廟などにあり、熱河寺院の如きは、殊に壯麗を極め、西藏、拉薩の宮殿と其の構造を等しうせりといふ。僧侶の數に至つては大寺は數千人、小寺にも數百人あり、男子は嫡嗣のほかは僧となるもの多く、女子も亦僧籍に入るもの少からず。由來蒙古人は勇悍にして、支那の邊疆を侵擾し、歷朝の之が征服防禦に苦心せしことは、史乘に徴して明なり。清朝の蒙古を征服するに至るや、其の人民の最も信仰する喇嘛教に藉て、之を綏服、懐柔するに如くなきを知り、爾來喇嘛教を以て蒙古の國教たるの性質を帶びしめて、特別の保護を與へ、時には十數萬金を支出して、寺廟を建立せしが如きことも少からざるを見るなり。其の政策は著しく功を奏して、邊疆無事なるに至りたりと雖も、又一には慄悍を抑へて怠惰に歸せしめ、滋生を妨げて衰弱に陥らしめ、延いては蒙古到る所に荒涼無人の境を作り、外侮を招くの媒たらしむるに至りたるこそ是非なけれ。

五五、蒙古の都市

蒙古の都市には庫倫のほか、稍、名あるもの少からず、庫倫を北に距る約七十哩の境上に買賣城我が國にて普通に買賣城とすあり。露領のキャフタ恰

庫倫・買賣城・張家口

克圖と僅に木柵を隔て、相接す。キャフタはもと清領なりしが、ネルチンスク條約に基き、露領と境界を劃定せし以來露領となりしかば、之に接近して市場を設け、以て陸路貿易の市場に充てたり、これ即ち買賣城にして、庫倫の出張所たるべき地なり。蒙古横斷の道路は、是より庫倫を過ぎ、東南に向ひ、戈壁沙漠を経て、内蒙古の張家口に達す。此の道路は、北京と外蒙古との至要連絡路たるのみならず、往時は清國と露西亞との交通及び貿易上、重きを措かれたる所にして、以上の各都市は、物々交換の大市場となり、清國より歐羅巴露西亞及び西比利亞に輸出する磚茶、綿布、綢緞等と、歐露及び西比利亞より來る諸織物、金屬製品、其他狐貂等の毛皮類との集散盛に行はれ、此等の商品を運搬する隊商の往來は、常に絶ゆることなく、又露國官吏及び巨商は、各市場に在住し、支那商人も亦來集して、通商頗る盛況を呈せしが、其の後天津條約（一八六〇年）により、諸港開かれて、海路經由の通商盛になり、且、西比利亞鐵道の開通したることは、蒙古經由貿易に大なる打撃を與へたりき。而もなほ以上の都市に於ては、陸路貿易の行はるゝこと少からざるのみならず、蒙古各地に對する至要の門戸たることに至つては、依然として舊觀を

多倫諾爾・歸化城

保ち、張家口の如きは、商況頗る盛況を呈せり。
多倫諾爾歸化城は、長城外に在りて、張家口と共に、内蒙古の地なれども、今は張家口及び多倫諾爾は直隸省に、歸化城は山西省に編入されたり。多倫諾爾は、一に喇嘛廟といふ、曠漠たる草地の中に在りて、五穀生ぜず、もと一小鎮に過ぎざりしが、康熙帝巨資を投じて喇嘛の二大寺を建立せしより、漢蒙商賈の雲集する所となり、蒙古東南部の市場たり。しかのみならず、銅鐵の佛像の鑄造を以て著はれ、年々各地に移出すると少からず。寺院大小十五寺、僧徒二千以上に及びべり。歸化城の名は、往昔順義王俺答コル此處に居り、明朝に歸順せしに基くといふ。北京より外蒙古の烏里雅蘇台の方面へ至る必由の要路に當り、隊商の往來頻繁に、商況活潑なり。此の地乾隆の末年まで道行最も高さ、喇嘛の駐錫せし地にして、其の後庫倫に移轉するに至りたれども、今なほ靈場として尊崇せられ、喇嘛僧の數殆ど二萬人に達すべしといふ。

烏里雅蘇臺・科布多

烏里雅蘇臺及び科布多是、外蒙古の西部にあり、共に西北邊疆の重鎮にして、前者には定邊左副將軍、後者には參贊大臣駐在す。又兩市四近の地は頗

西藏の地勢と交通

る沃饒にして、牧畜盛に行はれ、殊に後者は露領との通商地たり。

五六、西藏の交通と都市

西藏は大山脈の東西に並走する所となり、南境にはヒマラヤ山脈、中央には之と並びてカラコルム山脈及び近時スベン・ヘヂン博士によりて探検せられたるトランス・ヒマラヤ山脈あり、是より北にも、亦幾多の高峻なる山脈あるが上に、沙漠地あるが故に、南北の交通は極めて不便なれども、ヒマラヤ山脈とトランス・ヒマラヤ及びカラコルム山脈との間に形成せられたる縱谷は、ブラマプトトラ河の上流サンポ河及びインダス河源流の背馳する所にして、地味肥沃に、夏季の氣候頗る快和なれば、西藏の主要部となり、産業都市を始めとし、交通の主は此處に發達せるも、固より其の所なりとす。西藏を大別して、前藏・後藏の二部とす。前藏の拉薩城は、西藏の政治・宗教・商業・交通の中心にして、城内には辦事大臣駐在し、其の西の布達拉山には、達賴喇嘛の宮殿を構ふるあり、又印度とはシキムの境上なる亞東を開市場として、通商を營み、四川省の方面とは打箭爐四川を仲繼市場として、貨物を吞吐し、北京とは青海・西寧等を経て交通の便を有す。道路固より崎嶇・羊腸、河上橋梁

達賴喇嘛と班禪喇嘛

なく、或は一萬二千尺以上の峠を攀ぢ、或は千仞の深谷を渡り、交通の不便なること言語に絶すと雖も、住民巧に犛牛を利用して運搬交通の便を圖れり。抑、犛牛は其の性質忍耐に、舉止敏捷にして、急灘激流と雖も貨物を負載しながら、よく渡過し、峻山高嶺と雖も容易に攀登し、絶壁險隘と雖も、其の歩調正整にして毫も亂れず、實に此の地方に於ける唯一の交通機關たるものなり。從來西藏は支那及び同種族同宗教のネパール、ブータンの二酋長國とのみ交通し、他國に對しては鎖國主義を取り、外人の入るを嚴禁したれば、學術的探檢の行はれざると亞弗利加内地の上に居り、世界の秘密國として世界に喧傳せられしが、近年英國と協約して南境の亞東を互市場とするに至り、又スザン・ヘデン博士我が國人等の實地探檢により、其の地理の世に紹介せられたること少からず。後藏の政治宗教の中心希迦子城は拉薩を西に距る八日程サンポ河の右岸に位し、城の西南隅なる札什倫布の名勝は班禪額爾德尼即ち班禪喇嘛の駐錫地なり。達賴喇嘛の達賴は蒙古語にして、海洋を意味し、班禪額爾德尼も亦蒙古語にして、重寶の義なりといふ。而して前者は觀音菩薩、後者は金剛菩薩の化身と稱せられ、各宗教上の首長となり、

主なる輸出入品

行政の實權を握り、其の地位互に平等にして、唯、達賴喇嘛は主として前藏の教權を掌り、班禪喇嘛は後藏の教權を握るが故に、其の教權の及ぶ領域に自ら廣狹の差あるのみ。西藏の主なる輸出品は麝香、羊絨、牲畜、皮革、藥材等にして、主なる輸入品は布疋、綢緞、穀類、茶、磁器等とす。

五七、新疆省の地勢と都市

新疆省の地勢

新疆省は天山山脈によりて南北の二部に分れ、南部は域内の大部を占め、別名を天山南路、東トルキスタン、回部等といひ、北部は天山北路又はゴングリヤと稱せらる、南部は西藏高原、パミル高地等の昂起せると反對に、非常に低窪の盆地をなし、又天山山脈の縦谷中に於ても著しき陷沒地をなし、甚しきは海面と略、同高度に達する所ありと稱せらる。此は直に信ずべからずと雖も、海面上僅に數十米を出でざる地點あるは確かなり。これ即ち塔里木の盆地にして、過半の地はタクラマカン沙漠をなす。塔里木河はパミル高原、崑崙山脈の本部、天山山脈等に發する急流に養はれて、一時は水量稍、豊富なれども、是より進むに随つて次第に水量を減じ、時に沙漠中に消失し、時にはロブノル湖に達し、又沙丘の爲め、著しく下流の河道を變ず。ロブノル

住民と産業

湖は從來鹹湖として知られたりしが、スペイン・ヘデン博士の探検する所によれば、微少の鹽分を含むに過ぎずして、むしろ淡水湖に屬するといふ。沙漠中にも往々沃地の點在せざるなきも、主要生産地はタリム諸源流の沃地(オアシス)に限られ、此處に幾多の都邑を發達せしめたることは、清國の藩部中他に見ざる所とす。住民は熱心なる回教信者にして、此の地を一に回部と稱するは、之が爲めなり。産業は、牧畜のほか麥類、棉花、果物等を産し、又養蠶業の行は、所あり。土人河水を汲取り、或は之を引きて田園を灌漑す、其の法頗る妙を得たり。

ヤルカンド

タリム河二大源流の一なるヤルカンド河畔にヤルカンド、カシユガル河畔にカシユガルあり。ヤルカンドは、カラコルム山脈を横斷して印度のカシユミル地方と通商し、地産綢緞等工藝品を産す。市内に壯麗なる回教寺院あり。ヤルカンド河の水源は、有名なる崑崙の玉の産地たり。カシユガルは露領中亞細亞との通商盛なり、前者と共に南路の二大市場にして、貨物運搬の駱駝常に群集す。ホタンは六七世紀の頃有力なる帝國の首都たりし所にして、地産及び寶石細工に知らる。

カシユガル

ホタン

ズンガリヤ

ズンガリヤの西部には伊犁河の陥没地あり、沃饒の地にして、クルジヤを中心市場とし、露國人との通商盛に行はる。此の地方は、一八八〇年頃より露國の侵略する所となり、地域著しく減少せり。東部の高原なる迪化は一に烏魯木齊といふ。新疆巡撫の駐在地にして、人口約五萬、住民の四分の一は土耳其族に屬す。

一一、沿革

要旨

支那の住民中、漢族は東洋文化の開始者たれども、古來革命の思想に富めると、其の四近に於ける蒙古族、土耳其族、滿洲族等の異種族に對する成敗との爲め、革命繁く、國號の屢變じたることを知らしむると同時に、我が國體の完美なる所以を悟らしめ、更に現朝の興起及び爾來の國勢消長、古來我が國との關係等につき大要を窺はしめ、兼ねて支那の動

靜は、我が國に至大の影響を及ぼすが故に、我が國民たるものは、常に支那に向つて十分の注意を拂ふの必要あることを知らしむるを要す。

本文解説

支那本部の地は、もと蠻族の瀰蔓せし所なりしが、今より數千年前、黄河の上流地に住みたりし漢族、漸次黄河に沿うて下り、黄河の下流の沃土に占據定住して、盛に農業を營むに至りてより、戸口の繁殖、文化の進歩頗る急速に、四近の蠻族を壓迫征服して、有力なる國家を形成するに至り、周の如きは其の一にして、我が神武天皇御即位前約三百五十年前に於て、高度の文明に達し、今の西安の附近に西都(鎬京)、河南の附近に東都(洛邑後)を作り、天下に號令したるのみならず、制を定め、禮を作り、支那歴代の制度、禮法の本源を開きたり。

支那文化の
發達と周

王朝の興亡
繁き所以

孔子、孟子等聖賢の輩出せしも、我が紀元百年頃より三百年頃に至る時代なりき。而して支那は建國以來支那には天子は天位を承け之を行ふの義務あるものにして、天意は則ち人民の有形上又は無形上の幸福を圖らざるべからず、若し天子たる君主にして、私利を營み、國利民福を顧みざるが如きは、君主の資格を失ふべきものなれば、他の民心を得たるもの、取りて之に代るは當然の事理なりといふが如き思想、發達したるが故に、先に建設せられたる國家と雖も、其の政治弛廢し、民心を收攬し能はざるに至れば、他の有力なるもの起つて之を倒し、以て新なる國家を建て、國內を統一し、然らざるも、或は各地に割據して殆ど別箇の國家を建つる等の如きこと相踵ぎ、しかのみならず、外蒙古の地方を根據地とせし蒙古族、蒙古の一部より新疆省地方に蔓延せし

群雄割據と
秦の興起

土耳古族等の、虎視眈々、漢族の國家を覬覦するありて、王朝の興廢繁きこと世界に比類なし。漢族王朝の主なるものには、周のほか秦漢隋唐明等あり、蒙古族の王朝に元あり。周の衰ふるや、我が足利時代の末世に於けるが如く、諸侯の跋扈漸く甚しく、諸侯其の初めは、内王室諸侯の難を靖め、外戎狄を攘ひ、所謂尊王攘夷を標榜し、美名の下に攻争侵略を逞しうし、大は小を呑み、強は弱を併せて、小數の強者即ち列強を生ずるに至りしが、周室式微の極に達し、恢復の望なきを看取してよりは己を中心として、天下を一統せんとする慾望を挾むに至り、列強角逐の結果、勝者の地位に立ち、皇帝として天下に臨むに至りしものは即ち秦なり。秦は今の西安附近の咸陽(渭水の左岸)に帝都を構へてより、從來の封建を廢して郡縣の制を布き、天下を擧げて天子の直轄とし、大に

項籍と劉邦
との角逐及
び漢の興起

中央集權の實を發揮し、國勢一時強大を極め、豪奢の標式たる阿房宮を渭水の南に造り、匈奴即ち土耳古族の南進を防ぐ爲めに、萬里長城を築きたるが如き、有名の事業甚だ多し。又天下の學者は、朝政を是非し、庶民を惑はしむるものとし、民間の藏書を沒收して之を燒き、天下の學者を縛して、坑にしたるも亦其の時なりき。驕るもの久しからずの譬の如く、秦の專横は諸侯の反抗を惹起し、帝を稱してより僅に十五年にして、項籍劉邦のため亡されき。次いで項籍は東部河江の間に楚王を稱し、劉邦は漢水上流の盆地に漢王を稱す。此の兩勢力の軋轢は兵火を以て相見ゆるに至り、兩勇の奮鬪頗る目覺しかりしが、劉邦遂に勝を得て、天下を一統し、皇紀四百五十九年都を長安に奠め、帝位に上れり。これ即ち漢の高祖にして、夙に寛大の長者を以て知られ、其の配

下には政事家に蕭何、參謀官に張良、良將に韓信等の名士多かりき。項籍は即ち項羽にして、勇武と楚の名家たるとの故を以て諸將の推す所となり、范増を謀臣とし、勢威劉邦の上にて在りしが、遂に漢軍重圍の中に陥り、壯烈悲慘の最期を遂げたりき。漢長安に據り、天下を治むること約二百年、政權一旦外戚の手に移りしが、直に恢復せられ、尋いて都を洛陽に奠むるに至り、國威復大に振張せり。而して漢の領域は、今の支那本部の殆ど全部は固より、東は朝鮮の中部、西は天山山脈の西に及び、南は印度支那半島の東岸より、北は内蒙古の全部に亘りたりしが、當時西域即ち中亞細亞には、印度に起りし佛教の、西北に進みて傳播せられたるあり、漢の此の方面と交通を開きしより、佛教始て支那に傳來し、洛陽に白馬寺草創せらる。これ佛教の東洋に勢力を扶殖する

再度の群雄
割據と隋の
興起

の端緒なり。又當時印度洋を経て海路東西の交通行はれ、漢船の錫蘭地方に往來するもの亦少からざりき。漢は西漢・東漢を通じて天下に帝臨すること約四百四十年の久しきに及び、其の末世復た群雄割據し、一時は天下三分せられ、曹操は魏國を今の北清一帯の地に建て、河南の東に當れる鄴を帝都とし、孫權は吳國を揚子江下流の流域より南清に亘れる地方に建て、今の南京の地に帝都建業を作り、劉備は義弟の關羽、張飛及び諸葛亮の如き名士を率ゐて、蜀漢國を今の四川・雲南の兩省地方に起して、成都を帝都とし、かくて三國の鼎立を見るに至りしことあり、而して漢の滅亡より約三百五六十年の間は、殆ど擾亂相次ぎ、其の間外夷の中國に跋扈せしこともあり、小康を得たる期間頗る短かく、要するに其の間大國家として見るに足るものなかりき。

三度の群雄
割據と唐の
興起

かくて皇紀千二百三十年頃に至り、三國分立の時の如く、北周は揚子江の上流地方に據り、北齊は揚子江の下流以北に、陳は江南の地を占め、各帝を稱せしことありしが、北周は他の二國を滅ぼして天下を統一す、隋は即ち之にして、其の始祖を文帝といふ。文帝は頗る治才に長じ、専ら意を内治にり注ぎ、其の刑法・官制等の、此の後に興れる唐國の模範となしもの少からず、文帝に繼いで立てる煬帝は性豪奢を喜び、長安を西京、洛陽を東都となして、大に都城宮殿を營み、今の大運河を始めとして、數多の運河を開鑿し、長安より舟行して江南に至るを得せしめ、長城を増築する等大に土木を興し、又一方には遠圖を好み、屢、外征を試みたりしかば、天下其の負擔に苦しみて皆亂を懷ひ、隋國忽ち分崩して、天下麻の如くに亂れ、群雄蜂起するに至りしが、聰明なる李世民なる

もの、父李淵を助けて西京の附近に起り、天下を平定して唐室を興す、時に皇紀凡そ千二百九十年、淵は即ち唐の高祖にして、世民は即ち太宗なり。

太宗は秦漢以來第一の聖主と仰がる。諸般の制度亦畫策せられて、其の支那歴代の典範となりしのみならず、我が國の歴代の制度の如きも、亦之に參酌せしこと少からず、實に其の全盛の時に於ては、國土の廣大、國勢の富強、文物の燦然、前古無比なりき。西南亞細亞との交通も海陸共に頻繁を極め、耶蘇教・回教等も此の時に東漸し、又名僧の印度より入唐するものも多くして、佛教は殊に隆盛を極めたり。我が國の支那との交通も、主として、隋唐の際より始まり、彼我の使聘漸く頻繁に行はれ、工女を吳に求め、小野妹子を隋に遣はし、最澄・空海・阿部仲磨等の入唐の如きは是なり。且、其

四度の群雄
割據と滿洲
族及び蒙古
の活動

の文明の朝鮮を経て輸入せられたるものも亦少からず。仲磨長安に寄寓し、三笠山に托して、懷郷の情を述べし和歌の如きはよく人口に膾炙す。かくて我が國の制度・文物は彼に負ふこと頗る大なるものありき。唐天下に號令すること約二百九十年、其の將に滅びんとする頃には亦豪傑四方に起り相吞噬す。其の大にして王號を稱するものには、今の北京を本據とせる燕、山西の地を占めたる晋、四川の地を領したる蜀、揚子江下流の揚州に據りたる吳などありき。而して其の頃滿洲族・蒙古族漸く強大となりて、中國を侵略すること甚しく、爾來漢族の王室は、宋・明のほか、復た往時の如き盛大を致すものなかりき。滿洲族にして帝を稱せしものには、先には遼・金あり、後には現朝あり。遼・金は其の版圖黄河の流域以北に限られしが、現朝は支那全土を席捲し

元の興起

て、天下統一の實を擧げたり。其の遼・金について蒙古の勃興あり。蒙古は外蒙古の庫倫地方を根據とし、最初は微々たるものなりしが、鐵木眞に至り、金を助けて功名を博せしを以て、膨脹の端緒となし、爾來今の蒙古地方及び附近に割據せし蒙古族及び土耳古族等の各部を征服し、内外蒙古の殆ど全部を併呑して、大汗の位に即き、成吉思汗と號す。時は皇紀千八百六十六年なり。成吉思汗は更に進んで南の方金を討ち、西の方、中亞細亞を徇へ、忽ちにして、内外蒙古・滿洲支那本部の北半・天山南北路・中央亞細亞等に亘れる廣大なる版圖を形成せり。成吉思汗死し、之を太祖とす、其の三子太宗は太祖の遺志を繼ぎ、金を滅ぼし、高麗を破り、東方稍事なきに及んで西征を企て、拔都に命じ、五十萬の大軍を授けて西向せしむ。拔都は中亞細亞を経て歐羅巴に攻入り、モ

スコーを陥れ、更に西南に進撃して二軍を分ち、一軍はダニ、
一ノ河の流域を侵略し、一軍は獨逸を蹂躪し、歐洲全土を震
駭せしめしが、會、太宗の計至り、東に還る時は皇紀千九百年
の頃なり。太宗より定宗を経て、憲宗に至り、皇弟忽必烈を
して、南方を經略せしめ、皇弟旭烈兀をして、西南を討平せし
めたり。又自ら大舉して宋を降伏せしめられたれば、實に空前
の大帝國を形成し、其の版圖は西、小亞細亞半島、歐羅巴の東
北部より、東、黑龍江口附近より以南の太平洋沿岸に及び、北
は西比利亞の南部を含み、南は印度及び印度支那の大部を
除くほかを占め、其の後、馬來諸島を従へたり。而して憲宗、
宋國征服の中途にして死したれば、忽必烈北に還り、蒙古の
大汗となる、之を世祖となす。世祖新に都を燕京に奠めて、
之を大都と名づけ、國を元といふ。元はかく亞細亞を東西

に一貫する大帝國を建てて、國內に官道を開き、宿驛を設け
て交通の便を計り、守備兵を配置して風紀を取締りたれば、
東西兩洋の交通は大に面目を一新し、西部亞細亞及び歐羅
巴の商人は、陸路東亞に來るもの多く、又波斯、印度等とは海
路相往來し、福州の如きは當時世界の商港として有名なり
き。我が國の伊太利人により西洋に紹介せられしも此の
時なり。しかのみならず元は人種の異同を論ぜず、才能あ
るものを登用せしかば、亞刺比亞、波斯、伊太利等の學藝に秀
でたるもの、其の朝に仕へ、西方の天文、數學、砲術等を傳へし
こと少からざりき。世祖は又東南及び南方に勢威を擴張
せんとし、先づ我が國を招致せんとせしが、我が國は其の書
辭の無禮なりしを以て、之を退く、世祖大に怒り、我が國に寇
せしが、大敗して其の目的を達する能はざりき。其の後元

明の興起

朝は反亂相繼ぎ、國勢日に傾頽するに至り、金陵即ち今の南京に據りたる朱元璋なるもの、漸く頭角を露はし、四近を併呑して大に領土を擴張し、北に向つて元の大都を攻陥し、帝位に即く。之を明の太祖とす、時に皇紀二千二十八年なり。太祖は支那本部に君臨するに至りたれども、なほ北には元軍の恢復を圖り、南には帝又は王と稱して歸服せざるものありしかば、先づ専ら外征に従事して南北を平定し、次いで内治に力を用ひ、諸官制は概ね唐代の舊に復せり。而して明は最初金陵を國都とせしが、其の後、都を元の故都に移して北京といひ、金陵を改めて南京といふ。明と我が國との關係は、豊臣秀吉の朝鮮征伐に於て彼我の交戦を見るに至りしこと、及び足利義滿の使を遣はして隣交を修めてより、交通の頻繁に行はれたること等を主なるものとす。

清の興起

かく漢族は元朝を滅ぼして明國を建てたれども、これ所謂掉尾の事業にして、其の衰ふるや、先きに蒙古の爲めに滅されたる滿洲族の餘燼なる覺羅部、長白山脈の附近に再燃し始め、皇紀二千二百七十四年には、國號を滿洲といひ、皇帝を稱するに至れり。これ即ち滿洲の太祖にして、實に現朝の祖先なり、是に於て明朝との衝突起り、二世太宗は先づ漠南即ち内蒙古を經略して國號を清と改め、漸次歩武を進め、三世の世祖の時に至りて、支那の北部を定め、國都を北京に遷す。されど南部には、明の王族を奉じて恢復を圖るもの相踵ぎ、清の政令南部に行はれざりしかば、清は先づ南部の經略に従ひ、次には塞外の平定に着手して、外蒙古を降し、西藏を従へ、天山南北路の西域を徇へ、又安南を内附せしめて、清の勢威大に振ひ、西南諸國の其の保護を仰ぐものあるに

至れり。而して清朝祖先の滿洲に起りし頃、西洋に於ては航海術大に進歩して、葡萄牙、西班牙、和蘭、英吉利等の東洋に遠航を試み、勢力の扶殖に腐心するもの相次ぎ、其の頃歐羅巴の東部に起りし露西亞は、亦陸路東方の經略に力を用ひたりしかば、清國は此等の諸勢力と接觸し、種々の外交關係を惹起するの已むを得ざるに至り、聖祖の時、露西亞の黑龍江沿岸に侵入し來りたるに際しては、邊境の守備兵を増して之を擊退し、露西亞と境界劃定の條約を結ぶに當りても、頗る強硬の態度を示し、露西亞の侵略したる地域を還附せしめ、黑龍江左岸の分水嶺を以て國境とし、頗る有利なる條約を締結したれども、爾後の外交事件は概ね失敗に歸し、大に國威を毀損せり。

東西兩洋の交通頻繁となりてより、印度、亞刺比亞等に産

香港割讓

する阿片の英商の手により廣東港に輸入せらるゝもの年と共に多きを加へ、國人舉つて之を嗜好するの傾向を生じ、其の弊害の恐るべきものあるに至るや、政府は禁令を下し、犯す者を嚴科に處することゝなしたれども、なほ之が吸飲と密輸入とを絶つ能はず、乃ち有爲の官吏を密輸入の門戸たる廣東に駐在せしめて、禁斷の勵行に任し、阿片輸入に従事する支那商を殺戮し、英人所持の阿片を焼き棄て、海中に投じたるのみならず、英商に對する處置暴狀なるものありしかば、英領事情を英政府に具申し、保護を願ひたり、英政府は最初清國の處置を正當とし、不問に附せんとせしが、清官吏の暴戾殘虐、其の極に達し、英國の威に關するものあるに至りしため、遂に戰端開かるゝに至り、英國軍艦の南清の諸港を攻略し、上海を根據地として、將に南京に迫らんとす

るや、清廷和を乞ひ、南京に於て條約を結び、香港を割讓し、上海、寧波、福州、廈門、廣東の五港を互市場となすこと等を決定す。これ實に清國歴史上の重大事件にして、時は皇紀二五〇三年なり。其の後英國船廈門より貿易のため、廣東に來りて其の河口に碇泊せしに、清國官吏、名を一揆黨派の捕縛に託して、其の中に入り込み、清人を拘引せしにより、英、清兩國の間に葛藤を生じ、英政府將に強硬の態度に出でんとするに當りて、偶、佛國の宣教師南清に於て殺害せられしかば、英佛兩國力を協せて廣東を攻略し、北上して白河に入り、天津に迫らんとせり。乃ち清廷は假に天津に於て平和條約を結び、二國の兵を去らしたためり、時は皇紀二五一年なり。然るに其の翌年天津條約の批准交換のため、兩國より公使を派遣せしに、白河河口の砲壘より之を砲撃し、損害を蒙ら

東北境の割讓

しかば、兩國の朝野大に激昂して大軍を起し、清國に向はしむ。同盟軍は先づ大連、芝罘を占領し、次いで白河の砲壘を沈黙せしめ、天津を略し、北京を陥れしかば、清帝熱河に蒙塵し、北京は殆ど無政府の姿となれり。時に會、露國公使の北京にあるあり、兩國の間に立つて斡旋し、漸く講和條約の締結を見るに至りたり。清國は此の條約により兩國に償金を支辨したる外に、漢口、天津、其の他數港を開放し、又香港の對岸に當れる本陸の一小部を英國に讓與せり。露國は曩に清國と不名譽なる條約を結びて、其の東方經營に一大頓挫を被りしと雖も、露國が太平洋方面に海港を得んとするは、年來の大方針なれば、清國の内亂に乗じ、曩の條約を無視して、黒龍江沿岸に民を移すとともに、兵營を建設し、或は艦隊をして江を下らしむる等、決して經略の手を

臺灣の割讓

緩めず、かくて新に清廷に向つて境界を劃定せんことを逼り、清廷已むを得ず、條約を結び、黒龍江の上流を以て兩國の境と定め、黒龍江の下流及び同江の支流烏蘇里江以東の地域を以て共有地となし、松花江、烏蘇里江の通航權を許與せり。烏蘇里地方は、かくて共有の名義の下に置かれたりと雖も、其の實權の露國に掌握せるゝに至るは明なりとす。而も露は之に満足せず、其の後英佛同盟軍の北京を陥るに際し、露國公使の調停効を奏し、清國朝野の露國に對する感謝の情盛なるの好機に當つて、清國に請うて烏蘇里地方の全權を收め、浦鹽斯德の良港を建設し、宿望の一を達したり。其の後清國は朝鮮問題について、我が國と開戦したれども、連戦連敗し、下關に於て講和條約を結び、我が國に遼東半島及び臺灣の割讓を盟ひ、且償金の支辨、蘇州、杭州、沙市、重慶

關東州の租借

の開放を約したり。而して我が國は遼東半島については露獨佛三國の勸告を容れ、代償金五千萬兩を受けて之を還附せり。由來清國は強大を以て知られ、西洋諸國の敬畏する所となりしが、日清戰爭以來、大に其の名聲を失墜し、各國は之に乗じ、好機ある毎に清國に迫りて有利なる條約を結びたり、其の主なるものを掲ぐれば左の如し。露西亞は既に浦鹽斯德港を得て、之が施設に力を傾注し、且本國との連絡上大鐵道を企畫し、着々其の歩武を進めたり。然るに浦港は一には冬季結氷し、且我が國の爲めに行動を控制せらるゝの虞あると、一には黒龍江沿岸に於ける鐵道敷設の困難不利なるとの爲め、早くも目を滿洲、朝鮮の方面に注ぎたり。偶、我が國の遼東半島を領有せんとする

や、露西亞は直に他の二國と力を協はせて、我が國に勸告し、我が國をして、遼東半島を清國に還附せしめ、爾來屢、清國の歡心を求めたること少からざりしが、遂に清國に迫りて關東州の租借、東清鐵道の敷設等重大なる諸權利を收得せり。時は皇紀二五五八年なり。

膠州灣租借

獨逸は近年國力大に充實し、餘勢を世界に排出するの必要を感じずるに至りてより、或は亞弗利加に、或は南洋に殖民地を求め來りしが、東洋問題の漸く喧しきを見るや、亦大に此の方面に注視し、貿易上及び軍事上の根據を求めんとし、學者を派して北清の探究に従事せしむる等、用意周到なるものありき。偶、山東半島に於て獨逸宣教師、暴徒の爲め殺害せらるゝや、獨逸皇帝大に怒り、直に軍艦を派して膠州灣を占領せしめ、かくて膠州灣の租借、山東鐵道の敷設、沿道の

南清に於ける佛蘭西の勢力

清國の現状

鑛山採掘等頗る獨逸に有利なる條約締結せられたり。これ露國の關東州租借條約の締結に先つこと僅に二ヶ月、此の兩條約は相俟つて進行せられたるものなりといふ。

佛蘭西は既に印度支那半島の東部を經略し、清國と境を接するに至りてより、南清の西半に勢力を扶殖せんことを圖り、好機ある毎に清國をして境上附近に於ける要市の開放、雲南鐵道敷設權の讓與、鑛山採掘には佛人技師を用ふること等を約せしめ、又佛國士官の廣州灣附近に於て殺害せらるゝや、清國に迫りて廣州灣を租借し、之をして佛領及び南清に於ける勢力の防禦上、重要な策源地たらしめたり。

かく清國の外交上の失敗は、東洋に更に大なる禍亂を見んとするに至りたり。然るに我が國は清國の保全を以て最大急務とし、之が主張に力を盡し、先づ英國と同盟を結び

たり、他の列強も亦我が主張に賛同し、獨佛露米は我と協約を結び、東洋平和に意を用ふるに至れり。清國も亦近年尊大排外の舊思想より覺醒して、官制の改革、教育の振興、兵備の擴張等に力を用ひ、以て國運の恢復發展を圖れり。されど國民に愛國尊王の念乏しく、動もすれば叛亂起りて、國運の進歩を阻害するのみならず、之が爲めに益、清廷の威信を毀損するの傾向あるは、清廷のため最も遺憾とする所なるべし。

目下動亂中に
して、一大政
變を見るに至
べし

参考

五八、清國と諸外國との主要條約

(1) 尼布楚條約(一六八九年)

清露兩國使臣、黑龍江の上流アルグン河畔の尼布楚ネフチンに會し、議定したるものにして、清國の外交上最も有利なる條約なり。主要條項は、(一)露西亞と支

尼布楚條約

那との境界は、黒龍江に入るシヨルナ河附近のケルベチ河及び此の河の水
源より遠く東海岸に綿亘する山脈を以て畫定す、此の山脈の南坂より流出
する河川及び南方一帶の地方は支那帝國に屬す、此の山脈の北方にある地
方及び河川は依然露西亞帝國の領土とす。又黒龍江の上支流なるアルグ
ン河の南方一帶の地は、支那帝國に屬し、其の北部は露西亞帝國の所屬とす
ること、(二)露國が雅克薩ヤクサ(ジャルバ)に建造せる堡砦は悉く之を毀壞し、其の所に
居住したる露國人は、財産を携へて、悉く露國政府の領土に退去すること、(三)
兩國の平和親交の本條約の結果として、兩國民は旅行免狀を所持するとき
は、何れも他の領内に交通し、及び貿易を營むことを得ること等とす。

(2) 恰克圖條約(一七二七年)

露清間の境界及び通商は前條約によりて大體確定せられたれども、爾來
兩國民の接觸交通益々繁を加へて、前條約の不備を感ずること少からざるよ
り、兩國使臣布拉河上に於て締結せしもの即ち本條約なり。主要條項は(一)
境界については恰克圖を起點とし、東西に境域を設くること、現在の境界之
なり、(二)恰克圖セレンガ、尼布楚を貿易の爲に開き、各地に必要な建物を設

恰克圖條約

け、恰克圖には特に税關倉庫を設けること、(三)北京に到る商隊の員數は三百人に増加し、滞在期間は延長して三箇年となすこと、(四)清國政府は露國人の爲め一寺院を北京に設けること等是なり。

(3) 愛琿條約(一八五八年)

尼布楚條約の後、露國は清國に長髮賊の亂あるの當時、再び民を黒龍江畔に移し、兵舎を江畔に建設する等、東方の經營を進めて黒龍江沿岸を其の管轄の下に歸せしむるに至り、是に於て露國は清國に請求して境界確定の條約を結びしもの即ち本條約にして、主要條項は(一)露國は黒龍江以北を全く掌握すること、(二)烏蘇里江より海に至る間の地を露清兩國の共有地となすこと、(三)黒龍江、松花江、烏蘇里江に於ける航通權を露國の獲得すること等是なり。

(4) 清露北京條約(一八六〇年)

一八六〇年英佛同盟軍天津を攻略し、北京を陥るゝや、清國皇帝は熱河に蒙塵し、北京は無政府の状態となりしが、北京駐劄露國公使居中調停の勞を取りしたため、和議成りて清國の社稷幸に無事なるを得て、清國朝野の露國に

清露北京條約

愛琿條約

對する感謝の情熾なるに際し、露國が清國に請求して締結せし條約は即ち本條約なり。主要條項は(一)烏蘇里江以東を全然露國の領土とすること、(二)試験の名義を以て伊犁及バタルバグタイに於けると同一基礎の上に喀什噶爾に通商を開始し、清國政府は總て必要なる建物の爲めに、十分なる土地並に墓地、牧場の爲めに土地を貸與すること等是なり。

(5) カシニ、條約(一八九六年)

日清戰役の結果、下關條約により、遼東半島我が國の所有と決定するや、露國は佛獨と力を協はせて我が國に勸告して之を清國に還附せしめ、更に清國の日本に對する償金の貸與を斡旋し、清國の露國に依頼するの狀切なるの當時、北京駐在露國公使カシニ、陰に李鴻章と約し、後モスコ、に於て互に調印したるものは即ち本條約なり。主なる條項は(一)露國は清領内の黒龍江省、吉林省に鐵道を敷設し得ること、(二)清國は山海關より盛京省の奉天に延長せんと欲する鐵道を有すること、而して爾後清國にして自ら此の鐵道を築造するを不便なりとせば、清國は露國をして資金を調達し、清國の爲めに其の鐵道を敷設し得ること、(三)清國が山海關より牛莊蓋平、金州、旅順口

カシニ、條約

*露國は其の後、關外鐵道に對する優越權を放棄せり

及び大連灣に敷設せんとする鐵道及び其の附屬物は兩帝國の通商の便宜を謀らんが爲め、露國の鐵道規則に準據すること(四)從來黑龍江吉林二省及び長白山に於ては、鑛物採掘を禁ずるの規則あり、然れども本條約批准後は露國人民及び清國臣民共に前顯何れの鑛物をも採掘し得ること、(五)東三省に於ては、泰西の方式によりて訓練せられたる大隊ありと雖も、猶ほ地方軍隊の大半は清國の舊制に由りて辨理せられたる者なるを以て、清國將來泰西の方式に従つて該省全體の軍隊組織を改革せんと欲せば、其の目的を以て露國より適當なる軍事士官を備聘すべきこと、(六)露國は未だ嘗て亞細亞に不凍港を有せず、故に此の大陸に於て俄に軍事起ることあらば、露國の東洋及び太平洋艦隊は自由任意に運動する事自ら困難となるべし、清國は之を熟知するを以て、一時山東省膠州灣を露國に貸與すること、(七)旅順口大連灣及び其の附近の地方は軍事上の要害なるを以て、清國は將來の危險を慮り、極めて速に適當なる防備を施し、其の堡壘等を修築せざるべからず、而して露國は此の二港灣を保護する爲め、凡ての必要な援助を與ふべく、且、戰時の際は露國陸海軍兵を集中するを得ること等是なり。

バプロフ條約

(6) バプロフ條約(一八九八年)

清國が露國に對し、先約ある膠州灣を獨逸に租賃するの已むを得ざるに至るや、露國は清國に向つて多年囑望せる旅順口大連の地を請求し、兩國間に締結せし條約は即ち本條約にして、主要條項は(一)露國は旅順大連二港の二十五年間の租借權と其の斷續權とを有すること、(二)露國は東清鐵道の幹線より旅順大連に接續する鐵道及び營口鴨綠江間より海濱適宜の地に至る支線鐵道を敷設するの權を有すること等是なり。

(7) 旅大租借に關する追加條約(一八九八年)

旅大租借の追加條約

主要條項は(一)露國借入地區の北界は遼東の西岸亞當灣アダムの北より起り、亞當山背を穿過して、遼東東岸なる貔子窩灣の北に至る。而して水面及び陸地周圍の各島皆借入區域の内にあること、(二)中立地の北界線は遼東西岸なる蓋州河口より起り、岫巖城の北を経て大洋河の左岸に沿ひ、同河口に至り、同河口も亦其の内にあること、(三)露國の承諾なくして、中立地及び中立地沿岸の通商權、其の他中立地帯内に於ける諸權利を他國人に讓與せざること等是なり。

清佛天津條約

(8) 清佛天津條約(一八八五年)
本條約は清佛戰爭の善後策として締結せられたるものにして、主要條項は(一)清國は安南に對し、從來の封冊的關係を放棄し、佛國の保護を認むること(二)老開諒山の二箇所を開市場とすること(三)南清に鐵道布設の時は佛人を雇入ること等是なり。

(9) 清佛境界及び通商に關する修正條約(一八九五年)

主要條項は境界に關するもの、外に(一)一八八七年に開きたる清國の貿易場は龍州蒙自蠻耗の三箇所なりしを、河口を以て蠻耗に代へ、更に思茅の一箇所を加ふること(二)雲南廣西廣東三省の鑛山開掘の場合には佛國人を雇ふること(三)安南鐵道を清國境内に延長し得ること又清國に於て雲南に鐵道を布設する場合は、右安南鐵道に聯結すべきこと等是なり。

(10) 東京邊境諸省及び海南島、不割讓、其の他に關する往復

書類(一八八八年より一八九八年に至る間)

獨逸は膠州灣の租借及び山東鐵道布設權を收め、露國は滿洲鐵道の布設及び大連旅順の移借を得、英國は威海衛の租借を得し上に、揚子江地方の不

清佛間修正條約

清佛間往復書類

割讓を約したるの時に際し、偶、海南島及び廣州灣附近に暴徒蜂起し、之が爲めに佛國士官の殺害せらるゝや、佛國は直に清國に迫り、廣州灣租借の外に、清國より左件の承諾を得たり。

(一) 清國は海南島及び廣東廣西雲南の三省を他に讓與又は租賃せざること、
(二) 清國はドンダン龍州間、龍州南寧間、龍州百色間、南寧北海間、東京境上より雲南府間の鐵道布設權を佛國に與ふること、(三) 清國は雲南の採鑛に従事するときは佛國人を雇ふること等

(11) 廣州灣租借に關する條約(一八九九年) (前項参照)

租借區域 (一) 東海全島、嶺南全島、(二) 陸地は通明港より官道に沿うて、志滿墟赤坎を經、調神島を横ぎり、兜離窩より東に走り、吳川縣の兩砲臺の後面に至るの間、(三) 水面は吳川縣の海口外三海里、即ち清國の十里の水面より岸に沿うて西に進み、南通明港より外に向ひ、三海里にして通明港に至るの間。期限一十九九年。權限一期限内全く佛國の管轄に屬し、軍事上の設備をなし、人民に對し法令を行ふことを得ること等

(12) 膠州灣租借鐵道、鑛山及び放資に關する條約(一八九九年)

廣州灣租借の條約

膠州灣租借の條約

租借區——(一)膠州灣の全水面及び灣口北方の半島、灣の西南端よりトロー島の方面に於けるチボサン島の西南に至るまでの半島、チボサン島ボテト島、トロー山島、チアリン、チウ島。(二)期限——九十九箇年、獨逸は期限前に還附するときは、清國は獨逸の費せる經營費を支辨すると共に、他に此の灣より適當なる地域を獨逸に割與すること。警備區——租借地外内地へ五十軒の地。(三)鐵道、布設權及び鑛山採掘權——膠州より博山縣を経て濟南府に至る鐵道と、膠州より沂州府萊水縣を過ぎて濟南府に至るものとの南北二鐵道線及び線路左右十里、大約支那の三十里以内にある鑛山の採掘權。

南京條約

(13) 江寧(南京)條約(一八四二年)
本條約は阿片貿易禁止に關し、清英兩國交戰の結果決定したるものにして、主要條項は(一)清國は賠償として金二千萬弗を出すこと、(二)清國は香港を英國に割與すること、(三)清國は福州、廈門、寧波、廣東、上海の五港を開放すること等是なり。

(14) 天津條約(一八五八年)
清國官吏が英船にある清人を捕獲せると、清人が佛國の宣教師數名を殺害

したるとの爲め、清國と英佛同盟軍との開戦を見るに至りし結果、締結したるものにして、主要條項は(一)清國政府は國內に基督教を許し、同教宣教師は清國官吏の保護を受くべき權利を有すること、(二)英佛國民の國內諸河に入り、又内地に旅行するを許すこと、(三)曩に開放したる五港の外に、牛莊、登州、臺、潮州(汕頭)、瓊州、海南を開放すること、(四)賠償として英佛兩國に各二百萬兩を支拂ふこと等是なり。

北京續約

(15) 北京續約(一八六〇年)

天津條約は結了の日より滿一年以内に北京にて批准の交換をなすべき約束なりしかば、兩國公使は翌年白河河口に到着したりしに、防備堅固にして、入る能はず、剩さへ堡壘より砲撃せられたれば、兩國同盟軍は再び清國と開戦するに至り、舟山島を略し、進んで白河口、天津を陥れ、遂に北京に進入したり。時に北京は無政府の状態なりしが、露國公使イクナチエフの斡旋により恭親王と英佛公使と會合し、講和の條項を議決調印せしものは即ち本條約にして、主要條項は(一)清國は廣東省內九龍の一部を英國に讓與すること、(二)清國は償金として八百萬兩を英國に支拂ふこと、(三)天津を開港すること、

芝罘條約

と是なり。

(16) 芝罘條約(一八七六年)

本條約は英國の雲南視察員殺害事件の善後策に關し、清英兩國使臣の芝罘に於て締結せしものにして、主要條項は遺族扶助料支拂の外に(一)に湖北省の宜昌、安徽省の蕪湖、四川省の重慶、浙江省の温州、廣東省の北海を開放すること、(二)西藏探檢使を保護することはなり。

(17) 威海衛租借條約(一八九八年)

露國の旅順、大連を租借するや、英國は東方の政策上、露國と均勢を保つるの必要を感ずるに至り、清國政府に迫りて締結せるもの即ち本條約にして、主要條項は(一)劉公島、威海衛の水面全部、灣内の諸島、灣岸に浴ひ内地十哩に達するの地域を租借すること、(二)期限は露國の旅順港を租借する間、租借區内は全く英國の管轄權に屬すと雖も、威海衛城は英國の兵備を妨げざる範圍に於て、清國は引續き管轄權を有すること、及び灣の水面は清國海軍之を使用するを得ること等是なり。

(18) 九龍地方租借に關する條約(一八九八年)

*西藏探檢に關する英國の權利は其の後放棄せられたり

威海衛租借條約

九龍地方租借の條約

佛國が廣州灣を租借して軍事的施設をなさんとするや、英國は香港の防禦上、地域擴張の必要を感ずるに至り、清國に迫り締結せしは即ち本條約にして、之が爲め英國は九龍半島の南部、香港附近大小四十餘島及び大鵬、深州の二灣、香港四近の水面は悉く其の租借する所となり、殊に大鵬、深州の二灣は大軍艦を操縱碇泊せしむるに足るを以て、益々香港の價値を發揮せしむるに至れり。

第二 亞細亞露西亞

一、境域・區分・人口、各部の比較

要旨

亞細亞露西亞の位置・面積・人口・區分并に亞細亞露西亞と歐羅巴露西亞との關係を知らしめ、次に各部の位置・面積・人口について比較研究をなさしむると同時に、其の人口密度

境域

の小なる所以を推考せしむるを要す。

本文解説

亞細亞露西亞は主としてバミル高原を中心とする本洲
大山派の東北派及び西南派以北の地を占め、西はウラル山
脈及び黒海に至り、北は北氷洋に、東は太平洋に達して、我が
國・清國・英領印度・波斯・亞細亞土耳其古と境を交ふ。面積は亞
細亞洲の約四割に及び、我が國の凡そ二十五倍に當れども、
凍原・沙漠をなせる地廣く、開發亦不十分に於て、人口は亞細
亞の三十分の一、即ち我が國の半ばにも達せず、一般に人煙
稀疎にして、無人の境少からず。此の地方は地勢上亞細亞
の北部に當れる西比利亞、其の西南なる中亞細亞、裏海と黒
海との間なるコーカシヤの三部に分たるれども、行政上に
於ては、各部の中央政府に對する關係殆ど同等なるのみな

區分

らず、歐羅巴露西亞部とも所屬の大洲を異にこそすれ、政治
上に於ては各等しく露西亞帝國の一部をなせるなり。即
ち露西亞は、其の始め、歐羅巴の東部に國を建て、漸次膨脹し
て、地續の版圖としては、古今無比の廣大なる帝國を形成せ
しものなり。

人口

西比利亞は、亞細亞露西亞の三部中、最も廣くして、全部の
約八割を占むれども、人口は、全部の四分の一に達せず、即ち
平均一方里の人口十萬人に足らずして、我が樺太にも及ば
ざるなり。中亞細亞は、西比利亞の四分の一強、コーカシヤ
は、更に狭小にして、中亞細亞の七分の一に當るに過ぎざれ
ども、人口の上には、正反對にして、コーカシヤ最も多く
して、全人口の三分の一強を占め、中亞細亞之に次ぎ、西比利
亞最も少し。要するに、以上の各部中、我が國と關係あるも

のは、唯西比利亞のみなれども、經濟上に於ける國土の價値に至つては、コーカシヤを第一に推さざるを得ず。又西比利亞には、人口九萬餘の浦潮斯德を以て最大都會とするに過ぎざれども、中亞細亞及びコーカシヤには、各人口十萬以上の都會二つを有せり。

参考

五九、亞細亞露西亞各部の面積人口及び密度(人口は一九〇九年現在)

各部	面積	人口	人口密度
西比利亞	四、七八六、七三〇	七、八七八、五〇〇	一・七
中亞細亞	ステップ地方 トルキスタン地方	三、一五〇、九〇〇	四・四
外カスピ地方	四〇〇、七七〇	六、〇五一、一〇〇	一五・一
(計)	二一三、八五五	四二九、三〇〇	二・〇
	一、三二五、五三〇	九、六三一、三〇〇	七・二

コーカシヤ	内コーカシヤ	外コーカシヤ	(計)
	八五、二〇一	九五、四〇二	一八〇、六〇三
	四、八二〇、〇〇〇	六、五七二、四〇〇	一、三九二、四〇〇
	五六・六	六八・八	六三・一

六〇、亞細亞露西亞の行政區分

域内は行政上、歐羅巴露西亞と同じく、省又は州に分たる。省には概ね文官知事、州には概ね軍務知事、省州若干の上には總督あるを常とす。以上のほか、中亞細亞にはヒバ、ボハラの二朝貢國あり。行政區分は大要左の如し。

各部	地方	省	州	總督駐在地	州縣廳所在地
西	西部西比利亞 (内務省直轄)	トボルスク省		—	トドルスク
	東部西比利亞 (イルクツク 總督管區)	エニセイ省 イルクツク省 ヤクーツク州	イルクツク	—	クラスノヤルスク イルクツク ヤクーツク
比		外バイカル州			チタ

利 亞		中 亞 細 亞		
黑龍江沿海地方 (黑龍江總督管區)		ステップ地方 (ステップ總督管區)		
黑龍江州	沿海州	トルキスタン地方	トルキスタン地方	トルキスタン地方
サハリン州	カムチャツカ州	フエルガナ州	サマルカンド州	サマルカンド州
アカモリンスク州	セミバラチンスク州	ウラルスク	シルダリヤ州	シルダリヤ州
ツルガイ	オムスク	タシケント	セミレチェンスク州	セミレチェンスク州
オムスク	オムスク	タシケント	外カスビ地方	外カスビ地方
セミバラチンスク	オムスク	オムスク	ヒバ	ヒバ
オレンブルグ	オムスク	オムスク	ボハラ	ボハラ
ウラルスク	オムスク	ウラルスク		
コカンド	オムスク	コカンド		
サマルカンド	オムスク	サマルカンド		
タシケント	オムスク	タシケント		
ビールニ	オムスク	ビールニ		
アスハバード	オムスク	アスハバード		
ヒバ	オムスク	ヒバ		
ボハラ	オムスク	ボハラ		

外コーカシヤ	内コーカシヤ	チフリ	(省略)
シヤ	シヤ	フリ	

六一、亞細亞露西亞の住民

西比利亞は、古代に於ては、現今極東の半島部に住するチュクチ、カムチャツカ半島のカムチャツダ、東部のギリヤーク等の主要住地たりしなるべしと雖も、其の後相踵いて來りし幾多の異種族の爲め、或は追はれ、或は混化され、遂に複雑なる種族の分布を見るに至りしものなり。而も近世までは、蒙古族及び土耳其族を卓越住民とせしが、露西亞の東方經路に着手してより、露西亞人の移住するもの、漸く多きを致したりと雖も、而も其の初めはコサツク兵の屯田を主とし、之に次いで、犯罪者の追放を以てし、多きは一箇年二萬人に及びたりしことあれども、徒に無賴流浪の惡漢を多くするのみにして、政府の目的たる富源開發に適はざりき。其の後、政府は罪人の追放を廢止し、之に代ふるに普通移民を以てしたれど、なほ政府は移民政策を確立し能はざりしが、一八九二年の頃、西比利亞鐵道敷設の議決定せらるゝと共に、大に移民の必要を覺知し、爾來種々の獎勵保護の方法を講じて、移民を招致したれ

* 最初は歐露に於ける労働者の不足を生ぜんことを憂慮

したり

ば、移住民年を逐うて増加し、年々平均約二十萬人の多きを數ふるに至り、今や露西亞人は、西比利亞の卓越住民となり、全人口の八割以上を占むるに至れり。而して總人口の面積に對する割合は、なほ甚だ小なりと雖も、増加率より言へば、決して小ならざるを見るなり。

住民の種族は、之を大別すれば、アフリヤ・ユダヤ・ウラル・アルタイ・東亞・極地の各人民となるべく、更に小別すれば、ウラル・アルタイ人民に(1)トルコタタ(約四十萬)、(2)モンゴル(約二十萬)、(3)ツングース(約七萬)、(4)フィン(約六萬)、(5)サモイェード(約八萬)、(6)チュクチ(約一萬)、(7)ギリヤク(約六千)、(8)コリアク(約六千)、カムチャツダル(約四萬)等あり。

又外務省調査の「西伯利及滿洲(明治三十一年刊)」には、アフリヤ・ユダヤ人種のほかを

- (一) 土耳古族、(二) フィン族、(三) 蒙古族の三種に分つこと大要左の如し。
- (一) 土耳古族

(イ) キルギス人は、重に牧畜を業とし、傍ら農業に従ひ、概ねステップ地方に住す。其の數約百萬人。

(附言) ステップ地方のアクモリンス・セミパラチンスクの二州はもと西比利亞の一部として

て取扱はれたることあり。前記キルギス人を百萬とせるは、之を包含するによろこと與つて力あるなり。

(ロ) 韃靼人は、主にトボルスク・トムスクの兩縣地方に住し、又他の異民族と混交し、アルタイ地方にも住す。其の數約四萬人。

(ハ) プハル人は、主にトボルスクに住し、商業に従事す。其の數二十五萬人。

(ニ) ヤクトイト人は、概ねヤクトイツタ州に住し、獸獵及び牧畜を業とす。其の數二十三萬人。

(二) フィン族

(イ) ウォグール人は、概ねトボルスク縣の北部に於ける森林及び沼澤に住し、牧畜漁業に従ふ。其の數三千人。

(ロ) オスチャーク人は、北氷洋一帯の沿岸、並にオビ・イルチッシュ兩河の間に於ける沼澤に住し、獸獵漁業を専らとし、兼ねて、松實の採集を事とす。其の數約三萬人。

(三) 蒙古族

(イ) テレウイト人は、アルタイ山北の地に住し、牧畜及び獵業に従ひ、遊牧の

生活をなす。其の數約二萬人。

(ロ)ブリヤート人は外バイカル州及びイルクーツク縣の一部に住し、専ら牧畜を業とし、兼ねて農業に従ふ。其の數約二十七萬人。

(ハ)サモイェード人は北氷洋沿岸のトボルスク・エニセイ兩縣内に住するもの多く、概ね、獸獵漁業を専らとし、兼ねて舊象の遺骨を採掘し、又馴鹿を飼ふ。往々一戸に數千頭の馴鹿を有するものあり。其の數約一萬二千人。

(ニ)滿洲人は黒龍江州に住し、農業を事とす。其の數三萬人。

(ホ)ツングース人はエニセイ縣より東は太平洋南は清國境に至る間散に在し、馴鹿飼養、獸獵及び漁業に従事す。其の數約五萬人。

(ヘ)ギリヤーク人は黒龍江の下流、オホーツク海の沿岸に住し、漁業を専らとし、兼ねて獸獵を事とし、犬を養うて櫓を曳かしむ。其の數約六千人。

二、西比利亞の地勢・産業

要旨

西比利亞は東南に亞細亞大山脈の東北派を負ひて、太平

地勢

洋方面に急斜し、北氷洋方面に緩斜し、随つて北氷洋斜面に大河及び西比利亞大平原を有すること、并に西比利亞平原と露西亞平原との間には、ウラル山脈の南北に横はれるあれども、東南の山脈の如く高峻ならずして、交通上の大隔墻たらざること、明にし、次には西比利亞平原は亞細亞最大の平原なれども、氣候及び人口分布の關係上、主要の農業地は西南の一部に限られ、中部地方に於ては僅に毛皮類の産を見るに過ぎざること、并に太平洋方面は急傾斜の處多きが故に、農業上の價值少けれども、水産の利は頗る豊富なることを知らしむるを要す。

本文解説

西比利亞の南境には、バミル高原を中心とせる諸大山脈の一なる東北派の連亘する所にして、アルタイ山脈を始め

とし、數多の山脈あり、其の脈更に、太平洋岸に偏して、東北に進み、本洲の極東部に達するを以て、南境及び東南部は、山岳地方をなせども、是より西北は地勢緩斜して、北氷洋沿岸に達し、山岳地方に發するオビ・エニセイ等の諸大河其の間を流れて、本洲最大の平野たる西比利亞を開く。平原の西には、ウラル山脈の、南北に横はれるあり、地勢上歐亞の境界線たるものなれども、其の最も高峻なる北部の最高點僅に五千數百尺に達せず、南部に在つては一層低凡にして、兩側に恰も火山裾野の如き緩傾斜をなすを以て、實際に於ては歐亞兩大洲の境界物とするに足らざるのみならず、地方行政上の境界物とするにも足らずして、本山脈の南部は行政上全く歐羅巴露西亞に屬するなり。随つて、交通を妨ぐること大ならずして、最初歐羅巴に興りし露西亞の東方進略上

凍原地方と
産業

に不便を感ぜしむるが如きことはなかりしなり。太平洋斜面は本洲東北派の山脈急斜せるが上に、カムチャッカ半島には、數多の火山聳立し、日本海の沿岸にも著しき山脈ありて、往々海岸に帶狀の平野をも留めざる所さへあり。唯、其の間に亞細亞諸大河の一なる黒龍江の流るゝありて、其の沿岸に稍著しき生産地を開くを見るのみ。

西比利亞平原は面積頗る廣大なりと雖も、北部地方は寒氣の強きこと、我が樺太などの比にあらず、甚しきは一月の平均溫度華氏氷點下九〇度を示し、寒極は一二〇度に達するあり。随つて此の地方は冬季地下數百尺までも凍結するに至る。而して夏季は冬季に反し、日射の時間甚だ永くして、九十度内外の高温を示すを以て、地面の凍氷溶解すれども、而も僅に表面に止り、植物は蘇苔の類又は矮小なる灌

土人と馴鹿

木類の馴鹿に好餌を與ふるものあるに過ぎず。挿畫教科書十頁七は此の地方に於ける土人の生活状態と、山野の荒涼とを示せるものにして。前面にあるは橇と犬、土人の周圍にあるは馴鹿。又小山を越えて先きには蒙古地方の天幕と趣を異にせる天幕見え、遙か右方には二群の馴鹿の橇を曳けるあり。橇は主に馴鹿に曳かしむるを常とすれども、又往々犬と混用し或は單に犬のみに曳かしむることあり。馴鹿は實に此の地方に於ける住民の富源、生命たるものにして、單に交通運搬の要具たるのみならず、其の肉・血等は食料となり、皮は衣服・天幕の材料となり、重要な輸出品たる等、其の利用頗る多し。随つて馴鹿は土人財産の標準となり、富豪のものは數千頭の多きを有すといふ。かゝる寒地にも、かゝる重寶の動物あるがため、住民の生活するものあるは、

森林帯の産物

南部の氣候と産業

造化配劑の妙を得たるものといふべし。

凍原地方の南には、東西に亘れる森林帯あり。往々野火の災に遭ひて、荒涼に歸せる所なきにあらずと雖も、概して我が樺太に於て見たるが如き、樺・樅・落葉松等の美なる林相をなすが故に、將來運搬機關の整備に伴うて、至大の財源たるべし。又其の森林中には、狐・黃貂・栗鼠等の野獸、鷹・鷲等の野禽多く、近年濫獲のため、稍減退を來したれども、而もなほ其等の細毛皮類・羽毛等は、重要な産物たるものなり。

森林地方の南即ち西比利亞鐵道の通ずる地方は、西比利亞の最も良氣候の所たるが上に、地味肥沃なれば、鐵道の開通以來、農業及び牧畜業は固より、商工業も大に活氣を呈するに至り、殊にオビ河上流の流域は、西比利亞の穀倉と稱せられ、小麥を始めとし、燕麥・裸麥等の麥類、牛馬等の家畜を産

太平洋沿岸の産業

すること多く、小麥粉及び牛酪^{ブタ}の輸出多量なり。

太平洋沿岸に於ては、黒龍江の沿岸を除くのほか、未だ農業は殆ど全く行はれざれども、遊牧・獸獵及び漁業はよく行はれ、殊に漁業は近海に世界屈指の豊魚帯を控ふるが故に、夏季に至れば其の業最も盛にして、土人及び露西亞人の斯業に従事するもの多く、又日露戦役の結果、其の漁業權の我が國に分讓せられてより、我が國人の出漁するもの亦少からずして、冬季の荒涼に反し、頗る殷賑・活躍の狀を呈せり。

西比利亞は以上述ぶるが如き状態なるを以て、其の面積頗る廣大なれども、經濟上の價值より論ずれば、最南部の一帯と、太平洋沿岸とを主要地とするに過ぎず。

参考

六二、西比利亞の地勢

西比利亞の
主部

山系と
水系

西比利亞の西北斜面には、全幅に亘りて西比利亞平原の展開するあれども、此の平原は、エニセイ河を界とし、是より以西の西部と以東の東部とにより、其の地勢大に趣を異にす。西部は東南にアルタイ山脈の山地、西にウラル山脈の山地を控ふるのほか、殆ど全部低平の平原をなし、主としてオブ河及び普通に其の支流とせらる、イルチシ^シ河の流域に屬し、北部は凍原帯をなせども、南部は肥沃の黒土層をなす。東部は東南にサヤン山脈・ヤブロン^イ高臺外興安嶺・スタノボイ山脈等の連亘せるを負ひ、此等の山脈・高臺は其の大勢、西南・東北の走向を取りて、東部西比利亞の主要分水嶺たれども、是等に關聯して西北に走れる山脈・高原亦少からずして、幾多の小分水嶺をなせるあり。随つて東部の平原は等しく平原と稱せらるれども、實際に於ては地高三千尺以上の處多くして、西比利亞三大河の一なるレナ河を始めとし、ヤナ等の河流を並流せしめ、主に北氷洋沿岸に沿うて帶狀の低原を展開するに過ぎず。されど此の低原及び附近の高原の凍原帯をなせることは東西に於て異なるなし。

西比利亞の
四帯

西比利亞は又地形氣候等の關係上、高地帯・沃土帯・森林帯・凍原帯の四帯に

分たる。高地帯は最南部を占め、沃土帯は略、北緯六十度以南の低野地方にして、比較的寒暑の差小に、現今農牧の業は主に其の西半に行はるゝのみなれども、漸次東方に向つて其の範圍を進め、山岳帯以東の黒龍江沿岸に於ても、馬鈴薯蔬菜等の栽培稍、行はるゝを見る。森林帯は略、沃土帯以北極圏附近に至る間にして、平地と山地との別なく、針葉樹の密林に富み、本洲森林の北限をなす。以北は即ち凍原帯なり。

六三、河流の水運

河流と水運

オブニセイ、レナ及び黒龍江の四大河は何れも水量に富み、航運に適すれども、黒龍江のほかは北氷洋に注入するが故に、最も水深き下流の寒氣酷烈、人煙稀疎の地方に屬し、上流と雖も年内の過半は氷結するが故に、水運の便を助くること比較的大ならず。近年北氷洋の航路開けて、夏季は歐羅巴露西亞英吉利方面とオビ及びニセイとの間に汽船の往來するありて、此等諸河の下流稍、利用せらるゝに至りたりと雖も、未だ上流の利用と同一に論ずべからずして、水運上より觀察すれば、下流は上流の支流たる觀あり。而して此等諸河の上流は、鐵道開通以前に於ては、西比利亞に於てのみなら

オビ河系

ず、西比利亞歐羅巴露西亞間の大交通路たりしものにして、鐵道開通後に於ては、主に地方的交通路に利用せらる。

オビ河系—オビ河は、アルタイ山脈の北麓なるピースク市より下流に舟を通じ、是よりバルナウル市に至る間には急灘少からざれども、バルナウルより下流は吃水三尺餘の船舶を通ずるに足り、イルチ、シ、河會流附近より下流は八呎乃至十呎の吃水を有する船舶を通航せしむるを得べく、バルナウル市附近に於ける開航期間は四月中旬より十月下旬に至る間とす。イルチ、シ、河の水運は、主にオビ河の會流點なるサマロフスクより、中亞細亞の極東部なるセミパラチンスク市に至る、約二千六百露里の間に行はれ、是より上流と雖も少しく河道を修むれば、ザイサン湖を経て清國境に至るまで、舟楫を通じ得べしといふ。殊にオムスクよりトボルスクに至る間は吃水四呎乃至七呎の船舶を通ず。開航期間は、四月初旬より十一月初旬。イルチ、シ、河の支流トボル河及び同河支流のツィラ河は從來歐亞の交通上、最も樞要なるものにして、ツィラ河畔のチューメン市は、歐羅巴露西亞のボルカ河系のカマ河とオビ河系との連絡點にあたり、此の地とトムスク・オムスク

等との間には、汽船の往來殊に頻繁なりしが、近年、森林濫伐の結果ツォラ河の稍減水せると鐵道開通の影響とは、チーメン市の商況に著しき打撃を加へたり。

エニセイ河系
但し迂回線
復し工事中
再線工事
路及び鐵道
せらるべし
利用格はの

エニセイ河系—エニセイ河本流の水運は源流の一部を主とす、即ちクラスノヤルスク市を中心として、南はミヌシンスクの農業市場に、北はエニセイスクとの間に定期航運の便あり。下流は嘗て航洋汽船の通航する所となりしが、沿岸の開発未だ進まざるため、今は殆ど航運杜絶せり。バイカル湖より出づるアンガン河は上流百数十里間航運に適し、下流には急流部あれど、近年河道修濬の計畫あれば、早晚航運を通ずるに至るべし。バイカル湖は沿岸多くは重嶺の絶壁又は空漠たる原野に圍まるゝを以て、水運盛ならず。曾て湖西湖東に於ける西比利亞鐵道の連絡路にあたり、汽船及び碎氷船設備せられて、東西兩岸に於ける停車場間を往復したりしが、碎氷船の構造同湖の堅氷を截開するの力に乏しく、其の他暴風の爲めに汽船埠頭に近接する能はざる等の不便少からざりき。其の後、同湖迂回鐵道の開通してよりは、其の水運の見るに足るものなし。同湖に注入するセレンガ河は

レナ河系

黒龍江河系

國境なるキクタ附近まで汽船を通じ、從來バイガル湖を経て、アンガラ河畔なるイルクツクに至る間には、支那茶の輸送盛なりしが、近年は大に衰退を來せり。

レナ河系—レナ河は北氷洋に注入する河流中、最も水運に適する大河なれども、其の下流は、世界の最寒地方を流過するが故に、殊に利用の途少く、されど上流地方に於ける本支幾多の水路は、船舶の往來繁く、中にもピチム・オレクマの兩河は、西比利亞中最も採金業の盛なる地方の要路に利用せられ、又本流のヤクーツクよりイルクーツク地方間の交通は、主として兩河の水運を利用す。

黒龍江河系—黒龍江は、滿洲の極北なるアルゲン河とシルカ河との會合點より河口に至る約三千露里の間、船舶の航行に適し、同會合點よりブラゴベシ、チエンスク市に至る間は急流部少からざれども、而も最淺所と雖も、二呎餘を下らず、是よりハバロフスク市に至る間は、水深五呎以上を保ち、更に下流は水深七呎以上を保ち、河口附近に至つては十三呎を下らず。尤も七八月の増水期に於ては、平水面より約五丈の高さに達し、河水氾濫して、沿岸の

村落を没するに至ること珍しからず。されば五月上旬より十月上旬に至る約六個月を開航期間とすれども、之が爲めに水運を妨げらるゝこと少からず。黒龍江の上流なるアルゲン河及びシルカ河は利用未だ盛ならざれども、舟楫を用ふるに足り、ゼーヤ河及びブレイヤ河は、其の流域に有名の採金地あるが故に、採金會社用の淺吃水船上下し、沿岸に有望の農業地を控ふ。烏蘇里河は興凱湖附近まで舟運の便を有し、烏蘇里鐵道開通前は、黒龍江と浦潮斯德とを連絡する重要な交通路なりき。松花江に至つては水運の便黒龍江諸支流中第一に居り、中流及び下流は、吃水四呎以内の汽船を通じ、河口より哈爾濱に至る間には汽船の往來甚だ繁く、更に上流の吉林まで輕舟を通ずるのみならず、支流の牡丹江に入りて寧古塔に至るまで舟楫の便を有し、嫩江にありて河口より齊々哈爾濱を経て、墨爾根の上流まで舟楫を通ず。而して松花江は、全部滿洲に屬すれども、其の航通權は愛琿條約により露西亞の獲得する所となりしを以て、黒龍江の他の水路と同じく、露國船の往來頻繁なり。

西比利亞の

以上述ぶるが如く西比利亞の河流は、黒龍江のほか、主として上流の利用

河流の特色

せらるゝに過ぎざれども、而も其の水運の便を助くること著しく、殊にオビ・エニセイの兩河系は分水嶺甚だ低くして、各河系の水路連絡上の便宜多く、目下經營中のオビ河の一支ケト河より、エニセイ河畔のエニセイスクに至るケト運河、及びアンガラ河下流に於ける急流の緩弛工事成功せば、西はウラル山脈附近のチーメンより、東は清國境のキヤフタ附近まで、一貫の水路を通ずるに至るべし。現今諸河の水運に従事する船舶は、汽船のみを數ふるも數百隻に達し、西比利亞内地の發達に伴うて、益々盛況を呈すべし。

六四、沿海及びカムチャツカ州近海の海獸

カムチャツカ半島の東海上に、コマンドル諸島あり、我が樺太の海豹島と共に海獸の保護地として知らる。是より東の亞米利加合衆國領アレウト列島にも、海獸の保護地あり、其の近海は臘虎、臘肭獸、海豹等の海獸に富むこと、世界無二にして、從來英米露三國船の出漁するもの多く、近年は、我が國の遠洋漁業も稍、活氣を呈し、勇敢なる漁夫の此の方面に出獵するもの少からざりしが、近年關係諸國會議の結果、亞米利加合衆國人の陸上に於ける獵獲のほか、海上獵獲を中止するに至れり。

六五、西比利亞の鑛業

西比利亞は、金、銀、銅、鐵、鉛、石墨、石炭、食鹽等各種の鑛物を産し、鑛業は農牧に次げる主なる生業なれども、未だ交通不便、採鑛機關の不備等の爲め、著しく頭角を現はすに至らず。中にも産額の最も多量なるは金にして、古くより世に聞えたるアルタイ山地の鑛金の如きは殆ど見るに足らざれども、砂金之に代りて採取せらるゝに至り、砂金は黒龍江支派のゼーヤ河流域地方、レナ河の上流地方等、アルタイ地方よりも一層多量に産する所ありて、露西亞産金の大部は、西比利亞の産に係れり。其の他鐵の産額稍著しく、アルタイ及びアルゲン河畔のネルチンスク兩鑛區を主とし、共に製鐵所の設あり。ウラル山地の鑛業に至つては、頗る盛況を呈すれども、其の地域の殆ど全部は、行政上歐羅巴露西亞に屬す。

三、都邑

要旨

西比利亞の南部及び太平洋沿岸は、西比利亞の主要部な

れば、都會の主に此處に發達せること、並に主なる都市について説明し、兼ねて西比利亞鐵道の世界交通上に於ける價值について知らしむるを要す。

本文解説

西比利亞は、既に述べたるが如く、地域廣大なれども、其の大部の地は、蒙昧なる土人の漁獲場たるの狀態にして、利源の開發せられたるは南部の沃土帶地方及び太平洋沿岸の一部にして、主なる都邑亦此の處にあり。

浦潮斯德

浦潮斯德は一に浦港又は浦潮ともいふ。日本海の北岸にありて、朝鮮の東北境に近く、敦賀境などの彼岸にあたり。露西亞の東方進略上、主要の目的地點たりし所にして、今より約五十年前、露西亞の所領となりてより、商港及び軍港たるの施設着々竣工せられ、忽ちにして、東洋屈指の要津、

堅固の軍港を以て目せらるゝに至れり。而して最初は僅に日本海岸の中心港たるに止り、且歐露との連絡は海路の迂回に依り、發達上の不便少からざりしが、近年西比利亞鐵道全通してよりは西比利亞の咽喉、北滿洲の東門となり、歐羅巴露西亞との交通も敏滑に行はるゝに至りたるのみならず、世界交通の要地として、我が大連及び釜山と競争の地位に立ち、益繁榮を加ふ。將來西比利亞の開發進むに隨つて、更に一段の發展を見るべし。我が敦賀・長崎・小樽との間に定期汽船を通じ、中にも敦賀との交通は殊に頻繁にして、其の間約四十時間を要するに過ぎず。而して冬季は港内凍結すれども、碎氷船を設けて船舶の出入を便にす。西比利亞鐵道は、其の始め、東西の兩端より起工せられ、東線は浦潮斯德に起りて北向し、黑龍江に沿うて敷設せらるゝ計畫

西比利亞鐵道

なりしが、かくては著しく迂回せるが上に、黑龍江畔の工事頗る困難なる爲め、一部の開通に止められ、西線は全力を用ひて延長せられたり。而して後、露國は清國の承諾を得て、東清鐵道を敷設し、以て東西線の連絡を取ることに變更し、着々工事を進めたれば、全線遂に開通し、爾來歐亞の距離は、著しく短縮せられ、僅々十二、三日を以て、浦港より歐羅巴の中央に達するを得るに至れり。

イルクツク

イルクツクはバイカル湖の排水河に臨み、水路交通の便に富み、西比利亞の行政及び兵備上の一要地にして、西比利亞鐵道の中央大停車場たり。往時は巨商多くして、北清と東歐との通商權を握り、蒙古を経て來れる支那茶、東歐より北清に向ふ貨物の倉庫地たりき。鐵道開通以來、此の形勢は大に變動を來したれども、なほ東部に於ける商品の集散

トムスク

地として、健全の發達をなしつゝあり。トムスクはオビ河の上流にあり、直接に西比利亞鐵道に沿はずと雖も、支線を以て之に連り、且、オビ河系水運の要衝にあたり、最も農牧の盛なるアルタイ地方の穀物・畜産等の集積少からずして、商況、鐵道開通以前に於けるが如く活潑ならずと雖も、而も衰頹の傾向なし。これ本市には、大學校・博物館等ありて、西比利亞文化の淵源地たるに因るなるべし。

参考

六六、西比利亞の主要都市

浦潮斯德

浦潮斯德は沿海州の極南部、ベテロ大帝灣内のムラビエフ・アムールスキ半島の南端に於ける灣入の前面を一小島に擁せられたる所に臨み、港内の水深五尋乃至十三尋を保てる良錨地なり。港内凍結を免れざれども、其の期間二三箇月に過ぎず。もと海參崴と呼ばれ、露國の手に歸してより現

ニコラエフ
スク

名に改稱せらる。蓋し現名は東方の鎮守の義なり。開港以來久しく自由貿易港たりしが、近年露國政府は、本地方の工業を發達せしめ、且、露國物産の販路を擴張せんとし、自由港制度を廢止せり。主要輸出品は細毛皮類・牛皮・牛骨・昆布・大豆・豆粕等にして、主要輸入品は、穀類・石炭・茶・鹽・織物・機械類・果實等とし、我より彼に輸出するものは、林檎・蜜柑等の果實最も多く、石炭・玉葱等の菜蔬・食鹽等之に次ぎ、彼より我に輸入するものは、鑛物材料を主とす。我が敦賀・七尾・小樽・長崎等より交通の便を有し、我が國の總領事館あり。

ニコラエフスクは黒龍江口を溯ること約十里の左岸にあり、浦港と共に西比利亞東方の二大良津にして、一八五六年軍港となりしより發達の氣運に向ひ、一八七二年軍港の地位を浦港に譲りたれども、紅魚・鮭等の豊富なる黒龍江下流及び附近に於ける漁業の中心地、黒龍江水運の起點たるのみならず、オホーツク海沿岸に對しても商品の集散を掌り、市況益、良好なり。我が國人の此の地を根據として漁業に従事するもの多く、又我が領事館の所在地たり。

アレキサン
ドロフスク

アレキサンドロフスクは北樺太の西岸にあり、サハリ州廳を始め、官邸

ルイコフ

監獄等の宏壯なる建物あり。是より南方海濱傳ひの一里半にドウエ港あり、もとサハリン行政の中心地たりし所とす。有名の石炭産地にして、數百の囚徒常に採掘に従事し、港内には石炭船の出入頻繁なり。ルイコフはアレキサンドロフスクの東南凡そ二十里、ツイミ川の盆地に位し、四面山嶽を以て圍繞せられ、ツイミ川の水を利用せる水車製粉工場あり、日露戰爭の際、西岸の諸市より難を此の地に避くるもの多くして、一時頗る殷賑を呈したることありき。樺太島は由來露西亞の罪人殖民地として、開發せられたるところにして、其の進歩頗る遅々たるものありしが、近年は普通の移民をも獎勵するに至れり。ペトロパウロフスクはカムチャツカ半島南部の東岸にあり、四方高山にて圍繞せられたる灣内に臨み、安全に大船巨舶を碇泊せしむるに足り、天然の良港として、東亞稀に見る所とす。行政上同半島の中心たるのみならず、半島近海に於ける漁獲の根據地にして、夏季は内外の軍艦、商船の出入繁く、毛皮類魚類の輸出多し。

ニコリスク。
ハバロフスク

ニコリスクは東清鐵道と烏蘇里鐵道との會合點に當り、穀類、麥粉、家畜との集散行はる。ハバロフスクは烏蘇里河の河口に瀕し、黒龍江に面し、水陸

ペトロパウ
ロフスク

ブラゴベシ
チエンスク

交通の便に富むこと、東部西比利亞第一に位し、黒龍江本支流の各地と浦港との間に立ち、百般の貨物を集散すること盛に、又黒龍江地方總督の駐在地たり。ブラゴベシチエンスクはゼーヤ河の口に位し、ゼーヤ河及びブレイヤ河上流の採金地方に要する商品の分配を掌るのみならず、近年農業發達して、黒龍江州の穀倉と稱せらるゝ、兩河間地方の吞吐口となり、市況良好に、又附近なる滿洲の愛琿及び墨爾根を経て、齊々哈爾方面との通商行はる。もとは外バイカル沿海兩洲の中繼港たるの實權をも有したりしが、鐵道開通以來、商圏の範圍著しく縮小せられたり。

カイダロボ
キヤフタ

ストレテンスクは外バイカル鐵道の終點にして、是よりハバロフスクに至る鐵道黒龍江線は、目下工事中に屬す。チタはシルカ河の上流チタ河に臨み、ヤプロノイ山脈の東麓にあたり、外バイカル州の行政及び地方的商業の中心地なり。附近のカイダロボは東清鐵道の分岐點たり。西南境のキヤフタは蒙古の北門買賣城と相接せり、一六八九年のネルチンスク條約に基き、開市せられてより、露清國際貿易の要區となり、一八九〇年頃より一九〇〇年頃に至る間は、其の全盛時代にして、年貿易額二千萬圓以上に達し、其の

イルクツク

大部分は、支那産の紅茶、磚茶に係り、木綿織物、砂糖等露國産の工藝品を輸出品の主なるものとすと雖も、輸入茶に比すれば頗る微々たるものなりき。而して支那茶は漢口より海路天津に至り、通州を経て張家口に集り、蒙古人取扱の駱駝商隊によりて庫倫に駄送せられ、是よりは主に牛車によりてキャフタに至りしものなり。然るに西比利亞鐵道西線の延長して、バイカル湖東のストレンスクに達するや、之と同時に黒龍江の航路改修せられ、支那茶の上海より水路黒龍江口のニコラエフスクに送られ、黒龍江を溯り、シルカ河に入り、ストレンスクより鐵道にてイルクツク市に集中し、東清鐵道の全通してよりは、支那茶の通路更に一轉して、浦港を経由するに至りてより、キャフタ貿易は猛火の消却したるが如き状態に陥り、キャフタ税關は、一時イルクツクに移轉されしが、其の後キャフタは再び税關の所在地となりたれども、製茶貿易については殆ど注目の價なく、現今に於ては主として露西亞の工藝品と蒙古産牧畜品との互市場たるに過ぎず。イルクツクはバイカル湖を西に距る約十六里、アングラ河の左岸、イルクツク河の河口にあり。東部西比利亞總督駐在す。此の地往時は西比利亞大部の地に對する貨物の

クラスノヤ
ルスクとミ
ヌシンスク

トムスク

大集散地として、名聲噴々たりし所なり。鐵道開通のため陸上河上の通商に大變動を來し、市場の各地方に割據してより、他の諸市と同様に、本市の經濟界も亦攪亂せられたること少からざれども、而もなほ水陸交通の要衝にあたりて、内地第一の市場たるの面目を保ち、殊に西比利亞鐵道の中央大停車場設置せられてより、堅實の發達をなすに至れり。クラスノヤルスクはエニセイ河の左岸カチャ河の口にあり、エニセイ河水運の中心地たるが上に、鐵道の便をも有し、上流のミヌシンスク地方の農牧業の發達に伴ひ、穀類、牛酪、羊毛皮等の水運によりて此の地に集中するもの多く、エニセイ省第一の市場たり。ミヌシンスクよりは蒙古の烏里雅蘇臺に至る街路開かれ、陸路貿易稍盛なり。トムスクはオビ河の一支トミ河右岸の丘陵上にありて、西比利亞鐵道のタイガ驛に約五十四哩の鐵道支線を通ず。オブ河系水運の極東要津たる所にして、もとは東はイルクツク、西は歐露のベルム市及びニジニノブゴロト市との中央市場となり、南は有名の沃土バルナウルとも水運を通じて河船幅濶し、駄馬の出入一日に數萬頭に達するの盛況を見しことありしが、今は著しく商勢を失墜したれども、なほトムスク省の中心市

バルナウル

トボルスク
トボルスク

場、西比利亞文化の源泉地として繁榮を保てり。バルナウルは、オビ川の上流、アルタイ山脈の北陰にあり。此の地方は地味最も膏腴にして、農業牧畜共に盛に行はれ、西比利亞の穀倉と稱せらる。西比利亞第一の輸出品たる牛酪製造についても、西比利亞第一に位す。當市は實に此等産物の中心市場として、商業甚だ活潑に、又アルタイ山地鑛業の中心地たり。バルナウルの東南トボルスクは、西蒙古の科布多との貿易に知らる。トボルスクは、オビ河系イルチシユ河とトボル河との會合點なる丘上にあり、トボルスク省の主地にして、外觀よく人目を惹く。舟運の便を有し、附近の地方に於ける市場たり。

六七、西比利亞の主要都市の人口

浦潮斯德	九〇、一六二(一九〇九年)	イルクツク	七五、六九七(一九〇四年)
トムスク	六七、四一九(一九〇四年)	クラスノヤルスク	四六、九一九(一九〇四年)
ハバロフスク	四〇、四〇二(一九〇九年)	ブラゴベシチエン	四〇、三九九(一九〇四年)
チタ	三九、一一七(一九〇四年)	トボルスク	二〇、二九二(一九〇八年)

六八、西比利亞鐵道

西比利亞の經濟界に一大革新の動機を與へたる西比利亞鐵道は、一八九一年現露國皇帝が皇太子たられし時、東洋の漫遊を了り、陸路西比利亞を経て還御の途次、浦潮斯德に於て、其の起工式に臨まれ、手づから第一礎石を置かれたるに初まり、西に於ては其の翌年ウラル山下のチェリヤピンスクに於て起工せられたり。浦潮斯德を發したる烏蘇里線は早くも一八九七年黒龍江畔のハバロフスクに達したれど、是より前途の黒龍江線は工事困難なるを以て之を中止し、全力をチェリヤピンスク市に發したる西線に傾注し、着々歩武を進めて、一八九九年にはバイカル湖を中間の連絡所として、湖西は固より、湖東はシルカ河畔のストレチェンスクに達し、又之より分るゝ一線は清國境の滿洲に達し、殆ど全線の開通を見るに至り、東西線の延長凡そ四千八百露里、敷設費約三億圓を要したり。其の後北滿洲を横斷する東清鐵道之より岐れて大連に至る支線及びバイカル湖廻岸線全通し、此の敷設費約四億圓、茲に歐亞の交通は始めて敏活に行はるゝに至れり。而して露西亞は、更に第二期の事業として、目下全線の複線及び黒龍江線の工事に着手中なれば、早晚西比利亞の交通上に一段の面目を施すに至るべし。

四、中亞細亞

要旨

中亞細亞は亞細亞の歴史上看過すべからざる一地方なれども、現世の經濟上及び我が國との關係上重要な地にあらず、此の地方につき吾人の特に注意すべきは既に清國の條下に於て略述したるが如き境上貿易及び清露英露各間外交關係を主なるものとするに過ぎず。但し此の地方は未だ學術上の探究遍からざる所なれば、文明國民の閑却すべからざる地方の一なるや論なし。要するに兒童に對しては、其の大體の位置、地勢、氣候、及び産業の、蒙古、新疆省等に類似せることを悟らしむるを要す。而して場合によりては一、二の主要都市、舊蹟等につき略述するを妨げず。

本文解説

中亞細亞

中亞細亞は西比利亞の西南に連れる亞細亞露西亞の一部にして、東は清國の新疆省及び蒙古に隣り、南は英吉利の保護國たるアフガニスタンと波斯とに接し、西は世界の最大湖たる裏海を隔て、コーカシャと相望み、西北は歐羅巴露西亞に連る。東南境には世界の屋根と稱せらるるパミール高地ありて、大部分中亞細亞に屬し、其の東北には天山、アルタイ兩山脈の、清國の方面より延ひ來りて起伏するあり。南方にはヒンズークシ、其の他亞細亞大山脈の西南派を控へて、中央に低地を含み、裏海沿岸には海面より低き所あり。且、海洋に遠さかるを以て、地勢、氣候共に新疆省に於て見たる所と殆ど同様なるが上に、地味一般に瘠薄にして、沙漠、草地の多きことも、亦新疆省、蒙古地方に酷似せり。而して住民は新疆省と同種族の土耳其族大多數を占めて、盛に馬、牛、

駱駝・羊等の遊牧を營み、地方によりては平均人口百人に對し、馬百二十五頭、牛四百四十頭、駱駝二十六頭の多きに及べり。又東北部のオビ河流域及び東部の河谷にありては、地味概ね肥沃なれば、定住の農牧民ありて、良質の小麥・裸麥・果實・綿等の農産物を産出すること少からず、又各地の遊牧民中にも、近年灌漑の方法を講じ、定住して農牧に従事するものあるに至り、他の遊牧民は之が爲め自在に曠野を遷徙するの便を失ひ、遊牧上には一頓挫を來したる傾向なきにあらず。要するに中亞細亞は新疆省蒙古等と共に、等しく沙漠草地の地方と稱せらるれども、東・南・北に偏したる地方は肥沃の地多くして、産業比較的盛に行はれて、都市の發達稍著しく、全地について見るも人口密度遙に西比利亞の上にあり。住民は主に厚く回教に歸依する土耳其族にして、露

裏海

國人は全人口の七分の一を占むるに過ぎず。これ亦西比利亞と大に趣を異にする所なり。

裏海は歐亞間の大陥没地に湛へたるものにして、長さ約三百里、幅約六十里乃至百里、面積我が琵琶湖の約六百倍に及び、實に世界第一の湖水たり。數多の河川を受くれど、吐口を有せざる爲め、蒸發によりて水量を節制し、水質鹹味を帯ぶれども、外海の如く著しからず。水面の高さは外海面より低きこと約九十六尺、沿岸の大部分も外海面より低し。中亞細亞・ユーカシヤ・歐羅巴露西亞の各間及び是等と波斯とを連絡する重要な水路となり、又鱒魚を始めとし、鮭・鱸・海豹等の水産物に富めり。

(附言) 中亞細亞の水系については参考一〇及び一一を見よ。

参考

六九、中亞細亞の都市と交通

中亞細亞は中央に沙漠性のツラン低地を含みて、此處にアラル海を湛へ、シル・アムの二大内地河の注入せる状、恰も新疆省なるタリム盆地のタクラマンカ沙漠に湛ふるロブノル湖にタリム河の流入せるに似たり。而して本地方に於ける都市の發達も亦彼と趣を同じうして、沙漠の周邊即ち諸川の上流地方にあり。又イルチシ流域は風土西南西北利亞的にして、都市の著しきものあり。

タシケント

タシケントはシル河の一小支流に臨み、トルキスタン總督の駐在地にして、亞細亞露西亞第二の都會たり。市街新舊の二部に分れ、新市街は露西亞町にして、總督府、高等學校、圖書館、博物館、天文臺等あり、露西亞人の此の部に住するもの約三萬人に及ぶ。舊市街は土耳其族の住する所にして、數多の回教寺及び隊商の宿舍あり、綿絹毛皮革等の工業行はる。附近の地は灌溉によりて農業よく行はれ、小麥、綿果實の産に富む。又本市はシル河系の水運及び波斯、印度等よりの隊商路の集合點にあたり、此等の地方と歐露との中繼貿易盛に行はる。此の地と歐露との間の貨物は、もと主に隊商により

サマルカンド

て運ばれしが、近年は、鐵道の便に依るもの多きを加ふるに至れり。

サマルカンドは、タシケントの西南、サラフシャン河沿岸の沃地にあり。往時は工藝大に發達して、亞細亞大都會の一に居り、又チムル帝の立てし一大帝國の首都となり、壯麗なる宮殿、回教寺院等の建物増設せられて、益々繁榮を極めたりき。今は僅に舊蹟を留むるに過ぎざれども、而もなほチムル帝墳墓の圓頂閣は儼然として人目を惹き、其他回教寺院には中亞細亞に於て最も壯麗なるものありて、同教徒の靈地たり。タシケントの如く、舊來の工業の見るに足るもの少からず。又新設の露西亞人町は舊市街の狹隘頽廢せるに反し、頗る整齊にして、壯觀を呈せり。

コーカンド

コーカンドは、シル河上流の河谷にあり、一八七〇年まで獨立酋長國の首都たりし所なれども、今は市街の殆ど全部新式に改造せられ、壯觀を呈し、トルキスタン第一を以て稱せらるゝ勸工場あり。アンヂジャンは、コーカンドの東方に位し、外カスピ鐵道の終點にあたりて、清國の新疆省に近く、塹濠を繞らせる要塞あり。ナマンガンは、コーカンドの東北シル河の右岸に在り、回教寺院多く、果實、皮革、羊毛、綿等の産すること、トルキスタンの他の主要都

ナマンガン

アンヂジャン

メルブ

市と趣を同じうす。メルブは、波斯境に近き所に位し、外カスピ鐵道とアフガニスタン線との分岐點にあたる。亞細亞第一と稱せらるゝ沃地に發達せしものにして、一時は學術の中心たりき。

クラスノボドスク

主なる鐵道

クラスノボドスクは裏海に臨める要津にして、外カスピ鐵道の起點にあたり、ボルカ河口のアストラハン及びコーカサスのバクトーとの間に汽船の往來頻繁なり。外カスピ鐵道は、一八七四年起工せられしものにして、メルブ・サマルカンド等を経て二線に分れ、一はアンデジャンに達し、一はタシケントに達す。又メルブよりはアフガニスタンのヘラット附近に至る支線を分つ。本線は最初露西亞南下の軍略上、企畫せられしものなれども、英露協約して、アフガニスタンを英國の勢力範圍と承認してよりは、主として通商上に利用せられ、近時開通せるタシケントより歐露のオレンブルグに至る線路と共に中亞細亞の交通上に一新生面を開きたるものなり。

ラヒバ・ボハラ

アム河の下流に相並びて、ヒバボハラは二會長國あり。共に露西亞の保護國にして、中央政府に對する政治的關係に於て他の地方と趣を異にす。各、同名の首府を有し、ボハラは中亞細亞に於ける回教文學の中心地たり。

オムスク

オムスクはオビ河系のイルチシユ河の右岸にあり、ステップ總督の駐在地にして、もと西シベリヤに屬したりしが、近年附近の地及びキルギス・ステップ地方と共に一總督管區を形成し、中亞細亞の一部をなすに至れり。イルチシユ河流域の肥沃の地を控へ、水運の便を有して、農牧業の中心地たるが上に、西比利亞鐵道の一要驛となりてよりは、清國新疆省地方の農牧産と西比利亞及び歐露の各工藝品との集配行はれ、市況益々盛況を呈せり。

七〇、中亞細亞主要都市の人口

- タシケント……一六四、七四九(一九〇四年) コーカンド……一一二、四二八(一九〇八年)
- アンデジャン……七四、三一六(一九〇八年) ナマンガン……七三、二七九(一九〇八年)
- サマルカンド……六六、一六六(一九〇五年) オムスク……六二、五七二(一九〇三年)

五、コーカシヤ

要旨

コーカシヤについては、先づ其の位置及びコーカサス山脈の形勢を明にし、次には域内の、コーカサス山脈によりて

南北の兩部に分れ、各地の地勢、産業等の趣を異にすること、並に南部の石油業及び其の中心たるバクラーについて知らしむるを要す。

本文解説

コーカシヤ

コーカシヤは裏海と黒海とに挟まれる地方にして、西北は歐露に接し、南は波斯及び亞細亞土耳其古に界し、亞細亞露細亞極西の地なり。域内の中央には、略、東西に亘れるコーカサス山脈あり、本洲大山脈の西南派の一支の一旦裏海に没し、再び現はれたるものにして、大體に於て雄偉高峻の相貌を呈し、殊に西北の半部に秀拔を極め、此處には一萬八千尺以上に達する高峰聳立し、實に西南亞細亞第一の大山脈たるものなり。域内はかゝる大隔牆の爲めに南北の兩部に分たるゝを以て、氣候、産業等の状態、南北の各部に於て大

バクラー

に趣を異にす。北部は直に歐露に連れる平原にして、沼澤地多く、氣候大陸性を呈すれども、地味は概して瘠薄ならず、草原に富みて、牧畜盛に行はれ、又小麥其の他の穀類を産すること多し。南部は北にコーカサス山脈を負ふが上に、南にも亞細亞西南派の重嶺を控へて、東西に長き溪谷を開き、北方の寒風の風蔭に當りて、氣候稍温暖に、降雨多く、地味概して北部に優り、穀類、牧畜の産に富めることは北部に類すれども、葡萄、煙草、繭、棉、茶等其の他の農産物をも産し、又其の東岸には、世界屈指の油田あり。概して人口の密度西比利亞の南部、中亞細亞の東部にも優りて、地域は亞細亞露西亞の三地方中最も小なれども、人口は正反對に最も多く、殊に南部は都市に富めり。

バクラーはコーカサス山脈の裏海に没せんとして半島を

なせる所にあり。大油田地の中心市場にして、附近の地には數百に達する石油井を控へて、盛に石油を精製し、産額の多きこと、亞米利加合衆國に次ぎ、世界第二に位す。而して其の石油は此の地より一方は鐵管によりて、黒海沿岸の港市に送られ、更に汽船にて歐羅巴及び諸外國に分配され、一方は裏海及びボルガ河系航行の汽船にて、裏海沿岸の各地方及び歐露の東部等に送られ、又此の地方に於ける汽車、汽船等の燃料に供せらる。もと我が國に輸入せらるゝもの少からざりしが、近年馬來油之に代り、露西亞油は全く其の跡を絶ちたれども、而も此の地方に於ける採油事業の進歩は、我が國の模範となすに足るものあり。

参考

七一、コーカシヤの地勢

コーカサス山脈

コーカシヤを南部の外コーカシヤと、北部の内コーカシヤとの二大部に分割するコーカサス山脈は、南東北西の走向を取り、其の東端は、アブシエロン半島となりて、一旦裏海に没すれども、再び裏海の東南隅に現はれ、同じ方向を取りてメルブとヘラトとの間に達し、西端は亦タマン半島となり、一旦ゲルチ海峡に斷たるれど、直に現はれてクリミヤ半島の山脈に連り、再び黒海に没すれども、更に崛起してバルカン山脈に連る。主として二條の並行山脈より成り、長さ約七五〇哩、中央より少しく東に偏する所を横斷する斷層によりて、西北部と東南部との二部に分れ、各部稍、地形を異にし、西北部は東南部に比し、一般に高峻に、幅狭く、本山脈の最高峯なるエルブルズ(五、六三一米)を始めとし、コシタウ(五、一五一米)等は此の部に聳立す。東南部は往々四千米以上に達する高峯あれど、高原性を呈し、幅廣く、且、西部の比較的單純の連脈をなせるに反し、支派亂走し、無數の横谷に穿たる。山勢概して南側に急斜し、北側に緩斜す。又山脈中には、エルブルズ等の如き火山質山岳ありて、温泉に富み、雪線は同緯度山岳に比して高く、氷河の發達著しからず。本山脈は、南北の大隔壁たれば、鐵道は之を避けて、東西兩端の地方を